休暇、帰省、さらに演習も！？

Ｍ１１

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
休暇、帰省、さらに演習も！？

【Ｎコード】
Ｎ９０３６Ｌ

【作者名】
Ｍ１１

【あらすじ】
突如持ち上がった、隊長陣の休暇話。そこで、隊長達はヴィヴィオを連れて海鳴へ帰省しようということに。その一方、機動六課には大規模演習の話が持ち上がる。ヴィヴィオを紹介することに不安が募るなのは。隊長抜きでの演習に戸惑う六課メンバー。果たして、どちらも無事に終わることが出来るのか？

事の始まり

「なのはちゃん、フェイトちゃん。海鳴へ行かへんか？」
部隊長室で開口一番、彼女の台詞はこうだった。
「え？な、何？どうしたの？」
「い、いきなりどういうこと？」
私、高町なのは一等空尉ともう一人の同僚、フェイト・T・ハラオウン執務官は、目を点にして先の台詞の発言元を見つめていた。
「あぁ、ちょう端折りすぎたな、説明」
「端折るも何も…」
「説明になってないよ、はやて」
あはは…と、発言者・八神はやて二等陸佐は笑って誤魔化した。
「実はな、レリック事件も一応終息したし、市街地および周辺の復興も目処がついた。そこで、本局の方から事件の功労者へのご褒美、という名目で休暇を取ることが出来るようになったんよ」
「へぇ～、本局も粋なことをするんだねぇ」
「どういう風の吹き回しなんだろう？」
私達三人が時空管理局に入局して十年。
こういったことはあまり…というか、滅多にない。こういうことには大抵、裏に主謀者がいる。
「もしかして…」
「…クロノ？」
「二人とも鋭いなぁ。そや、クロノ君の提案…というより、半強制な感じかな？」
「半強制！？」
思わずハモってしまう。
クロノ・ハラオウン提督。
執務官資格を持つ魔導士兼、次元航行部隊ＸＶ級艦船の艦長。さらに、フェイトちゃんのお義兄さんでもあるの。

「二人とも頑張り屋だから、なかなか休暇取らへんやん。いい機会だから休ませてやれ、と提督殿は言っておったよ？」
「そ、そんなことは…」
「ないんだけどな…」
二人で顔を合わせて苦笑する。
「特になのはちゃん？」
「は、はいっ！？」
いきなり話を振られてビックリ。
「ブラスターの後遺症、まだ残ってるんやろ？シャマルが嘆いとったよ～？」
「……返す言葉もございません」
ブラスターシステム。
自身の限界を超えて魔法の威力増大を図る、最大の奥の手にして諸刃（もろは）の剣。
使わないよ、と言っておきながら結局、ファイナルリミットまで解除しちゃったから…。
おかげで、体の至る所に後遺症が残っている。シャマル先生には診てもらってるけど完治するかは微妙とされている。一説には、数年の安静が必要とも…。
「なのはは本当、無茶ばかりするんだから…」
「フェイトちゃんも人のことは言えんと思うよ？真ソニックフォーム、かなりの無茶やないかな？お義兄ちゃんもかなりのハラハラもんやったらしいよ？」
「あうぅぅぅ…」
真ソニックフォーム。
防御力を削ってまで、フェイトちゃんの最大の特徴である機動力に特化したファイナルモード。
まぁ、二人とも、ここまで無茶しないと解決できなかったのが、レリック事件だったわけで…。
「お二人さんをいじめるのはこれくらいにして…必ず休暇を取るよ

うに、とクロノ君から念を押されてな？それなら私も…と便乗して休暇申請したら通ってもうて。この機会に海鳴へ行こか？という提案や」

海鳴市。

私とはやてちゃんの故郷。フェイトちゃんはミッドチルダ出身だけど、小三～中学までを一緒に過ごしてるし、義母であるリンディ・ハラオウン統括官とその家族が住む家が海鳴にある。

機動六課設立の初期に一度、任務で行きはしたが、帰省となるとかなり久しぶりだ。

「折角の十二月。年末年始は無理やけど、クリスマスの時期なら問題ないかと。ミッドには、クリスマスの概念がないからな」

ミッドチルダ。

時空管理局発祥の地。私達の『地球』とは別次元にある世界。魔法文化がもっとも進んでいる世界でもある。

「じゃあ、交代で行くんだよね？」

「順番はどうするの？」

「何言ってるん、三人一緒や」

「えぇぇぇぇぇぇぇっ！？」

フェイトちゃんと、一緒になって驚く。

「ほら、わたしん家はもう引き払ってるから、どちらかの家に泊めてもらわな困るし」

「あぁ、そっかぁ…」

はやてちゃんは、中学卒業して守護騎士達とミッドへお引っ越し。わたしとフェイトちゃんは、単身でこっちへ来たから…。

「あと、三人揃ってへんとすずかちゃんとアリサちゃんが怒るやろうし…」

「すずかはともかく…」

「アリサちゃんは確実に怒るだろうねぇ。”何で一緒に来ないのよ～っ！”ってね？」

その場面が安易に想像出来たのか、三人で笑い合う。

月村すずか&アリサ・バニングス。
聖祥付属小時代からの大親友。魔法という秘密がバレても、変わりなく付き合ってくれてる。彼女たちのおかげで、私達は管理局員を続けることが出来る。
「でも、三人同時に休暇を取って大丈夫なのかなぁ？」
「そこはそれ。根回しはしてあるよ」
そうだよねぇ。そうでなければ到底ムリだもの。
「さすがは部隊長」
「そない大げさなもんでも…」
謙遜して照れるはやてちゃん。
「今回はな、機動六課の実戦演習も同時期に行うことになってるんよ。指揮系統はグリフィス君に任せるし、補佐にシグナムがついてくれる。フォワードはヴィータがなのはちゃんの代わり。バックアップはヴァイス君とシャマルが固めてくれる」
な、何か凄いことになってるよ？
「まぁ、フォワード陣は私がいなくても充分戦力になるしね」
「今回の演習が無事に済めば、みんな立派な一人前だね」
「…んふふふ。甘いで、お二人さん。ここだけの話、ひと騒動起こるように裏工作してるんよ。本局のお墨付きで♪」
「は、はやてちゃん…」
「はやても人が悪い…」
はやてちゃんが黒いよぉ…。
「これも皆、六課メンバーの将来の為や。予定通りに演習が進んでも意味ないやん。これは、部隊長の愛のムチや」
まぁ、言いたいことはわかるんだけどねぇ。私も教導でよくやってるし…。
「ほどほどにね、はやて」
「ま、サプライズとして最後にお二人にも協力してもらうことになるんやけどな？」
「？？？」

どういうことなのかな？
「それより、日取りはどうしよか？演習の準備もあるから、二週間後ぐらいがベストなんやけど…」
「ん～…」
パネルを呼び出して、予定を確認してみる。
「私の方は、訓練スケジュールを少し調整すれば大丈夫かな。フェイトちゃんは？」
「…私も…ん、大丈夫かな。戦闘機人更正プログラムの第二段階の打ち合わせを明日ギンガとするから、そこで細かい調整をしてくるよ」
「…でぇ、お二人に私のお願いを聞いて欲しいんやけどぉ…」
「ど、どうしたの？改まっちゃって…」
「うん。帰省の際に、ちょう寄りたい所があんねんけど…海鳴行く前に」
「何処へ寄るの？」
「イギリスなんやけどな…」
「…あぁ、グレアム提督ね」
ギル・グレアム元提督。
はやてちゃんの足長おじさん的存在。良くも悪くも、はやてちゃんに深く関わった人物。管理局を希望退職したあと、故郷イギリスで隠居生活してるとか。この人がいなかったら、私達三人は出会ってなかったかもしれない。
「いいんじゃないかな」
「久しく会ってないんでしょ？」
「おおきに。ほんなら予定に組ませてもらうな。じゃ、これを踏まえて詳しい日程を、来週のミーティング後に詰めようか。それまでに色んな調整を本局としてくるから」
さ～て、何か忙しくなってきたよ？

事の始まり（後書き）

8／8　サブタイトル修正

一抹の不安

「…ということになりまして」
「良いんじゃないですか？なのはさんも、故郷に帰るのも久しぶりなんでしょう？」
その日の夕方、私は普段の身の回りや、ヴィヴィオの世話をしてもらっている、寮母のアイナさんに簡単な説明をした。
アイナさんは、六課配属時から私を階級付きで呼ばなかった。
ある時、その疑問を本人にぶつけてみた。そしたら…
『家で一尉なんて呼ばれたら、気が休まらないでしょう？私はこの寮では、皆さんの母親のつもりでいますから』
と、答えた。こういうさりげない心遣いが嬉しい。だから私は、安心してヴィヴィオを預けて、空へ上がることが出来る。
「来週のミーティング時に発表になると思いますので」
「わかりました。留守はお任せあれ。…ときに、なのはさん？」
「はい、何でしょう」
「帰省は良いんですけど、ヴィヴィオはどうしますか？預けていきます？」
一番の問題はそこ。
ヴィヴィオ。
悲しい生まれ方をしてきた、レリック事件の被害者である子供。色んな経緯があって、今は私が母親代わり。
まだ、見た目が五歳くらい。十歳であるエリオやキャロでも、預けるのには躊躇してしまうかもしれないのに、さらに年下のヴィヴィオでは、泣かれてしまうのは目に見えている。
あと、私はまだ自分の家である「高町家」にヴィヴィオを紹介していない。チャンスがなかった、と言えばそれまでだが…どんな反応をされるか不安でもある。
「私は連れて行こうと思います。置いて行くには小さすぎるし、ア

イナさんにも悪いし…」
「私の方はいいんですよ、それが仕事ですから。…でも、あの子の為を思うなら、連れて行く方が良いかと私も思いますよ」
「やっぱりそうですよね」
そんなやり取りをしているところへ…
「ただいまぁ～、あ、ママ～♪」
とてとてと走り寄って、私に抱きついてくる。それを、抱きかかえてあげる。
「おかえり、ヴィヴィオ。お散歩は楽しかった？」
「うん！」
「フェイトさんも、おかえりなさい」
「うん、ただいま」
「ごめんね、フェイトちゃん。お散歩頼んじゃって」
私は、急な仕事のために代役を頼んでしまった執務官に謝る。
「あ、いいよいいよ。急な呼び出しだったんだし」
「あのねあのね、ざふぃーらがのせてくれたの！」
話によると、散歩の途中でザフィーラに会い、背中に乗せてもらったり、色々遊んでくれたそうだ。そのことをヴィヴィオが一生懸命に話してくれる。
「あらぁ～、それは良かったわねぇ。それじゃ、もうすぐご飯だから、お手々を洗ってこようか～」
「はぁ～いっ！」
元気よく返事をして、洗面所へ向かうヴィヴィオ。アイナさんもそれについて行く。
「ザフィーラさんにお礼言っておかないとなぁ」
「大丈夫だと思うよ？ああいうことは、エリオ達で慣れてるし」
「そぉ？」
「まぁ、その辺はなのはに任せるよ。それより、アイナに話したの？帰省のこと」
「うん。ヴィヴィオも連れて行くことも話した」

「そう。その方がいいね。ヴィヴィオにとっても」
そこで、先ほど浮かんだ不安材料を執務官に打ち明けてみた。
「高町家のみんながどう反応するか、が怖いけど…」
「魔法の時もそうだったけど、みんな順応性が高いから大丈夫じゃないかな？」
いともあっさりと発言するフェイトちゃん。…大丈夫かなぁ。
「なんなら、義母さんに根回し頼んでみようか？」
「…それはいい。人として間違ってるような気がするから」
「そう？」
「なんのおはなし？」
視線を落とすと、いつの間にかヴィヴィオが傍にいた。
「ん？ちょっといいお話」
「いいおはなし？」
ヴィヴィオが『？』の表情で首をかしげている。
「ママ達、お休みを貰えることになってね、ヴィヴィオを連れてお出かけしようか、ってフェイトママとお話ししていたの」
「おでかけ？どこへいくのっ？！」
まぁまぁ、喜んじゃって…。
「なのはママのお家へ行こうか、ってね」
「んん？おうちはここだよ？」
「確かに…。厳密には違うんだけどね」
あはは…、やっぱり難しいか。
「あのねヴィヴィオ。なのはママのママがいるお家へ行こうか、って言ってるの」
フェイトちゃんが、ヴィヴィオにわかりやすく説明してくれた。
「ママにもママがいるの？」
「いるよ～。ただし、ミッドからすご～く遠い場所だけどね」
「確か、第９７管理外世界…でしたよね？」
第９７管理外世界・現地惑星名称『地球』。
所属する時空管理局では、私の出身世界をこう呼んでいる。

十年前、「ＰＴ事件（プレシア・テスタロッサ）」というものが起こり、それが私と管理局との初めての接点。私が初めて『魔法』と出会ったきっかけの事件でもある。
地球には、ミッドチルダみたいな魔法文化はないし、魔法資質を持った人間が殆どいないため、大規模次元災害等が起きにくいことから、基本的には『管理外』とされている。
ＰＴ事件、その後に起こった『闇（やみ）の書事件』、この二つの事件で、私・フェイトちゃん・はやてちゃんが出会い、今に至る。
「アイナさん、詳しいですね」
「いえ、たまたまなのはさんのパーソナルデータを拝見する機会がありまして、初めて見る出身世界だなぁ、と…。それで覚えていたんですよ」
「そうですねぇ。他に知っている範囲で同じ出身世界は、グレアム元提督とナカジマ三佐のご先祖様…くらいですかねぇ」
「すご～～～くとおいの？」
ヴィヴィオが疑問を投げかけてくる。
「そうだね。転送も時間が掛かるし」
「どうしてなんです？」
アイナさんは一般人だから、魔法に関してはあまり詳しくないらしいので、時々魔法に関する質問をされるの。
「やはり『管理外』ですから、直通の転送ポートが開けないんですよ。それでも今は、ハラオウン家が向こうにあるので、だいぶ改善されてきましたけど…」
「協力してくれる友達がいるので、かなり助かってます」
フェイトちゃんからも、補足の説明がなされた。
「里帰りも、人によっては大変なんですねぇ…」
「あはは…」
こればっかりは苦笑するしかない。
「ヴィヴィオ、行ってみたい？」
「いってみたいっ！」

目がキラキラしてる。この辺はやっぱり子供だねぇ。
「じゃ、決まり！…ということで、ご飯にしよっか」
「フォワードのみんなも待ってるかもね」
「それじゃ、みんなで食堂に行きましょう～」
「は～～いっ！」

衝撃の発表

帰省の話が出てから一週間後。
機動六課隊舎、ミーティングルーム。
「おはよ～、エリオにキャロ」
ライトニング隊の二人を見つけたスバル・ナカジマ二等陸士(りくし)が挨拶をする。
「おはようございます！」
「はい、おはよう」
「何か人多いね、ティア」
「そうね、六課の各部署の主要メンバーが集まってる感じかな？」
ティアナ・ランスター二等陸士が、スバルと部屋を見渡して感想を漏らす。
「六課の初日以来じゃないですか？こんなに人が集まるなんて…」
「新しい事件か何かでしょうか、レリック絡みの…」
エリオ・モンディアル三等陸士とキャロ・ル・ルシエ三等陸士のちびっ子コンビは不安な表情を浮かべている。
「う～ん、レリック絡みはもうないはずだけど…」
「あ、シャーリーさんがいるから聞いてみようよ。シャーリーさ～ん！」
スバルは、シャリオ・フィニーノ一等陸士を見つけ、挨拶をしていた。
「あ、みんなおはよう～」
「何かあったんですか？ただ事じゃない雰囲気なんですけど…」
「いやぁ～、私も詳しいことは分かんないんだよね～。ただ、部隊長から重大発表がある、としか聞いてなくて…」
「俺もだよ。何かが起こる雰囲気だよな、この空気は」
「ヴァイス陸曹(りくそう)！」
突然現れたヴァイス・グランセニック陸曹に、フォワード陣が驚

く。
「んだよ、そんなに驚くなよ。こっちが逆にビックリするぜ」
「す、すいません…」
エリオが代表して謝罪する。
「いいって。しっかし何だろうな、重大発表ってのは…。アルト、何か聞いてるか？」
話の矛先をアルト・クラエッタ二等陸士に向けた。
「何も知りませんよ。ねぇ、ルキノ？」
「はい。ただ、部隊長となのはさん達が、頻繁に打ち合わせらしきものをしていましたけど…」
「へぇ～～」
さらに話を振られたルキノ・リリエ二等陸士が、その現場を目撃していたのか、そう答えていた。
「おぉ、みんな勢揃いやな？」
そこへ、部隊長・八神はやて二等陸佐が隊長陣を引き連れてミーティングルームに現れた。
「敬礼！」
グリフィス・ロウラン准陸尉（じゅんりくい）の号令がかかる。
「はい。ではとりあえず、手近な席に座ってくれるか？」
三々五々、腰を下ろし部隊長の発言を待つ。
「まぁ、重大発表に関して色々な憶測が飛んでるようやけど、本題に入る前に一つ、お知らせがあります」
部隊長はそこで一旦発言を切り、部屋を見渡す。スターズ分隊・ライトニング分隊・ロングアーチスタッフ・バックヤードスタッフ…一部の交代要員を除き、機動六課主要メンバーが一堂に会している。
「え～…この度、部隊長である私と、スターズ及びライトニングの両隊長は、本局上層部の意向で休暇を取ることになりました」
ざわざわざわ…。
室内がわずかに騒がしくなった。

「休暇の期間はどのくらいですか？」
とある隊員から質問が飛ぶ。
「一応、一週間ほどの予定です」
そんなに？…大丈夫なの？…と、色んな声が聞こえてくる。
「まぁ、半強制的に休みを取れ、と言われてるんで仕方がない部分もあるんや、堪忍な？それに、何か起きてもよっぽどのことがない限り、出動命令は来ないはずや。六課は特殊任務に特化した部隊やからな」
そうなのか？そうらしいよ？…安堵な雰囲気が漂い始めたところで…。
「そこで、こっからが本題や」
との部隊長の発言に、緊張が全隊員に走る。
「レリック事件も終わり、みんなも一回り成長した。その成長ぶりを確かめるいい機会なので、私達の休暇と同時期に、実戦演習を行います。私ら抜きでな？」
えぇ～～～～～っ！と驚きの声があちこちで上がる。
「演習も休暇も、日時は一週間後。演習の詳細は、後々部署ごとにブリーフィングを行うので、そのときに。今から、演習の布陣を簡単に発表します。グリフィス君」
「はいっ！」
「今回の演習で、六課の総指揮権を君に託します。言うなれば、私の替わりや」
おぉ～…周りから歓声が上がる。
「わ、わかりました。僭越ながら拝命いたします」
「ま、交替部隊の時とやることは変わらないはずや。一応シグナムに補佐役をしてもらうから、しっかりな？」
「よろしく頼むぞ、グリフィス」
「こちらこそ、よろしくご指導のほどお願いします」
がっちり握手するグリフィスとシグナム二等空尉。
「それから、シャーリーとルキノ」

「は、はいっ！」
「二人は一緒に組んで、演習区域の広域管制担当や」
「わかりました。頑張ります！」
「よろしくね」
そして、臨時のコールサインが各人に割り振られていく。
「サインは、グリフィス君がロングアーチ００（ゼロ）。シャーリー・ルキノ・シグナムの順で０１・０２・０３」
「…あのぉ～、私は？いらない子ですかぁ？」
おずおずと涙目で訴えるアルト。通信士であるにもかかわらず、管制担当にならなかったので、落ち込んでいるようだ。
「あぁ、アルトには別の任務があるんよ。ちょう、待ってな？」
「え？」
はやての意外な一言に、アルトは目が点になる。
「次にフォワード。今回フォワード陣は、ライトニング隊をスターズ隊に接収して、一つのフォワード隊とします。呼称はスターズ隊。隊長はヴィータ。コールサインはスターズ００（ゼロ）」
「おう」
あらかじめ言われていたのか、ヴィータ三等空尉は普通に受け止めている。
「副隊長にティアナ。以下、スバル・エリオ・キャロ。サインは順に、０１・０２・０３・０４」
「あ、あたしが副隊長！？」
「ティア、すご～いっ！」
副隊長に抜擢されたティアナは、驚きの表情を隠せない。スバルはスバルで、相方を素直に祝福している。
「おめでとうございます、ティアさん」
「頑張ってください、副隊長」
キャロとエリオからも祝福される。
「…まぁ、どこまで出来るかわからないけど、よろしくね」
照れながらも、ティアナはようやく状況を受け入れた。

「ティアナ。これは今回の演習のみの特例処置やけど、良い勉強になるから、しっかりな」
「は、はいっ！ありがとうございます」
「他のみんなも、普段とサインが違うから間違えんように気ぃつけてな」
「はいっ！」
「そして、リイン」
「はいですぅ～」
　返事をしながら、つぃ～っと空中を移動する小さな上司、リインフォース？（ツヴァイ）空曹長。
「リインはロングアーチとリンクしつつ、フォワード陣に帯同して主に現場の管制担当な。センターガードであるティアナと主に行動して、二人目の副隊長な感じかな？」
「二人で現場をコントロール、ですね？」
「そないな感じやな。サインはスターズ０５で」
「わっかりましたぁ～っ！」
　やけにノリが軽いように見える空曹長であった。
「シャマルにヴァイス君」
「はいっ」
「二人には今回、後方支援としてフォワード隊に参加してもらいます。サインはそれぞれ、０６と０７」
「えぇっ！？」
　これには本人達のみならず、周りも驚いた。
「私はまぁ、守護騎士でもその立ち回りですから、問題ないんですけど…」
「先生はともかく、俺もっすか？」
「そうや。ただ、基本的に二人は隊とは別行動になる予定や」
「と、言いますと？」
「シャマルのポジションは、陸士部隊を守る最終防衛ライン。クラールヴィントの特性を考えると、妥当な位置やないかと」

「そうですね」
シャマルは部隊長の言いたいことがわかったのか、納得しているようだ。
「ヴァイス君も、折角の狙撃の腕を腐らせるんはもったいないよ？ストームレイダーと共に、リハビリの一環と考えてもろてもええよ」
「まぁ、いいっすけど…輸送担当はどうするんです？」
頭を掻きながら了承するも、自分の今までの任務をどうするのか、疑問を持つ空曹。
「そ・こ・で！アルトの出番や」
「えぇっ、私ですかぁっ！？」
ここで声が掛かるとは思ってなかったらしく、アルト本人は飛び上がるほどビックリしていた。
「レリック事件での功績を買い、大抜擢させてもろたよ。元々輸送隊にいたんやし、その辺りは大丈夫やろ」
「はぁ…まぁわからない世界じゃあないですしね」
そう、アルトは元々地上の輸送部隊の所属。機動六課設立の際に、はやての『裏技』で異動してきた人物の一人。ちなみに、なのはやフェイトの六課への『出向』も裏技の一つである。
「あと、この演習が実質のAライの実技試験になるからな」
「マジですかぁ？！」
「マジもマジ。将来的に取るつもりやったんやろ？ヘリのAライセンスを。演習が無事済めば、筆記試験だけでライセンスが取れるように話をつけてある。頑張りや」
「あ、ありがとうございますっ！」
勢いよく返事をする通信士。
「アルトのやつも、いよいよAライかぁ…」
「んふふ～、頑張るぞ～！」
「よかったね、アルト」
「ありがとう、ルキノ」
このあと、バックヤードスタッフに役割分担等を説明していく。

今までのやり取りで、かなり大がかりな演習になることが伺える。
「何だか凄いことになってきたねぇ、ティア」
「そうね…いつもの模擬戦とも根本的に違うし」
「大がかりなのが、何となくわかります」
「でも、今回はなのはさん・フェイトさんがいないんですよね…」
フォワード陣が感想を漏らす中、キャロだけが一人不安がっているようだ。
「大丈夫だってキャロ。いつも通り、練習通りでＯＫ。そういう為のなのはさんの訓練なんだから。マッハキャリバーも過去にそう言ってくれたし」
「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ（問題ありません）.」
スバルに呼応して、マッハキャリバーが返事をする。
「ありがとう、マッハキャリバー」
「Ｄｏｎ'ｔ（お気になさらずに）　ｗｏｒｒｙ,　Ｌａｄｙ.」
「というわけで、二人は明日からフォワード陣の訓練に参加してもらいます」
「そういうことになるんすねぇ…」
「まぁ、がんばりましょう」
がっくりうなだれるヴァイスをシャマルが励ます。
「よろしくです、ヴァイス陸曹」
ティアナが握手を求めた。
「まぁ、こうなったらやるしかねぇな。おぅ、ひよっこ共、ふぬけた態度でいるとストームレイダーで打ち抜いちまうぞ？」
「ふぇぇぇっ！」
「どこから狙われるかわかんないから、怖いですよ…」
恐ろしい発言に、フォワード陣が萎縮する。
「お前はそんなことが出来る立場か、あぁ？」
気がつけば、ヴァイスの後ろにヴィータが仁王立ちしていた。身長は彼よりは低いが、もの凄い威圧感である。
「じょ、ジョークですよぉ、ヴィータの姐御（あねご）…」

「グラーフアイゼンの餌食になりたくなかったら、真面目にリハビリするんだな」
「そーですよ！ヴァイス陸曹」
リインまで混ざって、彼を諌めてる。彼女たちにはまだまだかなわないヴァイスであった。
「八神部隊長、質問です」
「ほい、何かなシャーリー」
「今回、かなりの布陣変更ですけど、何か裏が有るんですか？」
ここにいるみんなが、大なり小なり似たような疑問を感じているらしく、結果シャーリーが代表して聞く形となった。
「さすが執務官補佐をやってるだけあって、鋭いなぁ」
「フェイトさんの教育の賜（たまもの）です」
「そ、そんなことはないけど…」
胸を張る執務官補佐、照れる執務官兼・ライトニング隊長。
「…実は、演習先にミッド北部の廃棄都市区画及び元第八臨海空港を使う予定ですが、先のレリック事件の反省点から、今回は本局と地上本部との連携強化がテーマの一つにあるので、他の陸士部隊等との合同演習、という形をとります」
ええええ～～～～っ！と、驚きの声があちこちで上がる。
「そして、陸士部隊側の演習の総指揮を担当してくださるのが…こちらの方です。どうぞ、お入りください」
紹介して現れた人物が…。
「初めて…じゃない者もいるかな。陸士１０８部隊のゲンヤ・ナカジマだ」
「と…父さん？」
ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐。
陸士１０８部隊の部隊長。スバルの父親でもある。
「今回、お嬢…うぉほん！八神二佐から相談を受け色々協議した結果、陸士隊のまとめ役をすることになった」
あまり知られてはいないが、ゲンヤとはやては師弟関係にあるよ

うである。今でこそ階級は逆転してしまったが、研修生時代からはやてはゲンヤを師と仰いでおり、その関係が今でも続いているようだ。
「陸士隊からは、うちの１０８と１０４、東から２０１と２０３、西の４２２、災害救助訓練も兼ねて南から３８６も参加する予定だ」
「私達の古巣も？！」
３８６部隊…かつて、ティアナとスバルが所属していた災害救助部隊だ。そこも参加すると聞いて、二人は驚いていた。
「あと、本局から航空隊も参加することになってるんよ、な？シグナム」
「はい、首都航空隊と航空武装隊から選りすぐりがチームを組んで参加予定です」
「かなりの大規模演習になる。心して掛かってくれ」
「はいっ！！」
ゲンヤから檄が飛ぶ。
「そして、今回の演習を評価してくださる人なんやけど」
そう言ったはやての頭上に、突如パネルが現れた。
「本局次元航行部隊艦船クラウディア艦長、クロノ・ハラオウンだ」
隊長陣を除く六課メンバーには、意外な人物が現れた。
「今回の演習に関して、色々な手配等をさせてもらった。本局にとっても地上本部にとっても、有意義な演習になることを期待している」
そして、パネルがもう一枚現れた。
「聖王教会騎士（せいおうきょうかいきし）、カリム・グラシアです」
またもや意外な人物が現れた。
カリム・グラシア。
ミッド極北部・旧ベルカ自治区にある聖王教会・聖王騎士団の騎士。さらに、古代ベルカ式魔法の稀少能力（レアスキル）・預言（プロフェーテン）の著書（シュリフテン）の継承者でもある。
「六課後見人の一人である私ですが、今回は時空管理局の理事に名

を連ねる立場として、公正に評価をさせていただきます」
そして、さらにパネルがもう一枚。
「本局人事部、レティ・ロウランです」
「か、母さん?!」
レティ・ロウラン提督。
本局で、人事から有事に対する人員の手配などを手がける、人事部のトップ。グリフィスの母親でもある。
「人事部及び運用部の観点から、多角的に評価させていただきます」
「…とまぁ、評価する方も豪華キャストになっている。気が抜けないぞ」
「はいっ!」
「ちなみに、クロノ提督は次元世界の、騎士カリムは地上世界の、レティ提督は航空の立場での評価も担当する。みんな、がんばってな」
「はいっ!」
はやてからも檄が飛ぶ。
「演習期間は、私達の休暇に合わせて一週間ほどになります。原則、隊長陣はノータッチ。ブリーフィング後の打ち合わせから、この特別体制で動いてもらいます。ではグリフィス君、最初の伝達を」
緊張した面持ちで、グリフィスが皆の前に立つ。
「部隊長代理を賜ったグリフィスです。早速、演習についての諸々の打ち合わせを行いますので、ここにいるメンバーは、昼食後もう一度ここに集合してください」
「了解っ!」
「ナカジマ三佐もご同席願います」
「あぁ、わかった」
「では、各部署に分かれてブリーフィングに入ってな。あ、フォワード陣は合同の方がええな。場所は…」
「オフィスルームでいいんじゃねえか?書類も色々作らなきゃだしな…」

「そうだね」
ヴィータの提案に、なのはが頷く。
「ほんなら、場所はそちらにお任せするわ。では、ロングアーチはっと…」

帰省の相談

「取りあえず、、無事動き出したってとこかな？」
同日午後。
隊長陣を除いての打ち合わせが始まったので、自然と部隊長室に集合していた私達三人。
「…大丈夫かなぁ」
「これも訓練の一環だと思えば」
「そうや。前向きに、前向きに」
そうは言っても…ねぇ。
「それよりも、もっと大事な話があるやん」
え？
「帰省の話だよ、なのは」
あ、そうか。まだ詳しく相談してなかったよね。
演習の準備にちょっと手間取ったから、細かいところはまだ何も決まっていないんだった。
「それで…はやてちゃんは、イギリスに寄ってくんだっけ。途中まで別行動？」
「それなんやけど…我が儘ついでに、二人もついてきてくれへんやろか？」
「私達も？」
はやてちゃんの意外な申し出に、フェイトちゃんも驚いていた。
「海鳴での滞在時間が短うなってしまうんが心苦しいのやけど、二人にも是非付き合うて欲しいんや。…だめかな？」
あぁ、まただ。
肝心なところで一歩引いてしまうのは、はやてちゃんの悪い部分。
四年前に部隊設立の夢を語ってくれたときもそうだった。
『私、やっぱ自分の部隊を持ちたいんよ。…（中略）…でな、私が

もしそんな部隊を作ることになったら、フェイトちゃん、なのはちゃん、協力してくれへんかな？』
『……』
『…もちろん、二人の都合とか、進路とかあるんは…わかるんやけど…でも…その…』
『はやてちゃん、何を水くさい…』
『小学三年生からの付き合いじゃない』
『……』
『それに！』
『あっ』
『そんな楽しそうな部隊に誘ってくれなかったら、逆に怒るよ？ね、フェイトちゃん』
『うん』
『あ…おおきに～、…ありがとな』

あの時は、そう言って心の負担を軽くしてあげたんだっけ。そのおかげで、『前線で教官』という夢のような立場にいることが出来る。
「別にダメじゃないよ？友達の願いは聞いてあげないと」
「そうだよ、はやてちゃん。変な遠慮はいらないよ」
もう十年友達やってるんだもん。
「おおきに…ありがとう」
「そんなこと…逆に私達がお邪魔しても良いのかなって思うんだけど…」
「大丈夫やよ。そんなに長い時間はおらんしな」
え、どういうことなの？
「一泊はするんでしょ？」
「いやいや、顔を出したらすぐ帰るつもりや」
ますます謎めいてきたよ？グレアムさんも、はやてちゃんとお話ししたいでしょうに。

「まぁ、そこは置いといて…イギリスから日本に行って、まずは『喫茶翠屋(みどりや)』かな」
そうだ。ヴィヴィオの問題をまず解決ないと。
「どう紹介するの？」
フェイトちゃんが、興味津々で私に聞いてくる。
「どうも何も、普通に紹介するしかないでしょ？私の子供だって」
「あちゃ～、あかん。それはあかんと思うよ」
あぅ、はやてちゃんにダメ出しされてしまった。
「考えてもごらん、なのは。子供を紹介する、ということは相手は誰だ、ということになる。そうなると、お父さんが黙ってないと思うよ？」
「え、だって結婚してないんだから相手なんていないじゃない」
「普通に考えれば、結婚せんで子供なんて出来へんやん。その辺がわからん歳でもないやろ～」
あ、そうか。お父さんとお母さんがいて、私が生まれたんだから…まずは、ヴィヴィオを引き取った経緯を説明しないといけないんだね。
「シングルマザーをやってるんだから、その辺はきちっと説明しないと」
「今時は、子供が出来てから結婚する人も多いしな」
「『出来ちゃった結婚』ってやつだね」
「あはははは…」
そうだよね。相手がいないと子供なんて出来ないし…難しいよね、人間関係って。
「取りあえず、初日は翠屋(おみせ)から私の家に来る…ということでいい？」
「そうやね。流れ的にそうなるかな」
「なのはの家、久しぶりだね。この前は寄れなかったし」
そう。私達は春に一度、海鳴へ来ている。
あの時は、聖王教会からの依頼で遺失物(ロストロギア)探しをしていたので、時間的に家に寄ることが出来なかった。お店には、差し入れを持って

行く為に少し寄ってきたけど。
「そのあとハラオウン家で、月村家、バニングス邸…かな？順番的に」
順番は色々悩んだけど、結果的に先述の順番に決まった。
「向こうには連絡してあるの？」
「すずかちゃんを通して、アリサちゃんにもしてもらってるよ。そろそろ返事が来ても…」
そのとき、はやてちゃんのデスクから通信の着信を知らせるメロディが鳴った。
「あぁ、ちょうごめんな。…もしもし、八神二佐です。…おぉ、すずかちゃん」
何という偶然か。私とフェイトちゃんは、顔を見合わせて驚いた。
相手がすずかちゃんとわかると、はやてちゃんは私達にも声が聞こえるようにしてくれた。
『もしもし、はやてちゃん。今、忙しいかな？』
「ううん、大丈夫やよ。今ちょうど三人が集まってるとこなんよ」
『あ、なのはちゃん達もいるの？』
「すずかちゃん、久しぶり～」
「すずか、元気そうだね」
『うん、元気元気！』
声からしても元気そうだ。
ミッドでは、普通の通信でもスクリーンパネルで相手を見ながら話が出来るのだが、『地球』では未来技術（オーバーテクノロジー）になるので、向こうとの世界と連絡を取る場合、特殊な回線で繋いでもらっている。向こうからしてみれば、普通に電話をかける要領でこちらと通話が出来るようになっているの。ハラオウン家に関しては、ミッド人が住んでいるので問題はないんだけど。
『こら～っ！あたしも出しなさいよっ！』
「おろ？アリサちゃんもそこにいるん？」
『今日うちに遊びに来ていてね、みんなの帰省の話をしたら、今す

ぐ電話しなさいっ！て言われて、電話した次第なの、ってアリサちゃん！？』
『はやて！何でもっと早く教えないのよっ！』
どうやらアリサちゃんに、電話を奪われたようね。
アリサちゃんも相変わらずだぁ～。
「アリサ、落ち着いて…」
『フェイト、これが落ち着いていられますかっての！あまりにも急じゃない。しかも、クリスマスに合わせて来るらしいじゃない』
「堪忍なぁ、アリサちゃん。こっちのスケジュール決まったの、一昨日なんよ～」
「休暇の話も、先週急に出た話だから…」
『…まぁ、忙しいのは達だから、あえて目を瞑るわ。おかげで、こちらのスケジュールが大幅変更を強いられたわよ』
そうだよねぇ。二人とも良家のお嬢様だもんねぇ。
しかも大学生だし、プライベートも忙しいでしょうとも。
「それはますます堪忍なぁ」
『いいのよはやて、気に病まなくて。おかげで、パパの会社のクリスマスパーティーの参加をキャンセルできたしね』
「ええの？大事なパーティーやないの？」
『媚を売るだけの輩を相手するパーティーはゴメンだわ。ねぇ、すずか？』
『あはは…まぁ、それはともかく、私の方も大事な友達が来るから、と話したら割とあっさり許可が出たわ』
「ごめんね、アリサ、すずか」
あらら、フェイトちゃんが恐縮しちゃってる。
『ううん、いいのよ。アリサちゃんも口ではああ言ってるけど、嬉しいのよ』
『当たり前じゃない。私達のかけがえのない親友達が、わざわざ時間を割いて来てくれるのよ？』
そこで、私はふと思い出したことをすずかちゃんに聞いてみた。

「そうだ、すずかちゃん。忍さん元気？」
『お姉ちゃん？元気だよ。今ねぇ、ええと…何て言ったかしら…聞き慣れない地名で…』
『ニュルブルクリンクよ、すずか』
『そう！そこにいるみたい。恭也さんも一緒だって』
やっぱり一緒ですか。
私の兄・高町恭也と、すずかちゃんの姉・月村忍さんは、両家公認の恋人さん同士。つきあい始めてかなり経つけど、未だに結婚しない。前に一度、兄に理由を問い詰めたのだが…。
「恋人兼ボディーガード。この関係が一番居心地が良いのさ」
とか何とか言って、うまく誤魔化された。まぁ、本人同士が幸せなら良いんだけどね。
『それで、正式にいつ来るの？』
「来週の頭。ちょう寄り道してくるから、二十日には着くはずや」
『春の時みたいに、うちのコテージに迎えに行けばいいの？』
「あぁ、今回は義姉さんに任せてあるから、直接お店に集合でいいよ。ごめんね」
『いいって。気にしない。着いたら、電話の一本でもちょうだいな』
「それじゃ、長話もなんだから…」
『あぁ！ごめんなさい。仕事中なのに長々と…』
「気にせんでええよ。たまたま時間が空いてたしな？」
『プレゼント兼お土産、期待しているからね』
「何気に凄いプレッシャーなんですけど…」
『あはは…じゃあ、ごきげんよう』
「またね、すずか、アリサ」
プツン、という音と共に通信が切れた。
「女が五人も集まると、話が止まらんなぁ」
「普段会えないから、余計にね」
苦笑する私達。
「あ、そうだ。はやてちゃん、通信借りていいかな？私も家に教え

ないと…」
「どうぞどうぞ。好きに使うてくれてええよ」
私もまだ、家に教えてなかったっけ、今回の帰省。
時間的に、お店の方がいる確率高いかな？
数秒の呼び出し音のあと…。
『毎度ありがとうございます。喫茶翠屋です』
「もしもし…その声はお姉ちゃん？」
『え…なのは？なのはなのっ？』
私のお姉ちゃん、名は高町美由希。お母さん、高町桃子が経営しているお店【喫茶翠屋】の店員さんをしている。
「うんっ！なのはだよ。久しぶり」
『春以来…かな？元気だった？お仕事頑張ってる？』
「うん、頑張ってるよ。今大丈夫？お店忙しくない？」
『大丈夫、今お昼休憩中～』
お昼のピークも過ぎてるみたいだし、タイミングは良かったかな？
『どうしたの？突然連絡をよこすなんて』
「うん、休みが取れて帰省出来ることになったので、連絡しようかと」
『え？なのは、家に帰ってくるの？』
「そういうことになりました♪」
『いままで全然そんなことしなかったのに』
「うぅ、それ言われると辛いなぁ」
怪我もあったし、入院もしたことあるし…あ、脇で二人がにやにやしてるぅ…。
『そういうとこは恭ちゃんに似たのかな？』
「何か、嬉しいような嬉しくないような…」
『あはは、恭ちゃん聞いたら複雑な顔するだろうなぁ』
何か、お姉ちゃんに弄られてる？
『それじゃ、母さんに替わろうか？』
「うん、お願いします」

『ちょっと待っててね～。…母さ～ん、なのはから電話だよ～』
呼んでる…奥で仕込み中かな？
『はいはい、おまたせ～。お母さんですよ～。元気してる？』
「何とか頑張ってるよ」
『そっか…お仕事大変？』
「正直大変だけど、自分で選んだ道だから…」
『ん。でも、あのなのはが、お父さんと似たような仕事に就くなんて、未だに信じられないわ。血は争えないってとこかしら』
「どうなんだろうねぇ…」
うちは、お父さんもお兄ちゃんも、ボディーガードの仕事をしてる（お父さんは引退したらしいけど）から、守るという点では違いはないか♪
「あ、お父さんは？」
『今仕入れに行ってもらってるわ』
そっかぁ、残念。
『美由希に聞いたけど、うちに帰ってくるって？』
「あ、うん。お休みが貰えてね、来週の頭に帰ることになったんだ～」
『来週？クリスマス前じゃない』
「うん、急に決まった話なので…ごめんなさい」
『もう…自分の家に帰るのに、何を謝るの？』
「だって、お店が忙しい時期でしょ？」
『変なこと気にしないの。そういうところは、お父さんそっくりね』
あうぅ…。お母さんにも弄られてるぅ。
『一人で帰ってくるの？』
「あ、ううん。フェイトちゃんとはやてちゃんも一緒」
「お久しぶりです、桃子さん」
「店長、ご無沙汰してます」
脇で聞いてた二人も、挨拶をして話に加わる。
『二人とも…久しぶりねぇ。元気？』

「はい、何とか…」
「めっちゃ忙しいですが、元気です」
『前の時みたいに、お店に来るのかな？』
「私の我が儘で、ちょう寄り道してからすずかちゃん達と翠屋さんで集合、という流れになってます」
「海鳴に着いて、お店に向かうときに電話するから」
『わかったわ。お父さんにも言っておくね。恭也には知らせた？』
「ううん、これからメールしようかと…」
『あの子も普段から連絡ないし、突然帰ってくるから…お母さんが怒ってるって言っておいて』
　あはははは、お兄ちゃんらしいというか…。
　お兄ちゃんは、お姉ちゃん共々【御神流】という剣術の達人。それを生かして先ほど言ったボディーガードの仕事をしている。
『桃子さ～ん、ケーキ追加注文ですけど、数が足りませ～ん』
『は～い、もうすぐ出来るわよ～。あ、ごめんね？お店が忙しくなってきたみたい』
「あ、ごめんなさい。忙しいのに…」
『気にしない。じゃ、来週を楽しみにしてるわね♪』
「うん、お姉ちゃんとお父さんによろしく～」
『それじゃぁね～』
　ガチャ。
「ケーキ作ってる真っ最中やったんかな？」
　そうかもねぇ。プロのパティシエだし、作りながら…なんてお茶の子さいさいみたいだしね。
「あとはお兄さんにメールして…連絡はこれでＯＫかな？」
「ハラオウン家は？」
「一昨日、本局で母さんと偶然会ってね、そのときに話しておいた」
「そか。これで準備ＯＫやな」
　そこへ…。
『失礼します、八神部隊長』

グリフィス君の通信が入ってきた。
「どないした？」
『演習について、一点だけ質問があるのですが』
「ん、どこや？」
『演習最終日の項目の欄に【シークレット（アンノウン）】とあるのですが、これは一体…』
「あぁ、それな。演習の総仕上げとして試験みたいなことをしてもらう予定なんやけど、あえて詳しい情報は載せてないんよ」
『そうですか。ナカジマ三佐もご存じなかったので、部隊長にお聞きしたのですが』
「そこの担当はクロノ提督や。気になるなら提督に聞いてみ？」
『わかりました。失礼しました』
グリフィス君の通信が切れた。
「また、何か企んでるの？」
会話を聞いて気になったのか、執務官が部隊長に質問していた。
「企むなんて、人聞きの悪い…」
いやいや、前例はたくさんありますから、部隊長…。
「前に言わんかった？お二人にも協力してもらうって」
そんなこと言ってたような…。
「じつは、最終日のみお二人にも演習に参加してもらうようになってるんよ」
「でも、私達はノータッチじゃあ…」
素朴な疑問を投げかける執務官。
「表向きはな。でも、これをやらんと今回の演習の意味が無くなるんや」
「何をやるの？」
「お二人には、仮想敵になってもらう予定や」
「仮想敵？」
私が教導なんかで、よくやる役割ですね。教導期間の最終日の模擬戦とかで。

「そう。いくら実戦形式とはいえ、演習は演習。筋書き通りにやって成功するのは当たり前。そこで…」
「筋書きのない、秘密の模擬戦を組み込んだのね」
「はやては、本当にこういうことが好きだね」
うん、そこは激しく納得。
「ちょ、ちょう誤解や。確かに否定はしないけど、ここのプランはクロノ君の提案や」
否定はしないんだ…え、クロノ君？
「そういえば、さっきクロノ君に聞けば…とか言ってたよね？」
「まぁ、ほとんど内容は教えてもらえへんやろうけど。ここの中身を知ってるのは、現時点では私とクロノ君だけや」
うわぁ～、イタズラ好きのはやてちゃんの本領発揮だ～。
「ということは、当然私達にも…」
「まだ秘密。帰省の帰りに、あるとこへ寄り道をするから、そこで詳しい説明をする予定や。ごめんな」
でも、私達二人じゃ今回の大規模演習では頼りなくないかな？
「ちなみに、仮想敵はお二人さんだけじゃないんよ」
「ええっ？」
「そこも、当日のお楽しみや」
はやてちゃんのイジワル～！

帰省の相談（後書き）

どうも、作者のＭ１１でございますｍ（＿＿）ｍ
お気に入りに登録された方、及び感想を寄せてくれた方
この場で御礼申し上げます

このお話は、現時点で完成してるのがここまでなので
この先更新頻度が激減します
もちろん、続きは時間を見て執筆していますが＾＾；
筋書きはある程度出来てます　書く時間がないだけ＜マテ

次回から、いよいよ帰省で地球に移動していきます
演習の様子も適時挟めたらいいな、と考えております

出発&出発

「機動六課、整列！」
グリフィス君の号令の元、六課隊舎前に今回演習に参加する隊員達が集まった。
「今日から一週間、陸士部隊との演習に入るわけですが、気を抜かないよう連絡を密に取り合って、事故の無いように」
「了解ッ！」
うーん、様になってるねぇ。
私達隊長陣は、一足先に演習に出発するみんなを見送りに来ていた。
演習発表から一週間、訓練内容は演習を見据えたものにシフトしていた。
いつもは試せない陣形なんかも体験してもらったり、陸士部隊をカバー出来るような立ち回り方も覚えてもらった。
今回の演習は、フォワードのメンバーも陸士部隊を引っ張ってもらう役割が含まれてるので、単独行動をする場面が多くなる。そのための訓練も少ししてきた。あとは、演習プログラムで何をやるのかは指示をしてある。
最終日の模擬戦を除いて…。
「部隊長、折角同席されてるのですから、一言訓示をお願いできますでしょうか？」
はやてちゃんを見て、部隊長代理が話を振ってきた。
「なかなか粋なことをするね、グリフィス」
「私達はノータッチ。あくまでも見送りだよ」
あえて、そういう言葉を投げて嗜めるフリをする私とフェイトちゃん。
「まぁ、固いことは抜きにして…ほな、一言ぐらいは」
そう言って、はやてちゃんはみんなの前に立つ。

「話を振られたので一言だけ。高町教導官の教えにもあるように、六課の究極の目標は『安全に無事みんなが帰ってくること』。この目標を心に刻んで、演習に臨んでほしい。私から言うことはそれだけや」
「はいっ！」
「うん、良い返事や」
はやてちゃん、満足そうだ。
「では、移動開始！」
部隊長代理の号令で、各々割り当てられた移動車両に乗り込む。
「なのはさん、行ってきますっ！」
そんな声をかけてきたのは、スバルだった。
「うん、がんばってね。他のフォワードのみんなも」
「はい。六課の名に恥じないよう頑張ってきます」
「そこまで堅苦しくなくても…」
ティアナの優等生な返事に、ライトニング隊長が苦笑してる。
「エリオもキャロも、気をつけてね？」
「はい、フェイトさん」
「頑張ります」
「んじゃ、出発するぞ」
フォワード陣の車両担当は、ヴァイス君だった。
「お願いします！」
その一言で、車が動き出した。

「無事出発したな」
そうだね。取りあえずは一安心かな。
「それで、ロングアーチはヘリで先行するんだ」
「そういうことです」
フェイトちゃんの問いに、シャーリーが答えた。
「アルト、お願いね」
「任せてください」

ルキノの言葉に、アルトがガッツを見せる。
「ほな、気ぃつけてな～」
はやてちゃんに見送られ、ロングアーチの面々はヘリポートへ向かっていった。
「さて、私達も出発しないと」
「フェイトちゃん、中央ゲートポートまで車お願いや」
「うん、確か六番ポートだったよね」
「そや。そこから一旦本局へ向かわんと」
そこへ…。
「ママ～」
ヴィヴィオが駆けてこっちへ向かってきた。
「準備ＯＫかな？忘れ物はない？」
「だいじょうぶ～」
遅れて、アイナさんもヴィヴィオの荷物を持って駆けつけた。
「一応必要なものは全て揃えましたが、足りない物は現地で購入してください」
「わかりました」
でも、その辺はアイナさんを信頼してます。
「みんなは？」
「ついさっき出発したとこや」
「あぅ…ヴィヴィオもおみおくりしたかった」
「まだ眠い～ってお寝坊さんだったのは誰かしら？」
バツが悪そうな顔をするヴィヴィオ。その光景を見て、二人が微笑んでいた。
「それじゃ、車に乗り込もか」
「そうだね」
「時間は大丈夫？」
「大丈夫や。向こう着いても余裕があるような時間にはしてあるよ」
そして、私達四人はフェイトちゃんの運転する車に乗り込む。
「それでは、気をつけて行ってらっしゃい」

アイナさんが私達を見送ってくれる。
「行ってきます」
「留守はお願いね」
「いってきま～す！」
ヴィヴィオが一際（ひときわ）元気に返事をする。
「ヴィヴィオ？いっぱい楽しんでおいで」
「じゃ、行くよ」
フェイトちゃんの合図で、車が動き出した。

「演習組も帰省組も、無事出発っと」
アイナが人知れず呟いた。
「残るは寮のスタッフと、演習に出ない一部の留守部隊のみ…か。普段に比べたら、私達も休暇みたいなものかな？」
いくら大規模演習とはいえ、六課を完全に空には出来ないので、ロングアーチとバックヤードの一部スタッフが留守を預かる部隊として六課に残った。アイナ達は、その留守部隊の世話をする為休みがないが、普段より人数が少ないのでこちらも交替で出勤するように調整がされた。
「さ～て、人数が少ないけどやることはいっぱい。手始めは、天気が良いからお洗濯かな？」
そう言い残し、アイナも業務に戻っていった。

ミッドチルダ中央部・次元港六番ポート。
時空管理局本局行きは、大概ここからだね。
「手続き完了。…微妙に時間が余裕あるなぁ」
渡航手続きを終えたはやてちゃんが戻ってきた。
「なのは。お土産はこんなものでいいかな？」
ヴィヴィオを連れて、散歩がてらお土産を購入してたフェイトちゃんも戻ってきた。
「うん、いいんじゃない？」

「あとは、これでアリサちゃんが納得するかどううかやけど…」
「いろいろ文句を言いながらも、受け取るとおもうよ、おそらく」
みんな苦笑する。
「……」
「どうしたの？ヴィヴィオ」
さっきから、周りを見てそわそわしてるヴィヴィオに私は訪ねてみた。
「…うん。みたことないものばかり…」
そっか、本格的なお出かけ初体験だもんねぇ。
「ねぇ、ママのおうちってどんなところ？」
興味津々で聞いてくるヴィヴィオ。
「そうねぇ…ミッドと地球って、風土はそんなに大差ないんだよね」
「ミッドの街から少し離れた所に雰囲気は似てるよ」
フェイトちゃんも説明してくれた。
「あと、なのはちゃん家はお菓子屋さんもやってるんよ」
「おかしやさんっ！？」
俄然目がキラキラしてますよ、ヴィヴィオさん。
「喫茶店と洋菓子屋さんが一緒になったお店かな」
「ケーキもいっぱいあるよ？」
「ケーキ！」
「そのケーキを、なのはママのママが作っているんだよ」
「ふぅ～ん…」
はやてちゃんとフェイトちゃんの説明に、納得してる…のかな？
「ヴィヴィオ、楽しみ？」
「うんっ！」
そこへ…。
『まもなく、六番ポートにて時空管理局本局行き次元航行艦の乗船を開始いたします。ご乗船の方は、六番ポート乗船口にお集まりください。繰り返します…』
乗船開始のアナウンスが流れた。

「さて、いよいよ地球に向けて出発や」
はやてちゃんの号令の元、私達は船に乗り込んだ。

一時間後。
無事本局次元船発着ポートへ到着。
ここから、地球行きの専用次元艦に乗り換えて四時間ほどで、地球の衛星軌道上へ到着する。そうすれば、あとは転送ポートで地球に降り立つ。一回の移動で約半日つぶれる計算になる。
「昔に比べて速くなったよねぇ、移動が」
「前は三日くらい掛かったよね、地球からミッドまで」
「艦(ふね)が大きくなって、動力も桁違いの性能を持つようになったからなぁ。XV(クラウディア)級に比べたら、アースラなんか小さく見えるわ」
ホント、便利になった。そうでなければ、春の日帰り出張任務なんて到底出来ないもの。
「それでもまだ、直通の転送が出来ないんだから。遠いよねぇ、地球って」
「そういうな。これでも次元航行や転送も進化を続けているんだからな」
私達三人以外の声がしたので、聞こえた方を振り向くとそこに、
「く、クロノ君!?」
と、クロノ提督にばったり出会った。
「お、お義兄ちゃん、何でここに?」
「ば、フェイト、局内でそれはよせと…」
「びっくりしたものだから、つい…」
照れ屋さんな義兄妹ですねぇ、まったく。
「それはそうと、何故ここに?」
私は当然出てくるであろう疑問をぶつけた。
「たまたまだ。これからミッドに降りるんでな」
「そして、僕は地上本部に用があるから一緒ってわけさ」
もう一人、声が聞こえてきた。

「ろ、ロッサ！相変わらず神出鬼没やなぁ」
現れたのは、ヴェロッサ・アコース査察官。
はやてちゃんの兄的存在。騎士カリム達の中では、はやてちゃんは末っ子的存在なのだとか。
「クロノ君も、素直に見送りに来たと言えばいいのに」
「そ、そんなこと恥ずかしくて言えるか…って、ばらすな！ロッサ」
「別段隠すことでもあるまいに…」
「それはそれ！」
まぁ、わざわざお見送りに来てくれたことは事実らしい。クロノ君らしい。
「あのぉ～、僕も居るんですが…」
「ゆ、ユーノ君！？」
全く気がつかなかった…ごめんなさい。
ユーノ・スクライア君。私の十年来の友達の一人。
現在は、無限書庫の司書長なんかをやっている。彼と出会わなかったら、今はないわけで…ちなみに、私の最初の魔法の先生なの。
「ユーノも見送りに？」
「うん。なのはから出発の時間を聞いていたから、本局に上がってくるのがだいたいこの時間じゃないかと思って、仕事を一区切り付けてきたんだ」
「ありがとうなぁ、みんな…」
はやてちゃんが三人にお礼を言った。
「…まぁ、休暇を指示した手前もあるしな」
「ふ～ん、そうなんだ」
未だに照れるクロノ君の言葉に、査察官が感心していた。
「ユーノ君も海鳴に来れたらいいのに…」
「はは、さすがに今回は急な話だったらしいし、無限書庫もまだまだ整理しきれてないしね」
無限書庫。
時空管理局が誇るアナログデータベース。あらゆる次元世界の文

献が納められていて、一度検索をかければ出てこない物はない、とまで言われるくらいもの凄い量の書物が納められている場所である。
「あ、ユーノせんせいこんにちわ」
「こんにちわ、ヴィヴィオ」
ヴィヴィオがユーノ君を見つけて挨拶している。
「ヴィヴィオを連れて行くんだ、なのは」
「うん。高町家にそろそろ紹介しないと、と思って」
「そうだね、いい機会かも」
そう言って、ユーノ君はヴィヴィオの前にしゃがむ。
「ママ達の言うことをよく聞いて、たっぷり楽しんでおいで」
「はいっ！」
「うん、いい返事だ」
ピピッ、ピピッ。
「はい、八神二佐です。…あ、はい。了解です」
はやてちゃんに通信が来ていたようだ。
「みんな、艦の準備が出来たって。移動しよか」
「え、アナウンスはないの？」
「艦に乗るの、私達だけやし」
「あ…そっか」
「てなわけで、クロノ君、ロッサ、ユーノ君、行ってきます」
「あぁ、行ってこい」
「ゆっくり休んでおいで、はやて」
「気をつけて行っておいで。なのはもフェイトも」
三人に見送られ、私達は本局を後にした。
いよいよ久しぶりの海鳴…その前にイギリスか。
ヴィヴィオじゃないけど、やっぱ楽しみだね。

「ふぅっ、ようやく行ったか」
「カリムにも頼まれていたしね、見送りを」
「そうだったんだ、クロノがいるなんてビックリしたから」

「そこまでばらされていたら、もっと恥ずかしかったぞ」
三人揃って苦笑する。
「これからクロノは演習へ？」
「あぁ、一度現地へ顔を出しに行く。評価人の代表としてな」
「アコースさんは？」
「僕は野暮用さ。一応教会にも寄っていくけど」
「義姉君（あねぎみ）に報告よろしく」
「まかせて」
「フェレットもどきはどうする？」
「まだそれを言うか…今日は急ぎの依頼もないし、のんびり書庫の整理をするよ」
「そうか。では、失礼するよ」
「うん、それじゃ」
三人は、二対一に分かれてその場を去った。

出発&出発（後書き）

ようやく五本目です。
まだ地球に到着していません、…あれ？
とりあえず、旅立ちの場面まで。本局でばったりクロノに出会ったらおもしろいかなぁ～って思って、予定になかった場面を追加しました。
それならついでにロッサとユーノも出してしまえ、とw

＊次元航行について
　このあたりは、わたくし独自の設定です。ツッコミは不許可で（ぇ
　ＳＳ０１の出張任務が日帰りっぽい描写だったので
　それをベースにでっち上げた物です。

次回は…演習側を少し書こうかな、と考えております
その次に、いよいよ４人がイギリスへ降り立つ予定です

演習地にて

「座標的にはこの辺りのはずなんだが…」
「…まさか、迷ったんじゃないでしょうねぇ、ヴァイス陸曹」
「うっせ。似たような景色だから、確証が持てねぇだけだ。これだから、廃棄都市区画ってのはヤなんだよな」
ティアナとヴァイスが漫才をかましてるところへ、
「…あ、あそこじゃないですか？」
「みたいですね。六課のヘリとか色々ありますよ」
外を眺めていたエリキャロが、集合地点を見つけ出したようだ。
「ん？おぉ、あそこらしいな。ストームレイダーの座標も合ってる」
「Ｔｈｅｒｅ ｉｓ ａ ｓｅｔ ｓｐｏｔ．（あの場所が集合場所のようです）」
ストームレイダーも、照合確認して答える。

「おっし、到着だ」
ヴァイスのかけ声を合図に、移動車両に乗っていた全員が降車する。
「スバル～」
「…あ、ギン姉！」
自分をを呼ぶ声がしたので、スバルは振り向くと、そこには姉の姿があった。
ギンガ・ナカジマ陸曹。
陸士１０８部隊に所属する陸戦魔導士。スバルの姉さんである。
「来てたんだ」
「初日の準備だけ手伝いに来たの。後は留守とリハビリだから」
「さすがにまだ完治してないもんねぇ」
ギンガは、レリック事件でスカリエッティ一味に拉致され、一時は敵側に立たされた人物。そのときスバルと死闘を演じ、倒された

時の後遺症と戦闘機人故に改造された部分の修復を本局のラボで受けている状態なのだ。
　そのため、今回の演習は不参加で、留守部隊の一員とあいなった次第だ。
「それでもだいぶ完治に近づいてるから、日常行動は問題なし、との判断を頂いてこっちに来た次第なの」
「…あの時はごめんね、ギン姉」
　突然謝る妹に、姉があたふたする。
「いいのよ、あの時は仕方が無いよ。私もあんまり記憶がないし」
「うぅ…」
「完治したら、また手合わせしてね。手加減無しで」
「…うん、わかった」
「スバル、ここにいたんだ…あ、ギンガさん、お久しぶりです」
　相方を捜していた様子のティアナが、突如現れた。
「あら、ティア、久しぶりね。足はどう？」
「おかげさまで、先々月に完治しました。あの時はお見舞いありがとうございました」
「お礼なんかいいのよ。私の時のお見舞い返しだと思ってくれれば」
「では、そういうことにしておきます」
　三人は、世間話をしながら演習の準備をてきぱきと進める。それに習って、他の隊員も積載物を降ろしたり荷物を展開したりと、忙しそうに動き回った。
「お～い、ギンガ。どこだ～？」
　声を大にして、ギンガを探しているゲンヤが現れた。
「ここですよ、お父さん」
「あ、お父さん！」
「おぉ、スバルとここにいたか…って、部隊では部隊長と呼べって言ってるだろ」
「今は知り合いしかいないから、いいじゃないですか。ちゃんと周りを見て使い分けてますよ？」

父親のお小言に対して、反論する娘。
「まぁ、それはいいんだが…もう、あらかた準備は終わったから上がっていいぞ」
「あら、そうですか？まだ六課の方が…」
「そっちは男手もあるし、スバルもいるから大丈夫だろ。それより、部隊へ帰るついでにちょっとヤボ用を頼まれてくれねぇか」
「何かあったんですか？」
「うむ、実はな…」
何か厄介事が起きたのか、声を潜めて相談を始める二人。
「…わかりました。一旦部隊に戻ってから、施設に出向いた方が良さそうですね」
「悪ぃな、そうしてくれるか」
話がまとまったようで、ギンガは帰り支度を始めた。
「あれ？ギン姉、もう帰るの？」
「うん、お父さんに用事を言われちゃってね。ちょっと急がないと」
「そうなんだぁ。気をつけてね～」
「うん、スバルも演習頑張って。あ、ティアもね」
「はい、ありがとうございます」
そう言い残して、ギンガは演習会場を後にした。
「さて、嬢ちゃん。そっちの準備は終わったかい？」
「あ、はい。あと一台遅れてるトレーラーが到着すれば十分程度で完了します」
ゲンヤの問いに答えるティアナ。
「そうか。それが終わったら、…あそこにプレハブみたいな建物が見えるか？」
「…見えますね」
「あそこが今回の演習の指令本部だと思ってくれればいい。あそこへみんなで集合してくれ」
「了解しました」
「聞いてたな、ヴィータ」

「バッチリとな」
ゲンヤの問いかけに、阿吽の呼吸で返事をするヴィータ。念話で状況を把握していたようだ。
「こちらスターズゼロ。みんな聞いていたな。各員作業が終了したら、一旦あたしの所へ集合。その後本部へ移動する」
「了解！」
「それじゃ、俺は先に行ってるから。後はよろしくな。ヴィータ隊長」
「…あ、あぁ」
隊長と呼び慣れてないせいか、しきりと照れるヴィータだった。

「おーし、これで全部隊揃ったな」
『本部』と、立て札があるプレハブの前に、今回演習に参加する全部隊の主要メンバーが勢揃いした。
「今回、機動六課からの提案で大規模な演習が始まるわけだが、今までやむを得ない事情で地上本部と本局が連携を組めなかったのを、色々変えていこうという八神二佐の思惑もあって、これだけの演習をすることになった。まだまだ柵（しがらみ）も多い両者だが、今回の演習を機に色々学び取ってもらいたい」
ゲンヤが冒頭の挨拶を終えると、どこからともなく拍手がわき起こった。
「続いて、評価人代表の挨拶を」
そう言われて、登場したクロノ執務官。
「評価人代表のクロノ・ハラオウンだ。本局としても、今回の演習は地上本部との距離を縮めるいい機会だと捉えている。両者との連携強化は元より、個人のスキルアップも目指して欲しい。あと、演習時以外での部隊間交流も、出来れば積極的に行ってほしい。このとき出来た絆が、後に事件などで生かされることを切望する。では、演習の成功を祈念して挨拶とさせてもらう」
拍手がわき起こる中、提督は壇上を後にした。

「…こんなものでいいですかね」
「問題はないだろう」
「では、演習の総指揮よろしくお願いします」
「あぁ、まかせとけ」
演習の諸注意などが説明されてる中、クロノとゲンヤが声を潜めて会話していた。
「それでは、本局側を代表して機動六課の管制担当である、シャリオ・フィニーノ一等陸士より本日の演習スケジュールを通達していただきます」
紹介されて、シャーリーが皆の前に立つ。
「え～、今回広域管制担当を任されています機動六課ロングアーチ01、シャリオ・フィニーノです。本日の演習プランですが、高町教導官完全監修による訓練シミュレーターを使い、先の事件で登場した『ガジェット』四種との模擬戦闘訓練を行います。今までに蓄積されたデータを元に、AMF（アンチマギリングフィールド）戦を想定した内容となっています」
そして、演習参加者を幾つかのグループに分け、演習に入ることを伝えた。
「機動六課フォワード陣は、演習グループのサポートに付いてね。あなたたちが一番ガジェットのことを理解しているから、色々と教えてあげてね」
「了解！」
「では、初日の演習準備に入ってくれ！」
「了解！」
ゲンヤの合図と共に、全参加者が一斉に動き始めた。
「それじゃ、今日はあたしとスバルとシャマル先生がサポートに入るから、エリキャロとヴァイス陸曹はモニターを使って陣形チェックをお願いします」
「おぅ、まかせろ」
「おかしいところを念話で知らせればいいですね？」
ティアナの分担指示に、ヴァイスとエリオが役割を確認する。

「そうだね。お願いね」
スバルが呼応した。念入りにストレッチを行っている。
「今日は初日ということもあって、これしか演習はないけど、気を抜かずに頑張ろう！」
「ティアナの言う通りね」
シャマルが横で頷いていた。
管理局初とも言える、大規模な演習の幕が切って落とされた。

演習地にて（後書き）

前回より時間があいてしまい、申し訳ありませんm（__）m

今回はちょっと短め、かな？
予定になかった部分なので、文章もおかしいかも^^；
後で修正入るかも知れません…（ぇ

次回、いよいよなのは一行がイギリスに降り立ちます
その先に待ち構えている、とある事とは？
気長にお待ちくだされ；；

恩師の元へ

イギリスはロンドンから二時間半ほど北へ車を走らせた、ノースウェストレスターシャー。
トップカテゴリーのカーレース等で有名な、ドニントンパーク・サーキットがある街の郊外に、なのは達一行は降り立った。
「初めて来たけど、イギリスも緑が多いねぇ」
「ロンドンからはかなり離れてるけど、良いところみたい」
なのはとフェイトは、それぞれ感想を述べる。二人とも気に入ったみたいだ。
「海も良いけど、こういう丘陵地帯も景色が良いよね。どう？ヴィヴィオ」
「うん、良いところです」
「みんなに気に入ってもらえて良かったわ。良いイメージ持ってない人が多いからなぁ」
「まぁ、それは都市部の話でしょ」
はやては、好感触なみんなを見て安心したようだ。
「それで、ここからどうするの？」
「うん、ここからはちょう徒歩で移動や」
フェイトの疑問に、はやてが答える。
ここから、しばらく徒歩で移動になるらしい。そんなには歩かないと二人は思っていたが…。

「はやてちゃん、まだ着かないの？」
なのはは、たまらずはやてに聞いてみた。それもそのはず、すでに一時間くらい歩いているからだ。
大人達は体力的には問題は無いのだが、ヴィヴィオが少し音を上げ始めていた。
「はぁ、はぁ…」

「ごめんなぁ。ヴィヴィオにはちょうキツかったかな」
「なぜこんなに歩くのか、説明を要求します」
フェイトが執務官モードになったのか、はやてに対して堅苦しい質問をしていた。
「う～ん、これはグレアムおじさんの時からのしきたりなんやそうよ。少し離れた所に転送ポートを設定して、魔法とか色々がばれないようにしてたらしいんよ」
「それにしても離れ過ぎじゃあ…」
「ほら、ヨーロッパ諸国では魔女とか良いイメージ無いやろ？魔女狩りとか過去にあったしな。魔法に対して敏感だったんやないかな。意識しすぎやとは思うけど、それだけ慎重だったんやないかな。現在よりはオープンではなかったやろうし」
真意のほどは定かではないが、当時から苦労はしていたことは二人とも理解できたようだ。
「でも、もうだいぶ近づいてるはずや」
そして、程なくして視界が開ける。
正面に、一件の少し大きめな邸宅が現れた。
「ここがグレアムおじさんの家や」
立派な門が構えていて、その奥に立派な邸宅が佇んでいる。しかし、草木の手入れがされていない感じが見受けられる。
「ホントにここなの？はやてちゃん」
「合うてるよ」
「何か人が住んでる気配がしないんだけど…」
フェイトも、なのはと同じような疑問を抱いてるようだ。
「そうやろうなぁ。なんせ…」
言いかけて、はやては発言を止めた。
「さ、目的地はこっちや」
そう言って、はやては門をくぐらず壁伝いに歩き始めた。
「あれ？家に入らないの？」
「用があるんは、こっち」

またちょっと徒歩移動して、少し小高い丘の上に出た。
「良い景色〜」
「本当だね。海はないけど、海鳴の高いところからの景色に似てるね」
一応、目的地に着いたらしく、みんなリラックスモードになる。
「ヴィヴィオ、疲れたやろ。えらかったなぁ」
「ちょっと…疲れました…」
なのは達も腰を下ろそうとしたところで、視界にある物が入った。
「はやて。あれは何？」
フェイトが真っ先に聞いていた。
「ん。あれが目的の場所や」
二人には、まだ理解できてないようだった。
「グレアムおじさんの……お墓や」
「えぇっ！？」
驚愕の事実に、二人は言葉を失う。
「お二人さんは、この事実はまだ知らんかったらしいなぁ」
「うん。初耳」
「…いつお亡くなりになったの？」
「どこから話そうか…」
はやては色々思案していたが、やがて意を決して話し始めた。
「あれは、六課設立の半年くらい前やったかな。クロノ君から緊急通信が入ってきたんよ。グレアムおじさんが危篤状態だと。おそらくリーゼ姉妹から、クロノ君経由で私に知らせてきたみたい」
二人は、真剣にはやての話を聞いている。
「長い間ミッドにいたから、親類が一人もおらんらしくてな、子供もリーゼ達以外いない。頼れるん人がいなくて、クロノ君に連絡したみたいなんや。それを受けたクロノ君は、私んとこへ言うてきたんよ。『血は繋がって無くても、支えてくれた恩人だ。駆けつける義理はあるだろう』ってな」

「一理あるね」
「理由にはなるね。経緯はどうであれ、はやてちゃんの足長おじさんだったわけだし」
「うん。そこでどうしようと考えたんやけど、たまたまその時１０８部隊に出向していて、話を聞いたゲンヤさんが『こっちは気にせず行ってこい。恩人なんだろ？』って気前よく送り出してくれたおかげで、亡くなる前に駆けつけることが出来たんよ」
「タイミングが良かったんだね」
フェイトは、ゲンヤの行動に感心していた。なかなか出来ないことである。
「師匠には感謝してる。最期を看取ることが出来たしな。で、今はあそこで眠っている、というわけや」
「そんなことがあったんだ…」
「ホンマはお二人も呼びたかったんやけど、忙しいやろうから敢えてやめておいたんや。代表で…ってな感じで。その後忙しくなって、教えるのを忘れてたんや、堪忍な。
そして、帰省の話が出て途端に思い出して、付き合ってもらった次第なんよ」
「お気遣いは嬉しいんだけど…」
「そういう変な遠慮は要らないよって、前にも言ったよね。私達親友でしょ？」
「堪忍して～。こういう性格なんやからぁ…」
なのは達からの思わぬ攻撃に、しきりに恐縮するはやてであった。
「でも、納得した。ついてきて欲しい理由に」
「ホント、感謝するよはやてちゃん。連れてきてくれて」
「途中でお花を買った理由も納得したよ」
そう言って、フェイトは花束を墓前に献花した。
それに習って、なのはもヴィヴィオと共に献花する。
「ヴィヴィオ、このお花をフェイトママの花束と一緒の所に置いて」
「うん、わかった」

花屋で、ヴィヴィオ用に小さく作ってもらった花束をなのはから受け取り、墓前に近づいて献花する。
「これでいいの？」
「うん。おおきに、ヴィヴィオ」
そう言いながら、はやても自分の手にある花束を献花した。
そして、四人でお祈りをする。
そこへ、どこからともなく二匹の猫が姿を現した。
「…猫？」
「おぉ、リーゼ達。元気やったか？」
「え、リーゼ達なの？この猫」
「…かわいい♪」
猫二匹は、なのは達の足元でじゃれ合っている。
「そう。この子達はリーゼ達。グレアムおじさんが亡くなったから、使い魔の契約解消でこの姿になったんよ」
しばらくじゃれ合った後、お墓の前でお昼寝を始めてしまった猫二匹。
「お墓を守ってるのかな？」
「そうかもね」
「たいした忠誠心や。猫に戻っても」
「それじゃ、休憩がてら昔話に花を咲かせるとしますか」
なのはが、話を振ってきた。
「グレアムさんも、色々お話聞きたいだろうしね」
「そうだね。いいかも」
「そうしてくれるか。おじさんも喜ぶわ、きっと」
そして、どこからともなくシートを取り出したはやて。それを合図に、少し遅めのお昼ご飯開始となった。
「ヴィヴィオ、気持ちよさそう」
お昼終了後、疲れがピークに達していたヴィヴィオがおねむになり、今はなのはの膝ですやすやと寝息を立てていた。

「そういえば、イギリスってお兄ちゃん達とも関係があるんだよね」
「どういうことや？」
疑問に思ったはやてが、なのはに聞き返していた。
「うん。フェイトちゃん達に出会う前に、うちによく出入りしてた人がいてね…」
「あ、もしかして…クリステラさん？」
「そう。フィアッセ・クリステラさん。光の歌姫。こっちの出身で、今は音楽学校の校長先生…だったかな？」
「おぉ、あの歌姫と知り合いやったん？」
「うん。お店で店員さんもやってたんだよ」
「へぇ～」
「その縁で、ＳＥＥＮＡこと椎名ゆうひさんがお店の常連さんだったんだって」
「そうだったんだぁ」
「それで、フィアッセさんのお父さんが、アルバート・クリステラ。イギリスの議員さんで、お父さんが昔ボディガードをしてたんだって」
「その頃からの繋がりなんや…」
「凄い有名人と知り合いなんだよね、なのはは」
なのは達がまだ海鳴にいた頃、年一回のペースで高町家に訪れていたフィアッセ。一応フェイトも面識があるようだ。
「イギリスに来たら、思い出しちゃった」
「その音楽学校って、どの辺にあるん？」
「う～ん、詳しいことはお兄ちゃんが知ってるんだけど、私じゃわからないよ」
そんな話をしてる時に、突然なのはの携帯が着信音を鳴らし始めた。
「誰だろ…あ、お兄ちゃんからだ」
相手を確認して、電話に出る。
「もしもし、お兄ちゃん？」

『なのはか。久しぶりだな』
「うん。どうしたの？突然電話なんか…」
『なのは。今どこにいる？帰ってくるとメールを見たが』
「今、はやてちゃんに付き合ってイギリスに」
『ほぅ、偶然だな。俺も今イギリスにいる』
「えぇっ！？ドイツじゃなくて？」
『一昨日までいて、別件でイギリスに寄ってるところだ』
「そうなんだぁ…」
『用事は済んだのか？』
「済んだ…のかな？」
はやてに確認すると、アイコンタクトで終わったことを教えてくれた。
『そうか。もし良かったら一緒に海鳴へ行くか？』
「…お邪魔じゃないですか？忍さんも一緒なんでしょ」
『関係ない。むしろ忍がお前に会いたがっている』
妹の冷やかしを一蹴する兄。
「それじゃ、一緒に行こうかな。みんなもそれでいい？」
頷く二人。
『それじゃ、ヒースロー空港で待ち合わせだ』
「うん、わかった。それじゃ」
電話が切れた。
「チケット取れるんかな？今から」
「そこが心配だよね」
「多分、あてがあるんだと思うよ。そうじゃなければ誘ってこないし」
「裏技でもあるんか？」
「まさか」
「取りあえず、転送を使わなくなったから義姉さんに連絡しないと」
慌てて携帯メールを打ち始める執務官。
「それじゃ、ぼちぼち移動しよか」

はやての合図で、一行は周辺を片付けて墓地を後にした。帰り際、はやてが振り向き、
「おじさん、はやては今も頑張ってます。次元は違うけど、空の上から見守ってくださいね」
と言い残していくのだった。

恩師の元へ（後書き）

イギリスに到着したなのは一行を待っていたのは
グレアム氏の死でした　殺しちゃってすいませんｏｒｚ
これは、初期の段階で決めていたことです
管理局を退職して約１０年、こんな展開も有りではないかと…

場所に関しては、個人の趣味ですｗ
イギリス＝Ｆ１　シルバーストンかドニントンパークか…
まず思いついたのがドニントンでした
まぁ、このあたりはツッコミ不許可でｗ

後半で、いよいよとらハが絡んできました
主に３がメインで絡む予定ですが、ゆうひのこともあるので
２も少し絡んできます
そして、恭也が登場　電話越しですがｗ

次回、いよいよ海鳴へ…行くのか？ｗ
何故か飛行機移動になってしまったしｗｗｗ

８／８追記
微妙におかしな所を修正

いざ海鳴へ

新東京国際空港（いわゆる成田空港）へ、フライトと時差の関係で午後三時に到着。その後、電車を乗り継いで夕方五時頃に海鳴駅へ降り立った私達。

「やっと着いた～」

「ほぼ地球の反対側からだからね。お疲れ様」

相当まいっていたのか、フェイトちゃんが伸びをしている。そこへ忍さんのフォロー？が入る。

「乗り慣れてない飛行機は、ほんま疲れる」

「…何か、誘わなかった方が良かったか？」

「そ、そんなことないよ～」

だって、久しぶりにお兄ちゃんと一緒なんだもの。こんな機会は今後もないと思うから、目一杯甘えさせてもらいました。みんなは、魔法とかに依存しきってるからこその愚痴であって…。

「それにしても気になっているんだけど…」

忍さんの視線が、ヴィヴィオに向けられる。

「この子って…誰？」

見知らぬ子供が私達の中に混じっていれば、それは気になるでしょうねぇ。

「しかも、虹彩異色（オッドアイ）か…。何か訳ありか？」

「珍しいよね」

「それについては、後ほど紹介しますから」

そう私が説明してるところに、はやてちゃんの携帯が着信を知らせる。

「あ、もしもし…おぉ、すずかちゃん。…ん、わかった。こっちももう少しで着くよ～」

どうやら、親友達が翠屋に着いたようだ。

「義母さん達もお店で待ってるって、メール来たよ」

どうやら、役者は全て揃ったようです。
だんだん緊張してきました。
いよいよ、本番です。
「…なのは、大丈夫？」
緊張を察してくれたのか、フェイトちゃんが心配そうにしている。
「ん。緊張してるけど、大丈夫だよ」
「みんなの反応が楽しみや」
はやてちゃん…楽しんでませんか？他人事だと思って。
「それじゃ、翠屋へ移動するぞ」
お兄ちゃんの先導で、私達は歩き始めた。

カランコロ～ン…。
「いらっしゃいま…き、恭ちゃん！？」
「あぁ、ただいま。美由希」
「おぉ、恭也。久しぶりに帰ってきたか」
「恭也～、連絡ぐらい寄越しなさい」
あはは、お兄ちゃんお母さんに怒られてる。
「お久しぶりです～」
「忍さん。お久しぶりです」
「よく来たね」
「恭也が迷惑かけてるようで…」
「そ、そんなことないですよ。優秀なボディガードですし」
「それより恭ちゃん、今日なのはが帰ってくること聞いてる？」
「あぁ、メールで知ってる。っていうか、今一緒に帰ってきたんだ」
「えぇっ？！」
くすっ、驚いてる驚いてる。
お店に着く直前、お兄ちゃんから提案があり、私達は少しお店の前で待つ格好となった。お母さん達を驚かせたいらしいの。
「なのは、いいぞ」
お兄ちゃんの合図で、店内に入る。

「ただいま～」
「おかえり～、なのは」
「元気そうだな」
「おかえりなさい、なのは」
姉、父、母から労われる。
「なのは、久しぶりっ！」
「なのはちゃん、おかえり～」
すぐ傍には、アリサちゃんとすずかちゃんもいた。
「義母さん、義姉さん、久しぶり」
「おかえりなさい、フェイトさん」
「おかえりっ」
「おか～り～」
「カレルもリエラも久しぶり」
「フェイト～♪」
「アルフ、元気そうだね」
こちらはこちらで家族で挨拶してるハラオウン家。
「すずかちゃん、アリサちゃん、久しぶりや」
「うん、元気そうね」
「春以来…なんだよね。何かちょっと立派になった？」
「そ、そやろか…まだダメダメやけどな」
はやてちゃんも、親友同士で盛り上がってます。
「あれ？なのは。その子は？」
あ、お姉ちゃんが気がついた。
みんなの雰囲気に萎縮されたのか、私の後ろに隠れていたヴィヴィオを前に導く。
「ママ…」
「ママぁっ！？」
高町家＋1&親友の二人が、こっちを見て驚く。
「な、何かこの場にふさわしくない単語が聞こえたんだけどっ？」
「なのはちゃん、その子…ママって…」

いよいよ、そのタイミングかな？隠してても仕方ないしね（隠してるわけじゃないんだけど）。
「えっと……この子、私の子供…娘なの」
「…高町ヴィヴィオです」

……

あれ、お店の中が固まったよ？
「あぁ、なのは……」
「その言い方ではあかん言うたのに…」
え、えぇ？
「な、なのはに子供…」
「向こうで…結婚したの？」
ようやく、親友二人が言葉を紡ぎ出した。
「結婚はしてないよ。まぁ、訳ありというか…」
何かお店の異常な雰囲気に飲まれて、しどろもどろになっちゃってるよ～。
「……なのは」
「は、はいっ！」
お父さんの殺気立った呼びかけに、反射的に返事をする。
「…相手は誰なんだ。ユーノか？それともクロノか」
「あの、クロノ君は私の旦那ですから」
横方向から、エイミィさんのツッコミが来る。
「結婚前に孕まされたのかも知れない…どうなんだ、なのは」
「そ、それはないですよ、クロノ君は私と一緒の時間が多かったし、そもそも職場が違うから会う機会がなかなかないですよ。無理があります」
事情を知ってるとはいえ、クロノ君の名前が出てきたので、必死にフォローしてくれてます。ありがとう、エイミィさん。
「そうだよ、お父さん。クロノ君に失礼だよ」

「じゃあ誰なんだ。その子供の父親は」
「…やっぱりユーノ君なの？」
あぁ、お母さんからも追求が始まった…。
「ユーノ君とはそういう仲じゃないし…」
「…じゃあ」
え？
「じゃあ、一体誰なんだぁぁぁぁっ！」
うわあっ！お父さんがキレたぁ～～～～っ！
パコッ！
「親父、動揺しすぎ」
「そうだよ、あの子が怯えちゃうじゃない」
お兄ちゃんがお父さんにツッコミを入れるなんて、久しぶりに見たな～。
しかし、兄姉は意外と冷静ですね。
「まぁ、俺はさっきまで一緒にいたからな」
「なのはが連れてきてるってことは、紹介してくれるってことだもんね、詳しい説明を含めて」
何か、いっぱい申し訳ない感じですぅ。
「なのはさん。そろそろちゃんとした説明をしてあげないと、ご両親達が困ってしまうわよ」
リンディさんにも窘められた。
「あら、リンディさんは事情をご存じで？」
「えぇ、これでも管理局の人なので。あと、フェイトさんからも聞いてますし」
「フェイトちゃん達も知ってるの？」
「まぁ、一応…」
「というか、私ら事件の当事者ですし」
「事件？」
意外なキーワードだったのか、事情を知らない者がみんな反応した。

「それじゃ、この子…ヴィヴィオについて説明するね」
そう言って、私はヴィヴィオについての説明を始めた。

「そうか…そんなことがあったのか」
ようやく、お父さんが納得をしてくれた。
「なんか、わかるわぁ」
忍さんが共感？してるみたい。
「何がわかるんだ？忍」
「ほら、私の一族も…ねぇ」
「…そうだったな」
何か二人で納得してるんですが？
「ということは、この色彩異色は遺伝？」
「そう…なるのかなぁ」
「そっかぁ。なのはちゃん、すっかりママになってるんだね」
「ひょんなことから懐かれたし、この子を守りたいっていう気持ちもあるから」
「しかし、非人道的実験から生まれた子供かぁ…」
「どこの世界にも、とんでもない奴はいるんだな」
「最初から親がいないなんて、可哀想だね」
「でも、なのはが娘として迎え入れたんなら、私達とも家族だわね」
…お、お母さん。ありがとう。
「ヴィヴィオ…だっけ。おばあちゃんですよ～」
「…てことは、俺はおじいちゃんか…歳を取ったもんだ」
「おばあちゃん？おじいちゃん？」
いまいち意味がわかってないのかな？
「ヴィヴィオ。この二人が、なのはママのママとパパなんだよ」
「う～ん、よくわかんない…」
あらら、理解不可能ですか。
「それじゃ、名前で呼んだら？」

「それじゃ、余所余所しすぎて家族ではなくなってまうよ」
「何か良いアイデアは…」
「英語風に呼んでみる？グランマとグランパって」
「それもしっくり来ないなぁ」
あ、忍さん落ち込んでる。ごめんなさい～。
「あ、ばぁばとじぃじでどう？最近こういう呼び方が定着してるみたいだし」
お姉ちゃんが一つの提案をする。
「ばぁば、かぁ～…」
「あ、それいい！ね、ヴィヴィオ。ばぁばって呼んでみて？」
「…ばぁば？」
「はい、ばぁばですよ～」
なんかお母さん、もの凄い気に入ってるようなんですが。
「…じぃじ？」
「おぅ、じぃじだぞ～」
「ばぁば。じぃじ」
「うんうん。やっぱり、孫って良いわねぇ」
「…そうだな。どんな理由があっても、俺たちの孫だ」
「よかったな、なのは。受け入れてもらえて」
「…うん」
どうなるかと思ったけど、無事ヴィヴィオも高町家の一員として受け入れてもらえた。
「なのは。子育てはやっぱり大変？」
「う～ん、本当の大変な部分を経験してないからねぇ。でも、ヴィヴィオはいい子だから」
「でもなのはちゃん、充分に母親してるよ」
そ、そうかなぁ。
育児は半分アイナさんに任せてあるし、これでも母親なのかな、という疑問はあるけど。
「そんなの、子供が自分を母だと認めれば、充分母親の資格あるわ

よ」
そ、そうかな？お母さん。
「私だって、一から育てたのはなのはだけだしね。恭也と美由希はお父さんの連れ子だったし」
「あの頃は迷惑かけたな、桃子」
「ううん。そのおかげで今があるんだし。二人とも立派に育ってくれたわ」
「お、お母さん。私は？」
「あ、そっか。三人だったわ」
忘れないでくださいよ～。
「そう思うなら、これからはちょくちょく帰ってきなさいよね」
「距離が半端なく遠いんですが…」
「それを何とかするのが親孝行ってもんだぞ」
…はい、肝に銘じておきます。
「…やっぱ、家族ってええなぁ」
「そうだね」
「帰るところがある、それだけでも仕事頑張れるもんなぁ」
フェイトちゃんとはやてちゃんがしみじみ語ってるよ。
この二人も色々あったからね。
「さて、新しい家族も増えたことだし、歓迎会といきましょうか。今日はもう、お店はみんなの貸切だから」
「は～いっ！」

いざ海鳴へ（後書き）

いよいよ、海鳴に帰ってきたなのは一行です

店内が固まるシーン…
ここが書きたくてやってきたようなものですw
TVが終わる頃には、この辺のネタは出来ていました
でも悲しいかな、遅筆なので時間が掛かりました

本当は、まだこの後もあるのですが
長くなりすぎそうなので、一旦切りました
次から、とらハキャラが登場してきます
現時点では、フィアッセとゆうひw
後何人かは登場させたいが、収集つかなくなりそ^^;

宴の最中で

「ヴィヴィオ、どう？このケーキ」
「うんっ、おいしい！」
「気に入ってもらえたようね」
「はい、キャラメルミルクもあるわよ～」
うわ、お母さんの味は久しぶり～。
「私も時々つくるけど、やっぱり桃子さんの味には敵わないなぁ」
「そう簡単には追いつけないわよ。プロとして、母としてのプライドもあるし」
「でも、さすが店長です～。この味は本当に落ち着きます」
「ありがとう、はやてちゃん」
お母さんも満更ではないみたい。
宴たけなわという雰囲気の中、貸切のはずのお店のドアが突然開いた。
「こんばんわ～。みんな久しぶり！」
ドアを開けた人物は…えぇっ！？
「ようやく来たか、フィアッセ」
ふ、フィアッセさんっ？
「ちょっと事務所でごたごたがあって、遅くなっちゃった。あ、桃子～、士郎～」
「フィアッセ～　。元気だった？」
「フィアッセ、ビックリしたぞ。お前まで来るとは聞いてなかったぞ」
「そのことは後で…あ、なのは？なのはなのっ！？」
お久しぶりです、フィアッセさん。
「わぁ～、本当に久しぶりね。何年ぶり？中学卒業以来だから、四年ぶり？」
「ですね」

「すっかり大人になって…立派なレディね、もう」
にゃはは、照れますねぇ…英国淑女に褒められると。
「それと、フェイトね。こちらも立派になって…」
「き、恐縮です…」
フェイトちゃんも照れまくりだ。
「それから…この子が話に聞いてた、はやて？」
「初めまして、八神はやて言います。こんなところで光の歌姫に会えるなんてびっくりですわ」
「うん、初めまして。さすが物怖じしないというか、立派だね」
「やや、そんなことないです～」
「美由希も久しぶり」
「フィアッセ、おかえり。またどうして突然来たの？」
「うん、それはね…」
そう言って話を切り出そうとしたときに、またお店のドアが開いた。
「フィアッセ～、早う呼んでぇな。外で凍え死んでまうやろ～」
はやてちゃんと同じ関西弁を使う一人の女性が、店内に入ってきた。
「…あ、ごめんごめん。すっかり忘れてたわ、ゆうひ」
「あかんやんっ！」
うわ～、ＳＥＥＮＡこと椎名ゆうひさんも来てたんだ。
「店長、マスター、めっちゃ久しぶりに来ました！」
「椎名さん、久しぶりですねぇ」
「活躍、ＴＶで拝見してますよ～」
「やや、うたうたいとしてはまだまだです～」
「ご謙遜を」
「天使のソプラノは伊達じゃないよね」
「や、褒められるんは未だ照れるんよ…」
大人同士で盛り上がってます。
「いや～、やっぱ生ＳＥＥＮＡはいいなぁ…」

忍さんがメロメロになってる。大ファンだものねぇ、昔から。
「お兄ちゃんは、フィアッセさんが来ることを知っていたみたいだったけど？」
何か一人だけ驚いてない様子だったよね。
「あぁ、彼女に会う為にイギリスにいたからな」
そっかぁ、それで納得。
「墓参りがてら、学校に行ってきた」
「墓参り？私らと同じ理由やね」
「うん。多分ティオレさんのお墓だね」
「ティオレ…さん？」
二人には馴染みがないよね。
ティオレ・クリステラさん。
フィアッセさんの母親で、『世紀の歌姫』と呼ばれた世界的シンガー。クリステラ音楽学校の初代校長。私が小学五年生の時に亡くなられた。お父さんのアルバートさんは、確かまだご健在のはず。
懐かしいなぁ、高町家と知り合い総出で参加した海鳴のクイズ大会。
決勝で、フィアッセさんとティオレさんとの親子対決。ティオレさんは偽名で参加してたけど、関係者はハラハラし通しだったとか。
「そんなにすごい人だったんだ」
「ほんま、なのはちゃんは有名人と知り合いやなぁ」
たまたまですよ。これは、お父さんの人脈だからねぇ。
「同じ飛行機だったの？もしかして」
「うん、そうだったの。なのは達のチケットも私が手配したのよ」
絡繰り発覚。そうでなければ、とても手配できないもの。
「でも、恭也が内緒にしておこうって…」
お、お兄ちゃん…そういうところは変わらないね。
「それで、突然来た理由なんだけど…」
そう言って、フィアッセさんはチケットみたいなものを差し出してきた。

「クリステラソングスクール恒例のワールドツアーのチケット、です」
「今回は海鳴ドームを借り切っての一大イベント！どや、驚いたか？」
自慢げに胸を張る椎名さん。
「う、海鳴ドーム？」
「あぁ、なのは知らないよね」
「三年前、臨海地区に出来たんだよ」
「確か…大きさは東京ドームと変わらないとか」
へぇ～、そんなのが出来てたんだ。
「今回のツアーは、海鳴がラスト。そこで、招待チケットを持ってまいりました」
「フィアッセ、凄いっ！」
「いつもすまないな」
「今年はイブの夜だよね、確か」
ピキッ。
あ、お母さんの様子が…。
「お、お店休めない…」
ものすご～くお母さんが落ち込んでる…。
「あ、そっかぁ。この日の要望が多くて日程組んだんだけど、迂闊だったわ」
恐縮しまくるフィアッセさん。こればかりはねぇ…。
「翠屋さん休んだら、死活問題やねぇ」
「ケーキの予約もいっぱい入ってるし、どうしよう～」
「あ、開始時間が今回遅いから、大丈夫かも」
チケットをよく見ると…開始が夜七時になってる。コンサートにしては遅めだね。
「…これなら何とかなりそうかな。ケーキさえ作れば、後はバイトの子でも大丈夫だし」
「何なら、俺は残ってもいいんだぞ、桃子」

「あなた…」
「ん～、出来れば士郎にも来てほしいんだけど…」
お父さんの提案に、フィアッセさんが難色を示す。
「俺は、歌のことはわからないし、店のスタッフが全員バイトってのも問題だろ。ここは、俺が犠牲になるよ」
「ごめんね、士郎」
「いいさ、後で土産話で盛り上げてくれれば」
しきりに謝るフィアッセさん。やっぱり、夫婦揃って来てもらいたかったのかな？
「私も残ろうか？父さん」
「いや、美由希にはちょっとやってもらいたいことがあるんだ」
お姉ちゃんの提案に、意外なところから横槍が入った。
「どういうこと？恭ちゃん」
「ここでは明かせないが、ちょっとフィアッセの周りで厄介なことが起こってるんでな」
そう言って、兄姉とフィアッセさんが内輪話を始めてしまった。
何か、良くないことが起こりそうな予感がする。
「はやてちゃん、フェイトちゃん」
「…言いたいことはわかるよ、なのは」
「私らもさり気なく様子を伺おうな。ただ…」
はやてちゃんが懸念材料を打ち明ける。
「魔法はあかんよねぇ。魔導士がいるわけでもないし」
そうだねぇ。ミッドじゃないから下手に魔法は使えない。サーチャーで相手の位置を探り、お兄ちゃん達をサポートする位しか出来ないか。
（そうね、迂闊に使用許可も出せないしね）
話を聞いていたのか、リンディさんが念話で話に割り込んできた。
（下手に魔法を使われると、管理局としても見過ごせなくなってしまうから、私達もそれとなく警備にあたりましょう）
（わかりました）

「いざとなったら、私がゴーサインを出すわ」
「ん？いきなり何の話です？」
話に入ってなかったエイミィさんが、怪訝そうな顔つきでリンディさんに聞いていた。
「その辺は、後で話すわ」
この話はもうおしまい、と言いたいのか、パンパンと手を打って視線を一斉に集めるリンディさん。
「フィアッセさん。私達の分もあるのでしょうか、チケットは」
「えぇ、もちろんです。ええっと、フェイトのお母さんでしたね。ご無沙汰してます」
「それじゃ、イブの日はみんなでコンサートね」
海鳴最後の夜のイベントが、意外な形で決まってしまった。しかも、ちょっと物騒なことが起こりそうな雰囲気だし…。
何も起こらないことを期待しましょう。
「ま、何か起こっても最終的には私らが何とかするしな」
そうならないことを願ってるんですがね、部隊長。

宴の最中で（後書き）

ちょっと間が開いてしまいましたｍ（　）ｍ
とらハから、フィアッセとゆうひが登場です
今回もちと短めかな？

「なのは」は、とらハ３が原型なので
フィアッセは外せないと考えてます
で、クリステラが絡むとゆうひも外せなくなるので
一緒に出してみました　アイリーンも出るかも？ｗ

やっぱ、とらハあってのなのはだと思ってますので
とらハキャラが増殖するかも知れませんｗｗｗ
どうぞ、おつきあいください＾＾

私の出発点

翠屋での宴も終わり、なのは達は自宅へ移動となった。
芸能人組はまだ仕事があるらしく、数分前にお迎えのハイヤーでお店を後にしていた。
翠屋から自宅は少し離れてはいるが、歩いていけない距離でもないので、徒歩移動となった。
「自分の家も久しぶりだね～」
素直に気持ちを述べるなのは。
「ミッドに渡ってからは、一度も帰ってないんだよね？」
「そうなるかなぁ。色々忙しかったし」
「同窓会任務でレリックに出会ってから、ずぅ～っと走ってきたもんなぁ」
レリック護送、空港火災、六課設立…数えればキリがない。
「ほんと、なのはもお父さんや恭也みたいに、目標に向かって一直線だもんね。そういうところはそっくり」
「そ、そうか？」
高町母が愚痴をこぼす。その愚痴に苦笑を浮かべる高町父。
「家柄のせい？」
「ちょっと違うような…」
親友二人も話に加わる。
「どっちかといえば、不破の血だよね」
「そうかもな。美由希は御神の血筋だから、ちょっと抜けてるところがあるし」
「恭ちゃんひどい！」
「美由希ちゃんが可哀想だよ～、恭也」
兄妹喧嘩が勃発しそうな雰囲気に忍の援護が入り、分が悪い感じの恭也であった。
「ママ～、おうちはまだですか～？」

だいぶ疲労がたまってるのか、ヴィヴィオがなのはに聞いてきた。
「もうすぐだよ」
「あ、見えてきた」
フェイトが高町家の門構えを視界に捉えたようだ。
「しっかし、何度来ても立派な家やなぁ」
「今時珍しい、純和風だもんねぇ」
「私の家もアリサちゃん家も大きいけど、なのはちゃん家は別の意味で良いよね」
しみじみ感想を漏らす三人。
「さぁ、どうぞ上がって～」
「おじゃまします！」
「お世話になります～」
元気の良い返事をする一行。その傍らで、
「ただいま～」
と、挨拶をする高町家。
「みんなお風呂入るわよね。三人ぐらいずつ入れるから、交替で入ってね～」
桃子の発言で、交替でお風呂を頂くことになった。
「順番どうする？」
「う～ん」
「じゃあ、こうしよか。私とアリサちゃんとすずかちゃんで入るわ」
「え～、おっぱい魔人二人と～？」
「すずか、そういうことを言うのね。覚悟はいい？」
「あ、うそうそ！冗談だから」
「すずかちゃんも言うようになったなぁ。ふふふ、今回の風呂場は戦場や。覚悟しいや～」
「はやてちゃんまで～」
「は～い、人んちのお風呂で暴れないでね」
二人に釘を刺すフェイト。
三人は、連れだって風呂場へ向かう。

「そしたら、私とフェイトちゃんとヴィヴィオで入ろうか」
「えっ！？な、なのは…と？」
「髪の毛洗ってあげるよ、久しぶりに」
「…う、うん。ありがと…」
フェイトはしきりに照れている。
「そしたら、私とかーさんと…忍さん、一緒しませんか？」
「私はかまわないけど…いいんですか？店長」
「気にしない気にしない」
「残るは…俺と父さんか」
「お、恭也と入るなんて久しぶりだな。背中流してくれるか？」
これで、お風呂の順番が決まったようだ。
「ふと思ったんだが…」
何気なく、恭也が言い出した。
「この人数なら、銭湯行った方が良かったのでは？」
「…あ、それもそうねぇ」
高町母が頷いた。
「でも、なのはにとっては家のお風呂は久しぶりでしょ？これでいいのよ」
「ありがとう、お母さん」
母のさり気ない気遣いに感謝するなのはであった。

「部屋割りはお風呂と同じでいい？」
「そうだね。一部屋じゃあちょっと厳しいよね」
ということで、なのはの部屋と客室と分かれて泊まることになった。
「ちょっと、先にヴィヴィオ寝かせてくるね」
お風呂ですでに限界だったヴィヴィオを、なのはは部屋に寝かせに行った。
「そしたら、客間に集合や」
残りのみんなは客間に集まった。

「忍さんは？」
「あぁ、なのはのお兄さんのところかな～」
「あの二人、恋人同士なん？」
「一応、高町＆月村両家公認なの」
たわいもない話が始まった頃、なのはが客室にやってきた。
「寝かせてきたよ～」
「お疲れ、なのは」
フェイトが労う。
「ちゃんと母親だ～」
アリサが感心している。
「一度決めた以上は、ちゃんとやらないとね。先生も隣にいるし」
そう言って、フェイトを見るなのは。
「えぇっ？フェイトちゃんにも子供がいるの？」
驚くすずか。
「…まぁ、なのはと同じなんだけどね。施設に引き取られた孤児を二人ほど引き取ってるんだ」
「春に会ってるフェイトちゃんの生徒がそうなの」
あぁ、あの二人ね…親友は納得したようだ。
「だから、子育てに関してはフェイトちゃんが先輩」
「わ、私は…義母さんや桃子さんに教わったことをやってるだけだよ…」
「だいぶ差を付けられたわね～」
なぜか悔しがってるアリサ。
それから、三十分ほどわいわいやっていたのだが、
「今日はさすがに疲れたでしょ？つもる話は明日にして、今日はゆっくり休みましょ？」
と、みんなの疲労状態を見抜いていたのか、すずかがそう切り出してきた。
「時差ボケもあるやもしれんし、そうしますか」
「そうだね。ミッド出てから、移動しっぱなしだもんねぇ」

ということで、今夜は長話をせずに解散となった。
「ヴィヴィオがベッドで寝てるから床に布団だけど、フェイトちゃん大丈夫？」
「大丈夫だよ」
なのはの部屋に戻って布団を見ると一組しかなく、枕が二つ…。
「な、な、なのは？こ、これって…」
「布団の数が足りなくてこうなっちゃったの。ごめんね、いやだった？」
「そ、そ、そ、そんなことはないけど…」
「良かった。一緒に寝るの久しぶりだね」
今夜は安眠出来るんだろうか、と寝る前に変な緊張が高まったフェイトであった。

日付が変わって午前四時。
パチリと目が開いたなのは。
教導官になってから、朝の早起きは普通になった。
少しトレーニングしてから、朝の教導に入るのが最近の日課なので、普通に目が覚めてしまったようだ。
（これでも、昔は朝が苦手だったのになぁ…）
隣の執務官を起こさないように布団を抜け出し、着替えを始める。
（少しランニングでもしてこようかな…）
そっと部屋を出て、階下に降りる。
しんとしているリビング。
まだ、誰も起きていないようだ。
縁側に出てみる。
ふと、庭にある道場が目に入った。
（懐かしいなぁ）
自然に足がそこに向かっていった。

午前五時。
いつもの時間に起き出した恭也は、朝練の準備をしに道場の扉を開けた。
まさかそこに先客が居るとも知らずに…。
ガララララッ！
扉を開けると、入口近くに正座しているなのはがいた。
「ん？なのはか。どうしたんだ？」
「…あ、お兄ちゃん。おはよう」
「あぁ、おはよう。ずいぶん早起きだな」
「最近はいつもこんなもんだよ」
「そうか。先生ってのも大変なんだな」
「朝と夜しか、自分の時間が作れないからね」
「しかし、何で道場にいたんだ？」
「う～ん、ここの雰囲気が好きなんだ。小さい頃から見てたから」
「そうか…」
そう言い残して、恭也は朝練の準備を始めた。
「ねぇ、お兄ちゃん」
「何だ？」
「朝練、見学してもいい？」
「別にかまわんさ。つまらないかもしれんが」
「ありがとう」
程なくして、また道場の扉が開いた。
「おはよ～ございま…、なのはっ！？」
美由希だった。
「おはよう、お姉ちゃん」
「どうしたの？こんな朝早く」
「ちょっとね」
「練習を見学したいんだと」
「ふ～ん、面白くないと思うんだけどなぁ…」
「久しぶりに見たいんだ」

「ま、ご自由にどうぞ」
そして、二人の朝練が始まった。

フェイトの目覚めは、ヴィヴィオの泣き声だった。
「ふぇ～～～ん…ママぁ」
「ヴィヴィオ、おはよ」
泣いてるヴィヴィオに優しく挨拶する。
「ぐすっ、フェイトママぁ…なのはママがぁ…」
「あれ？そういえば居ないね。どこ行ったんだろう」
不思議に思ったフェイトは、ヴィヴィオを連れてなのはの捜索に乗り出した。
まずは、隣の客室から。
「みんなおはよ～」
「あぁ、おはよ～さんや」
「どうしたの？フェイト。子供連れて」
「なのはが居なくなっちゃった」
「えぇ、なのはちゃんが？」
客室の三人も驚いている。
「ということは、こっちになのはは来てないんだね？」
「まだ見てないなぁ」
合流した四人は、階下に降りていった。
一階のリビングには、朝食の支度をしている桃子と、何か難しそうな新聞を読んでいる忍が居るだけだった。
「あ、みんなおはよう」
「おはようございます」
「おはよう。よく眠れた？」
「はい、ありがとうございます。ところで…」
朝の挨拶もそこそこに、さっきからの懸念事項をリビングの二人に聞いてみる。
「そういえば見てないわねぇ。忍ちゃんは？」

「私も見てないですね。こっちの部屋に来た形跡はないですし」
「散歩に行ったかな？」
奥の部屋から出てきた士郎がそう言ってきた。
「ヴィヴィオを置いて散歩は考えられません」
「それもそうねぇ…」
「ママぁ…ひぐっ」
一時は収まっていた泣き声が、また再発しそうである。
そんなときに、縁側から朝練を終えた高町兄妹がやってきた。
「おはよう…って、何か変な雰囲気だな」
「みんなどうしたの？」
「恭也。美由希。なのは見なかった？」
「あぁ、なのはなら…」
「道場だよ？」
えっ？と、みんなして顔を見合わせる。
「俺たちの朝練を見学したいって、朝一番乗りで道場にいたよ」
「まさか、なのはが道場にいるとは思わなかったよね」
それを聞いたフェイトは、一目散に道場へ向かった。残りの三人もそれに続く。
道場の扉を開けたら、なのはは朝と同じく正座で道場に座っていた。
「なのはっ！」
「あ、みんなおはよ～」
「おはよ～、じゃないわよ！探したんだからねっ！」
「え、私を？」
「ヴィヴィオちゃんが泣いちゃって大変だったのよ？」
「…あ、ごめんごめん。もうそんな時間なんだ」
フェイトに平謝りするなのは。
「ママぁ～」
「あ～、よしよし。寂しい思いさせてごめんね」
フェイトからヴィヴィオを受け取り、なだめる。

「それにしても、なんでこんな所にいるの？」
アリサが素朴な疑問を、なのはに投げかける。
「ちょっと、懐かしくなっちゃってね」
「ここって、お兄さん達の道場やろ？」
「うん。小さい頃からよく見てたんだ、練習を」
そして、なのははみんなにも座るよう勧める。それに倣ってみんなも道場の床に正座する。
「此処に座ると、心が引き締まる気がするんだ」
「へぇ～」
「フェイトちゃん、覚えてる？私と最初に激突した頃を」
「あ、うん。覚えてる」
「あの時、家を出る前にここで同じように座ってたんだ」
あの頃を回想するなのはとフェイト。
「私が出会う前やね、それ」
「そうだね。小三の春だから」
「あの頃、なのは思い詰めてたもんね」
「それをアリサちゃんが心配して…」
いろんなことが思い出される過去。
「ここが、私の出発点（スターティングポイント）なんだ、おそらく」
「出発点？」
「そう。何かあって悩んだときは、必ずここに来て座って考えてたんだ。自分の進むべき道を決意したのもここ」
「確かに…何か、張り詰めたものを感じるな～」
はやては、道場に入った経験がない。他の三人もあまり経験はないので、物珍しそうにしている。
「…何か、悩みでもあるの？なのは」
そんな話を聞いて心配になったフェイトが、なのはを心配そうに見つめる。
「にゃはは、今回はそういうのじゃないよ。懐かしくなったのと、気持ちの確認…かな」

「確認…？」
「うん。私は自分の道をちゃんと進めてるのかなぁ、と」
「大丈夫。なのはちゃんは、ちゃんと自分の進むべき道を行ってる。部隊長である私が保証するよ」
はやてが太鼓判を押す。
「私らが魔導士になって十年。フェイトちゃんは不幸な子供を救うべく執務官に。なのはちゃんは、魔法の正しい使い方を教える為に教導官に。私は、不幸な事件を未然に防ぐ為に部隊長に。ちゃんと進むべき方向に進んでるよ。まだスタートしたばっかやけどな」
「改めて、凄い仕事に就いてるんだよねぇ、あんたたち」
「ほんと、そうだよね～」
親友二人も感心している。
「あたしらは、まだまだ勉強中の身。なのは達に負けてられないわ！」
「勝ち負けはともかく…私も頑張らないとだね」
「アリサちゃん、すずかちゃん…」
その時、道場の扉が開いた。
「なのは。話は終わったか？」
「お兄ちゃん」
「かあさんが早く来いって怒ってるぞ。朝飯が出来てる」
「あ、は～い」
「それじゃ、朝ご飯にしようか」
フェイトの号令でリビングに移動する一行。
「あ、それとなのは」
「はい？」
「ちょっと頼みがあるんだが…」

私の出発点（後書き）

お待たせしました～＾＾
前半は宴の続き、後半が表題の内容な感じ…
分けた方が良かったかなぁ＾＾；
まぁ、よしとするか＜マテ

最後、恭也がなのはにある依頼をしてます
そこは、次回のお楽しみｗ

魔法の披露

ここは、地球。
日本国某県海鳴市。
時空管理局では、第九七管理外世界…と呼ばれている世界。
魔法文化がないので、管理外とされている―はずなのだが…。

「ディバイーン、バスターッ！」
「サンダースマッシャーッ！」

実家から少し離れた山の高台。
何故か、私とフェイトちゃんはこんなところで魔法戦を展開している。
ピピピ～ッ！
「は～い、お二人ともご苦労様～」
終了の合図と共に、リンディさんの通信が入ってきた。
「二人が地上に降りたら結界を解いていいよ、はやてちゃん」
「了解です」
広域支援型魔導士であるはやてちゃんは、エイミィさんと組んで結界魔法のコントロールをしていた。
私達が地上に降り立つと同時に、展開されていた不気味な色の空間が解除され、冬らしい青空が戻って来る。
「レイジングハート、モードリリース」
”Ａｌｌ ｌｉｇｈｔ．Ｍｏｄｅ ｒｅｌｅａｓｅ ＆ａｍｐ；Ｊａｃｋｅｔ ｏｆｆ”
「バルディッシュも」
”Ｙｅｓ ｓｉｒ．Ｊａｃｋｅｔ ｏｆｆ”
…おかしいなぁ。
帰省のはずなのに、何でこんなことに？

朝食後。
私達は、アリサちゃん達も含めてお兄ちゃんに道場へ招待された。
「お兄ちゃん。話って？」
朝食前の話を、詳しくしてくれるようだ。
「単刀直入に言う。なのは達の魔法、というものを見せてもらいたい」
「えぇっ？！」
当然、フェイトちゃんとはやてちゃんは驚くよね。私も返事保留で話を軽く聞いたんだけど。
「なのは達はともかく…」
「私達が同席して良いのでしょうか？」
アリサちゃん達の反応ももっともだ。
「なのはの友人だから、話だけでも聞いてもらえれば何かと対処がし易くなるだろう、有事において」
「そういうもんなの？」
「まぁ、お兄ちゃんなりに気を回してるんだよ、きっと」
「でも、何かが起こるという前提みたいな口ぶりですね」
すずかちゃん、鋭い。
「うんうん、そんな感じやな。…フィアッセさん関係とか？」
さすがは捜査官。こちらも読みが鋭い。
「実は、フィアッセの周りで不穏な動きがある。コンサートの妨害を企ててるようだが、どうもそれだけではないらしい」
「どういうことです？」
執務官も真剣に話を聞き始めた。
「十年前にも同じようにコンサートの中止をさせようとした動きがあったんだが、俺と美由希がそれを食い止めたことがあった」
その相手がお姉ちゃんの本当のお母さんである、御神美沙斗（みかみみさと）さん。
そんな話を、中学生の頃お姉ちゃんがしてくれたっけ。

彼女も、御神流の剣術の達人。御神流は、今現在お兄ちゃん、お姉ちゃん、美沙斗さんの三人しか継承者がいないらしい（お父さんは引退したので人数に含まれない）。
その辺のことが原因で、美沙斗さんはバックにいた黒幕にいいように使われていただけらしかった。
事件が解決した現在は、香港に拠点を置きながら仕事の合間によく家に来てくれる。
「その時の黒幕は、根こそぎ殲滅した…はずだったが、どうも残党が残っているらしく、復讐を画策しているという情報が最近になって飛び込んできた」
「ぅわ～、いるのよねぇ。とんでもない勘違いな輩って」
…何か過去にあったんでしょうか、アリサさん？
「でも、復讐ならお兄さん達がターゲット？」
「それもあるが、最終目標は…フィアッセだ」
「えっ！？」
一同、驚く。私も聞いてビックリしたもの。
「どうも、フィアッセが全ての元凶と思い込んでいる節があるようだ」
「どうしてです？」
「その辺は、彼女のプライバシーに関わることなので言うことは出来ないが、コンサート妨害を隠れ蓑にして俺たち三人を亡き者にしようとしているらしい」
なかなか物騒なお話になってきましたよ？
「警察を始め色々な機関に応援を要請しているが、相手はテロ組織。非合法な手段も厭わないはず。規模も現段階では未知数。そこで、こちらも非合法…とまでは行かないが、なのは達の魔法で使える物がないか見せてもらいたい、というわけだ」
「私ら非合法な存在なんや」
「魔法自体認知されてないでしょう、当然です」
捜査官と執務官の漫才は置いといて。

「でも、いいのかなぁ。勝手に魔法を見せたりして。いくら知ってるとは言え…」
「その辺は大丈夫よ」
後ろから声がしたので振り向くと、リンディさんが立っていた！
「みなさん、おはよう」
「お、おはようございます…」
「義母さん。いつ来たんですか？」
「昨日の翠屋さんの時点で、今日ここに来ることは恭也さんには教えておいたわ」
「それはそうと、話の内容は聞いてます？」
「えぇ、詳しいことは美由希さんからエイミィを通じてね。この世界の魔法に関しては、私が全責任を負う立場にありますから大丈夫。そのための現地駐在人も兼ねてますから」
海鳴に住み始めてそれなりの年月が経ってますもんねぇ。エイミィさんとお姉ちゃんは仲が良いし♪
「ということは、エイミィさんも知ってるんですよね」
「えぇ。彼女は今、国守山（くにかみやま）で準備してるから」

そして、冒頭に戻る。
「なるほど。結界内なら魔法の使用も大丈夫なんですね」
「使ったところを目撃されないからね～。異相空間だから」
すずかちゃんの問いに、エイミィさんが答える。
「エイミィさんの管理局特製結界と、私のベルカ式広域結界の二重展開によって完璧な空間が作れるわけや」
「派手にドンパチやってくれちゃって」
「しかし…まだ手の内を全て見せていないな？なのは」
ギクッ。
「そっちの…フェイトも」
ギクギクッ。

「まぁ、無理もないと思うんですけどねぇ…二人は最大の奥の手を出していないんですけど、出しちゃうと結界が壊れてしまうんですよ」
　エイミィさん、微妙なフォローありがとうですぅ。
「ほぉ…」
「ですので、よっぽどのことがない限り使用許可も下りないんですよ。この世界では…というより、どこの世界でも。威力が強すぎて」
　いつか、ＳＬＢ（スターライトブレイカー）の試射で自爆した経験もあるし…おいそれとは出せませんねぇ、奥の手だけは。
「まぁ、色々魔法をお見せしたわけですが、どうでしょうか？恭也さん」
　リンディさんが、お兄ちゃんに感想を求める。
「う～ん、なのは達の技は最後の切り札でしょうね。探知関係とかは、あまり目立たなくて良いですから警備には使えるでしょう」
「それじゃ、会場を含め周辺地域の警戒は私達が担当することでいいですかね、リンディ統括官」
「そうね。広域探査は得意分野ですからね」
　エイミィさんの提案に、リンディさんはＯＫサインを出す。
「管理局から少し人材を派遣してもらって、広域と周辺と会場と分けて警戒に当たりましょう。実際の警邏は地元の方にお願いして、こちらからは情報提供という形を取ります。会場内は、センサーを配置して動向を監視します。なのはさん達は普通にコンサートを観覧して貰い、必要に応じて呼び出す…こんなところでしょうか？」
　無難な線でしょうね。
　状況が違うとはいえ、皮肉にもレリック事件での経験がここで役に立ちそう。
「となると、指揮官が必要になるんやないですか？」
　はやてちゃんが、当然浮かぶであろう疑問をリンディさんにぶつける。
「その辺の一切合切は私が担当します」

「え？でも、そうすると観覧が…」
「あなた達は休暇でこちらに来てるのでしょう？必要になるときまでコンサートを楽しんでいらっしゃい。親友との親交を深めるのも重要よ？」
あ、ありがとうございます、リンディさん。
「それじゃ、私達はお呼びが掛かるまでコンサートを楽しむのが任務なわけね」
「任務とは少し違う気が…」
アリサちゃんらしい解釈の仕方ね。すずかちゃんがちょっと苦笑してるけど。
「その辺を含めて、今日の警備会議に出てもらえませんか？リンディさん」
「そんなところに行ってもよろしいんでしょうか？」
「まぁ、伏せる部分は伏せてもらえば大丈夫かと」
「わかりました」
「この話は取りあえず置いといて…あなた達は休暇を楽しんでらっしゃい。久しぶりの海鳴でしょう」
そうだね。後は詳しい話が決まってから、ということで。
「それじゃ、早速街へ繰り出すわよ！」
「なのはちゃん達が知らないところを案内してあげる」
「それは楽しみやなぁ」
「うん、そうだね」
あ、一旦家に帰ってヴィヴィオを連れてこないと。折角海鳴に来たんだから、ヴィヴィオにも楽しんでもらわないとね。
「まずはあそこは外せないよね」
「あのお店も教えてあげないと…」
二人は、もう今後の計画を相談し始めている。
久しぶりの海鳴の街。
年甲斐もなく、楽しみになってきている自分がいた。

魔法の披露（後書き）

大変お待たせいたしました
かなりの難産でしたｏｒｚ
サブタイトルも何か変だし＾＾；
５文字縛りでサブタイトルを考えてるので苦し紛れ感ありあり；；；

今後起こる（であろうｗ）事についての話し合いになってしまいました
起こるか起こらないかは作者次第？ｗｗｗ
まぁ、起こってもハデさは無いと思います　管理外世界なので（ぇ

次回は、町へ繰り出すなのは一行
のほほんとした日常をメインに書く…予定ｗ

海鳴の街へ

海鳴駅前、午前十一時。
一度解散したなのは一行が再度集合した。
「おまたせ～」
「そんなに待ってないわよ」
三々五々、挨拶をかわす。
「何だかんだで、アリサちゃんが一番乗りだったよね♪」
「すずか、内緒だって言ったのに！」
「ええやん。それだけ楽しみだったってことやろし」
「こうやって、五人で出掛けるのも久しぶりだしね」
感慨深く、感想を言いあう。
「…もうひとりいるんですけど」
「ああっ！ごめんねヴィヴィオ。つい…」
「フェイトママ、ひどい～」
フェイトに忘れられたヴィヴィオは、文字通り顔を膨らまして怒っていた。
「でも、ヴィヴィオとこうやってお出掛けするの初めてだね」
「なのはママ、忙しいから…」
事情はわかっていても、やはりそこは年相応の子供。やっぱり寂しがっていたようだ。
「ごめんね、その代わり今日はうんと甘えていいからね」
「うん！」
屈託のない笑顔で返事。なのはの顔も緩んでいるように見える。
「何々、なのはって親バカなの？」
「そんな風には見えないんだけど」
「親バカはひどいよ～、アリサちゃん」
「う～ん、確かにそうは見えなくはないかもなぁ」
「はやてちゃんまで～」

「なのはらしいと言えばらしいかな」
「フェイトちゃんも～。でも、否定は出来ないかなぁ」
いろんな方向からの攻めに、なのはは苦笑するしかなかった。
「やっぱ子供には、幸せになってほしいもんね」
「私もフェイトちゃんも、似た境遇だったから。せめて子供は…ね？」
「誰にでも幸せになる権利がある。誰かがそう言ってたなぁ、どこかで」
出所がどこなのか、はやてに聞いてみたい気もするが、そこは敢えてやめておいた方がいいと思われる。
「幸せの形は人それぞれだけど、子供には笑っていてほしいな。私は」
「その点、ヴィヴィオちゃんは笑えてるよね」
「笑える＝幸せ…は短絡だけど、究極だと私は思うな」
アリサの考えに、うんうんとすずかも同意する。
「そうだね～。子供が笑えない世界って嫌だね」
「そんな世界にならないように、私らは頑張らないとな」
「それが私たちの仕事だからね」
「うん」
なのは・フェイト・はやての三人は、改めて自分の仕事の意義を再認識していた。
「それじゃ、湿っぽい話は終わり！移動するわよ」
マイナスの空気を感じ取ったのか、アリサが語気を強めて雰囲気を払拭した。
「何処へ行くん？」
「今年出来た大型ショッピングモールがあるの。結構な数のお店があって、一日居ても飽きないよ？」
「その中にも、？これは！？というお店があるのよ」
「へぇ～、楽しみだね。なのは」
やはり女の子。そういう部分はみんな興味津々のようだ。

「そうだね。その中に子供服関係のお店もあるの？」
「やっぱり、その辺は気になるのね…」
「一応、母親やってますから」
「もちろんあるよ？私お勧めのお店があるんだ」
「すずかちゃん推薦かぁ。それは期待大やね」
「それじゃ、行こうか」
アリサの先導で、目的地へ移動開始となった。

「じゃ～ん！ヴィヴィオちゃんを、私がコーディネイトしてみました～」
とある子供服用品店。真っ先にみんなの標的？となったヴィヴィオが、試着室からすずかと共に出てきた。
「おぉ～、すごい！やっぱすずかね」
「うん。似合うてる似合うてる」
「そ、そうでしょうか…」
あまりにも周りの反応が良かったのか、ヴィヴィオは照れてしまっていた。
「まずは、一着購入かな～」
「うん。良い感じだね、ヴィヴィオ」
二人のママにも好感触だったようだ。
「それじゃ、今度はあたしね！」
そう言って、今度はアリサが服を物色し始めた。
「私も選んでみようかな？」
「はやてちゃん、大丈夫なの？」
「失礼な物言いやなぁ、なのはちゃん。私かてヴィータとリインの服とか買うてるんやで？」
「え、そうだったんだ…」
感心した台詞は、意外にも執務官の方から飛んできた。
「フェイトちゃん、一体私をどない思うてるんの？」

「てっきり作ってるのかと…」
「う～ん、出来なくはないんやけど、最近時間が取れへんからなぁ。ま、買うのも楽しみの一つではあるけどな」
そうこうしてる間に、アリサのコーディネイトが終わったようだ。
「カーテン…オープン！」
そして、出てきたヴィヴィオを見て全員息を呑む。
「アリサちゃんのセンスも素敵～」
開口一番、すずかが褒めちぎった。
「うん、お嬢様らしい選択だね、アリサ」
「アリサちゃんのも、えぇ感じや」
「これも買い…かな？」
なのはは、今回の服も即決で購入のようだ。
「なのはぁ。何かポンポン買ってるみたいだけど、お金大丈夫なの？」
どうやらアリサには、なのはが衝動買いしているように写ったようだ。
「うん、お金は大丈夫だよ。お買い物するくらいの持ち合わせはあるし。それに、元々ヴィヴィオの服があまりないから、こっちで買おうとは思ってたんだ」
「え、向こうの世界って子供服は無いの？」
「あぁ、もちろんあるよ？ただ、意外と種類がなくてね、なのはとも悩んでたんだ」
すずかの疑問に、フェイトが答える。
「こっちの世界は、子供服とか充実してるってエイミィさんが言ってたんだ。だから、今回の帰省で少し多めに買って帰ろうかな、ってね」
「ふ～ん…」
何か思案しているアリサ。
「ねぇ、なのはさえ良ければだけど…ウチから服持って行かない？」
「え？」

「ウチ…何故か知らないけど、服だけはたくさんあってねぇ。子供時代の服もたくさんあるんだ。あたしのお下がりで良ければだけど…」
「いいの？貰っちゃって…」
「服も意外とお金掛かるしね～。出費を抑えられるところは抑えるべきよ、なのはちゃん」
すずかが後押しする。
「まぁ、ヴィヴィオが気に入るかどうかは別問題だけどね」
「アリサに甘えてもいいんじゃない？なのは」
「そうや。貰えるもんは貰っとかなぁ」
「…うん。ありがとうね、アリサちゃん」
なのはも納得したようだ。
「べ、別に…お礼なんていいわよ…」
「くすくす」
「な、何笑ってるのよ、すずか！」
「ん～、なのはちゃんに対しては変わらないな～ってね♪」
「～～～～」
すずかに核心をつかれ、何も言い返せないアリサであった。

お昼時。
一行は、フードコートエリアに移動してきた。
「やっぱ、日本人は和食やな～」
「落ち着くね～」
「わ、私はミッド人だけど海鳴が長かったから、洋食より和食かな」
三人それぞれ和食に対する感想。
「和食のお店をチョイスして良かった～」
お店選びを任されていたらしいすずかは、安堵の表情を浮かべる。
「ここ、すずかのお気に入りだしね」
「そうなんだ」

「みんなが気に入るかどうか不安だったけど…」
「味は文句なしや」
「食に関しては、はやてはうるさいからね」
「…フェイトちゃん、普段私をどう見てるのか小一時間問い詰めとうなったわ」
「ええっ？」
「くすくす」
部隊長と執務官のやり取りに、すずかは終始にこやかにしていた。
「ヴィヴィオ、どう？こっちのご飯は…」
「とてもおいしいです」
「アイナさんとのご飯と、どっちがおいしい？」
「う～～～ん……アイナさん！」
「はは、どこの世界でも手料理には敵わない、か」
ヴィヴィオの反応に、アリサは苦笑していた。
「なのはちゃんはお料理作ってあげないの？ヴィヴィオちゃんに」
「お休みの時は作るけど…なかなかねぇ」
「私も外に出っぱなしが多いから…」
二人のママは軽く落ち込んでる。
「そしたらさぁ、今日はフェイトん家だから多分お母さんが用意してると思うけど、明日は私んちの番だからそこで料理大会と洒落こまない？」
「料理大会？」
「大会は大げさだけど、みんなで色んな料理を作らない？って話」
アリサがその場で思いついたのか、明日のプランが提示された。
「…アリサって料理出来たんだ」
「しっつれいな物言いね、フェイト！」
執務官、今日三度目の失言。
「アリサちゃん。そこの執務官、ちょ～う教育が必要な気がするんやけど…」
「あら、偶然ねぇ…私もそう思ってたのよね」

笑顔でフェイトににじり寄る、二つの影。
「二人が怖い～」
「あはは…」
残りの二人は苦笑するしかなかった。
「ヴィヴィオもつくるの？」
「さすがにまだ無理だから、簡単なお手伝いからかな。やってみる？ヴィヴィオ」
「うん、がんばる！」
ヴィヴィオの可愛らしい奮起に、その場の全員が癒された。
「それじゃ、午後もお店回るわよ～！」
食事後、またもやアリサの先導でショッピング第二幕が始まった。

海鳴の街へ（後書き）

待っている方、お待たせしました

５人＋１でのデート？風景です
こういうシーンも、意外と難しいですね～
リアルでこういう経験がなｋ（ふぉんぐしゃ

この作品では、なのは視点と他人称視点が入れ替わりで
展開していきます　順番は作者の気まぐれで（ぇ
あと、戦闘がご希望な方はすいません　あまり出てきません
もう少し進めば少しずつ出てくるかも知れませんが…
戦闘メインな話ではないので、その辺はご了承ください
あくまで帰省がメインです　演習はおまけ＜マテ

あと、今回とらハキャラ絡ませるつもりが絡まなかったｏｒｚ
まぁ、無理することもないかｗ

順調な演習

「一撃必倒、ディバインバスターっ！」
ドゴォォォォォォォォン……。
ガジェット？型を一撃破壊。
沸き上がる歓声。
「た、助かりました。さすがストライカーズですね」
後方にいた地上部隊に感謝されてしまった。
「いやぁそれほどでも…」
「何やってるの、ばかスバル！」
そこに、相方の通信が割り込んできた。
「あはは、ちょっと油断しちゃった」
「ちょっとどころじゃないでしょ！後衛の目の前にまで敵に入り込まれちゃって！！」
容赦ない罵声を浴びる私、スバル・ナカジマでした。
「すいません、僕が迎撃しきれなかったせいで…」
エリオが謝っている。フォローありがと。
「エリオのせいじゃないわ。今回のは、スバルが前に出すぎ。モニタで見ても、陣形が崩れてたわよ」
突破力には自信があるだけに…今回は反省。
「そうだぞスバル。些細なミスが部隊の全滅を誘うことになる場合もあるからな。もう少し周りを見るクセをつけろ」
「…あい」
ヴィータ隊長にも、やんわりと窘められた。
ピピッ、ピピッ！
ん？緊急割り込みの合図だ。
「スターズ０５から全体へ！十時方向からガジェット？型の編隊が接近中！距離五百、数は二十以上！」
「こちらロングアーチ０２。こちらでも確認。さらに四時方向から

も同規模のガジェット編隊が接近中！」
「挟み撃ちか…」
ヴィータ隊長が何かを思案しているみたい。
「０４（キヤロ）と０６（先生）は防御展開準備！」
「了解！」
ティアが早速防御の指示を…。さっすがは副隊長。
「あたしと０２（スバル）は迎撃態勢。０１（ティアナ）と０３（エリオ）は、地上部隊を守りつつあたしらの撃ち漏らしを撃破」
「了解！」
さて、先ほどの失敗をしないように…。
「行くよ、マッハキャリバー！」
”Ａｌｌ ｌｉｇｈｔ，Ｂｕｄｄｙ！”
「アイゼン！」
”Ｊａｗｏｈｌ（ヤヴォール）！”
「クロスミラージュ、ツーハンドにチェンジ」
”Ｙｅｓ，Ｔｗｏ－ｈａｎｄ Ｍｏｄｅ．”
「ストラーダ、フォルムツヴァイ！」
”Ｄ？ｓｅｎｆｏｒｍ（デューゼンフォルム）”
「クラールヴィント、お願い」
”Ｊａ”
「あたしが四時方向に行く。スバルは十時方向を」
「了解です！ウィングロードっ！」
どごぉぉぉぉん…
ＩＳ魔法であるウィングロードで、足場を形成。編隊へ向かう。
「リイン曹長は、スバルの撃ち漏らしをチェックしてください」
「お任せあれ！」
バックはティアに任せて…っと。
「でやぁぁぁぁーっ！」
バゴォォンッ！
まず一体！

「リボルバーシュート！」
バシュゥゥゥン！
これで、直線上の数体を撃破。
”スバル、後ろっ！”
…え？
”Ｃａｌｉｂｕｒ（キャリバー）　Ｓｈｏｔ（ショット）！”
突如、体が捻られ後ろ回し蹴りな感じになる。
そして、振り抜いた先にはガジェットが一機。
間一髪間に合ったらしい。
「助かったよ、マッハキャリバー」
”Ｄｏｎ'ｔ　ｗｏｒｒｙ”
そうしてる内に、十機程が私のいた空域を突破していく。
「ごめんティア、振り切られた」
「？型だし、想定内よ」
頼もしいお言葉ですこと。
「エリオ、行ける？」
「任せてください。ストラーダ！」
”Ｓｐｅｅｒａｎｇｒｉｆｆ（スピーアアングリフ）”
ストラーダのブースターが唸る。
”Ｂｏｏｓｔ（ブースト）　Ｕｐ（アップ）　Ｓｔｒｉｋｅ（ストライク）　Ｐｏｗｅｒ（パワー）”
そこへ、さらにキャロのブースト魔法が掛かる。
「ありがとう、キャロ」
「頑張って、エリオ君」
「いっけぇぇぇぇぇっ！」
ドンッ！
地上から、集団の先頭めがけて直線的に飛んで行くエリオ。そして、一機目を貫通し二機目に突き刺さったところで、
「サンダーレイジ！」
”Ｔｈｕｎｄｅｒ（サンダー）　Ｒａｇｅ（レイジ）”
フェイトさん譲りの雷魔法が炸裂！

見事迎撃成功…に見えたが、三機程残っている！
「シュートバレット」
”Ｓｈｏｏｔ（シュート）　Ｂａｒｒｅｔ（バレット）”
追尾型の弾丸をティアが放つ。
一機…二機…三機目の時に異変が！
弾が掻き消された！？
「しまった、ＡＭＦ！？」
まずい、地上部隊に辿り着かれてしまう！
「ウィングシューター！」
キャロが必死で迎撃してるが、ＡＭＦのせいで掻き消されてしまう。
”Ｓｎｉｐ（スナイプ）　Ｓｈｏｔ（ショット）”

そこへ、どこからともなく残り一機へ向けて狙撃弾が放たれた。
ドガァァァァァン…
見事にＡＭＦを突き抜けてガジェットを破壊。
「最後の最後で油断なんかしてるんじゃねーぞ、副隊長」
最後を決めたのは、ヴァイス陸曹だった。
「ありがとうございます、助かりました」
「いいってことよ。これが俺の仕事だからよ」
さて、こっちは終わったけどヴィータ隊長の方はどうなったかな…？

「射撃魔法、一斉射撃！」
ガジェット編隊へ向けて、射撃魔法隊が打ちまくる。
あたしがやってもいいが、それでは演習にならないので、今回は地上部隊に任せている。打ち損じた分を自分が迎撃すればいいだけのこと。
「こちらロングアーチ０１。順調に数が減っています」

まぁ、普通に魔法でもぶっ潰せるからな、ガジェットは。ＡＭＦを展開されない限り。
「ロングアーチ０２からスターズ００へ。ＡＭＦを展開した？型が突破してきます。その数八機！」
…来たか。
「いくぞ、アイゼン」
”Ｊａｗｏｈｌ．Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ（シュワルベフリーゲン）”
目の前に八個の鉄球。デバイスもカートリッジロード。
「撃ち抜け！」
ガコン、ガコン！
目標に向かって鉄球をぶっ放す。
「こちらロングアーチ０２。目標破壊を確認。残り三…二…一…残り一機が回避！」
何、回避だと！？そんな莫迦な！
「ラケーテンフォルム！」
”Ｊａｗｏｈｌ”
グラーフアイゼンを第二形態へチェンジ。
「ラケーテンハンマーっ！」
叫ぶと同時にブースターが唸り、回転を始める。
「うおぉぉぉぉぉっ、いっけぇぇぇぇぇっ！」
目標に向かって飛び上がる。

ガゴォォォォォォォンン…

「ロングアーチ、撃破を確認。レーダーに対象反応無し」
ふぅ、事なきを得たか。
「ヴィータ、危うかったな」
…シグナムか。
「どうってことねーよ」
「その割には顔面蒼白だったぞ、回避されたときは」

ちきしょう、よく見てやがるな。
「それだけ、なのはのシミュレータが優秀ってことだろ」
「そういうことにしておいてやる」
…この野郎。
「まぁいい。スターズ及び地上部隊は開始地点に集合！」
「了解！」

「う～ん、今日も疲れたねぇ」
「そうね、あんたがミスばっかしてくれるからねぇ」
「も～、それは言わないでよぉ～」
「ティアさん、その位で…」
「スバルさんも反省してるようですし」
あ、ありがとう…ちびっ子コンビよ。
「今日はちと不甲斐なかったな、スバルよ」
あ、父さん。
「お疲れ様です！」
「あぁ、堅苦しいのはいいって。どうだ、演習は順調か？」
「まぁ、何とか」
「ところで、今日の晩飯なんだが、１０８隊中心で鍋パーティを計画中なんだが、来るか？」
「鍋ですか？」
「少し寒くなってきた時期に鍋、人とのコミュニケーションを図りたいときには鍋、ってのがウチの隊のやり方なんだ。今回は、特注の大鍋で大人数のパーティをやるみたいなんだ」
「ふ～ん、いいねぇ」
「あの…鍋って何ですか？」
「想像出来ないんですが…」
ありゃりゃ、ちびっ子は知らないんだ。
「鍋ってのはあれよ。時々なのはさん達が料理するときに、一つの

器に野菜やらお肉やらを一緒に入れて、火にかけてぐつぐつ煮込むやつよ」
「あぁ、なのはさん達の出身地独自の料理法とか言ってたあれですか」
「八神部隊長が得意とか言ってましたねぇ」
見たことはあっても、それとは知らなかったのか。
「来るか？」
「はいっ！」
「行きたいです！」
「それじゃティアナ、六課全員連れてこい」
「了解しました」
「鍋かぁ～、良いねぇ」
「それじゃ、みんなに声かけて行きましょうか」
鍋パーティ、楽しみだなぁ。

順調な演習（後書き）

お待たせしました

今回は演習側を少し書いてみました
擬音表現が変な感じについては
ツッコミを認めない方向で（ぉ

次回は新年明けてからになると思います

＊デバイス発言などは、Ｎａｎｏｈａ　Ｗｉｋｉを参照してます

鍋を囲んで

「ここが会場らしいけど…」
「あ、何か前の方にあるよ？」
「ま、まさか…あれが鍋ですか？」
「想像してたのと、スケールが違うよ！」
それもそのはず、六課メンバーの視線の先には、巨大な鍋が鎮座していた。その傍らでは、建設機械のパワーショベル三台がせっせと鍋をかき回していた。
「お～来たか、六課のメンバー共」
「父さん、鍋大き過ぎじゃない？」
「そんなことないぞ？参加人数から計算しての特注品だからな」
「それにしても…大きいっすね～」
つい感想を漏らしたヴァイス。他のメンバーも、巨大鍋を見て惚けてる。
「こんなに大きいのは初めてだが、鍋に関しては手慣れてるからな。調理にもうちょっと時間が掛かるから、良かったら周りを手伝ってやってくれ」
そう言われて、みんなは周りの手伝いに入った。
「そういえば、向こうの世界でこんな巨大鍋をやる地方があるというニュースを聞いたことがあるな」
何気なくシグナムが呟いた。
「山形の芋煮会ね。結構有名よ？」
シャマルがあっさりと答える。
「あぁ、あれか…。でも、ゲンヤのおっさんがそれを知ってるとは思えねぇんだけどな」
「確かにな…」
ヴィータとシグナムは、共に同じ疑問を抱いていた。
「それなんだが、大概の情報はお嬢から聞いてるぞ」

ゲンヤが裏事情を話す。はやてとゲンヤの付き合いも長いようだし、祖先の影響からか和食好みなナカジマ一家なようで、そういう話題もあったそうだ。
「足りない情報は、私から提供いたしました～」
「おまえも噛んでいたのか、リイン」
「はやてちゃんも、一度はやりたいと目論んでいたようですよ？」
「主（あるじ）ならやりかねん…」
「鍋の効果に関して見解が一致したとのことで、是非やるべきだと強力にプッシュしてたみたいです」
「それで、今回このような形になったと…」
「しっかし、スケールデカ過ぎだよな～」
「さすがは主、というところか」
「八神部隊長が絡むと、規模が大きくなるんですか？」
今までの話を受けて、ティアナが質問してきた。
「そういうことはないんだが…」
「ただ、今回はネタがネタだからな…」
どう答えて良いやら、悩むシグナムとヴィータであった。

「では、今宵は演習のことも忘れて思う存分飲み食いしてくれ。部隊間の親睦も今回のテーマになってるので積極的にやってくれ。では…」
『いただきま～す！』
斯くして、ミッドでは前代未聞の鍋パーティが始まった。
「ん～、おいしい！こんな料理初めてだよ～。ね、ルキノ？」
「ほんとだね～、アルト。少人数でなら六課でもやったことあるけど、まさかこんな規模でやるとは思わなかったよ」
「私も映像で見せて貰ったことがあるけど、これほどとはね～」
アルト、ルキノ、シャーリーで固まって食事してるところに、
「あの～、２０２部隊の管制担当なんですが、色々お話を伺いたくて…」

と、人がやってきた。
「あぁ、良いですよ～。どんな話を聞きたいのかな？」
早速交流が始まった。
エリキャロも、今日演習で一緒だった地上部隊と談笑していた。
「これが、八神部隊長が望んだ光景…なのかな」
人知れず、スバルが呟いた。
「そうなのかもね。一部とはいえ、時空管理局の人間が一つになっている。今までには無かったことだから…」
そのつぶやきにティアナが答える。
「地上と航空と次元空間、どの場所も大事だが、枠を超えて協力し合わないと本当の平和なんてあり得ないからな」
その隣に、二人の古巣である３８６部隊の隊長が立っていた。
「た、隊長！お久しぶりです。すいません、挨拶が遅れて…」
「ティアナにスバル。元気でやってるか？レリック事件大変だったな」
「あ、いえ…」
そして、しばらくたわいもない話をしていた時、隊長が何気なく話を振ってきた。
「３８６（ウチ）部隊を離れて機動六課に来て、得るものはあったか？」
「もう、勉強勉強の毎日です」
「色んな事を教わりました！」
「そうか…スカウトの時点では正直どうかと思ってたのだが、無事成長してるみたいだな」
「あ、ありがとうございます！」
「褒め言葉として受け取っておきます」
「それに、お前達がウチに残していったモノも、こちらでちゃんと受け継がれている。全く、手放すには惜しい人材だったよ」
「そ、そんな…」
「褒めすぎですよ、隊長♪」
「…まぁいい。たまには顔を見せに来い。お前達に会いたがってる

隊員もいる」
「了解しました」
「休み合わせて遊びに行きます！」
そんな会話をして、隊長は去っていった。
「隊長来てたんだね」
「いない方が不思議だけど…新年になったら、許可取って行ってみる？」
「それよか、今から行ってみない？折角ここに集まってるんだしさ♪」
「…それもそうね。行かない手はないわね」
そして、二人は３８６部隊のいるエリアへ移動していった。

「ん～、食べ過ぎちゃったかな？」
「エリオ君、もの凄い勢いだったもんね～」
「…はは、恥ずかしい」
エリキャロコンビが、六課メンバーのいるエリアに戻ってきた。
「お、お帰り～」
「どこに行ってたの？」
アルトとルキノが出迎えた。
「あ、今日演習で一緒だった部隊の方に誘われまして…」
「食事しながら、色んなお話をしてきました」
「結構盛り上がってたんじゃない？」
「そうですね。盛り上げ役の人が面白くて」
「色々やらされてたよね、エリオ君」
「キャロも同じようにはやし立ててたじゃないか」
「ごめ～ん、つい…」
照れながらも、こんなことがあったんですと報告していく。
「良い経験になったんじゃない？二人とも」
「こんな大勢での食事は初めてでしたが、参加して良かったです」
「とても楽しかったです」

「うんうん、良かったねぇ～二人とも。おねいさんは嬉しいよぉ～」
何故かアルトが涙を流しながら感激している。
「ルキノ～、いるか？」
そこへ、グリフィスがルキノを探しながら通りかかった。
「あ、はい。ここですけど」
「あぁ、良かった。ちょっと僕に付き合ってくれないか？紹介したい人がいるんだ」
「はぁ、別に良いですけど…」
「じゃ、こっちへ来てくれ」
「了解です。…あ、みんなごめんね～。ちょっと行ってくる」
「はいな～」
アルトが返事をすると、二人で奥の指揮官クラスが集まってる方面へ歩いていった。
「紹介したい人って…誰なんでしょう？」
ふと、キャロがアルトに聞いてきた。
「ん～、想像がつかんね～…」
「お母さんが提督ですから、色んな人脈を持ってるんでしょうか」
「まぁ、その辺はシャーリーさんが詳しそうだけど…いないし」
「詮索はやめておきましょう。ルキノさんにも迷惑が掛かるかもしれないし」
そうエリオが言うことで、この件は終わりとなった。
「あ、エリキャロ帰ってたんだ～」
「その前にただいま、でしょうが」
フォワードコンビも、六課エリアに帰ってきた。
「あ、スバルにティア。おかえり～」
「おかえりなさ～い」
「どこに行ってたんですか？」
「ん？ちょっと古巣へ顔を出しに」
「派手な歓迎を受けて…ちと疲れたぁ～」
ティアナはそうでもないが、スバルは疲労困憊といった感じだっ

た。
「あのスバルさんをこんなにさせるなんて…」
「どんな部隊なんですか、３８６部隊って…」
エリキャロも、スバルの状態に驚いていた。
「まぁ、ノリだけはいいからねぇあそこは…。あと、スバルが体力バカなのを知ってるから、色々やらされたわけよ」
「…ホント、遠慮ってモノを知らないんだから、あの子達…」
「それに付き合うアンタもアンタだけどね」
「えへへ～」
「…まぁ、久しぶりだったこともあるだろうから、仕方ないんじゃない？」
アルトの微妙なフォローが、さらに笑いを誘った。
「さて、そろそろ撤収かな？」
「おいしい物を頂いたお礼として、頑張って片付けようか」
「了解！」
ティアナの指示の元、撤収作業が始まった。
「きっちり片付けて、ぐっすり休んで、また早朝から演習だからね」
「折角忘れてたのに～」
スバルの嘆きに、周りは大爆笑していた。

鍋を囲んで（後書き）

明けましておめでとうございます
ようやく、今年1発目が完成しましたw

予定を変更して、鍋ポーリー風景です＜何
こんな側面も書いた方が良いのかな～と思い書いてみました
何か当初の予定と違ってきてしまいましたが…
芋煮会スケールの鍋ってwww

次回から、またなのは側に場面が変わります
時季が外れてしまいましたが、イブに向けて色々書いていきます
更新遅いですが、お付き合いくださいm（__）m

会議の報告

「ただいま、義姉さん」
「お、おかえり～」
そして…。
「お邪魔しま～す」
フェイトちゃんを除くみんなでご挨拶。
「みんないらっしゃ～い。待ってたわよ～」
今晩は、フェイトちゃん家にお邪魔する日。
いそいそと靴を脱ぎ、リビングに集まる。
「義母さんは？」
「もうそろそろじゃないかな？例の会議自体は終わったって連絡は来たから」
「そうなんだ…」
「フェイト～～～っ！」
奥の部屋から、一緒に遊んでいたのか、アルフさんと二人の子供が出てきた。
「アルフ、カレル、リエラ、ただいま」
「おか～り～、ふぇいと」
「大勢で押しかけてすみません、エイミィさん」
代表して、私が挨拶する。
「いいんだよ、別に。高町家同様、ウチも受け入れ体制万全だから♪」
その台詞が頼もしい。昔よりもパワフルになりましたね。
「お母様はまだ時間かかるの？」
「ん～、そろそろらしいんだけど…」
「それじゃ、今日の戦利品を整理しちゃおう」
アリサちゃん主導で、お買い物した品物のチェック&整理が始まった。

「これとこれがヴィヴィオの服で…あれ？こんな子供服私買った？」
「あぁ、それは私のや。ヴィータ用に買うたんよ」
道理で記憶がないはず。いつの間に…。
「このミュールはアリサのだね」
「なかなか良い感じでしょ？」
「このアクセサリーは誰？」
「それは私だ。キャロに似合うかな…って」
みんなでわいわいやりながら整理が進む。
「…あ、これ。ヴィヴィオ～、こっちおいで」
子供達の輪に入っていたヴィヴィオを呼ぶ。
「なぁに？なのはママ」
「これを…付けてみて」
そう言って、可愛らしい感じのネックレスをヴィヴィオに付けてあげる。
「お？なかなか可愛らしいなぁ。似合うとるよ、ヴィヴィオ」
「うん。可愛い可愛い♪」
はやてちゃんとすずかちゃんもベタ褒め。
「あ、ありがとう…ママ」
どう致しまして。可愛くなったよ、ヴィヴィオ。
「フェイトちゃ～ん、ちょ～っと手伝ってくれるかな？」
「あ、うん、いいよ。みんなごめん、ちょっと義姉さんを手伝ってくる」
「私達も手伝おうか？」
「あぁ、なのはちゃん達はゆっくりしてて～。一応お客さんだからね」
「良いのかなぁ…」
「まぁ、先方のご厚意に甘えよか」
そんなやり取りをしてるときに、玄関が開いた。
「ただいま～。もうみなさん来てる？」
リンディ統括官がご帰宅されたようです。

「お義母さん、お帰りなさい」
その後ろに、二人の影が。
「え…、お兄ちゃん、お姉ちゃんっ！？」
な、何でこの二人がっ！？
「お邪魔しま～す」
「美由希ちゃん、恭也くん、いらっしゃい。付き添いご苦労様」
そういうことだったの。
「うむ」
「エイミィ、昨日ぶり♪」
何故かハイタッチする姉二人。
「恭也さんのおかげで、何事もなく会議に出席できましたわ」
「俺は特に何も」
表情は変わらないが、照れてるのがわかる。
「会議、どうでした？」
部隊長なんかやってるからなのか、その辺りは気になるのね、はやてちゃん。
「まぁ、その辺りは夕食後にゆっくりお話しするとして…エイミィ、頼まれていた材料買ってきたわよ」
「助かりました～。まさか切れてるとは思わなかったので…頼んでしまってすいません」
「いいのよそんなことは。準備の方はどう？」
「それを使って、もう一品作るだけです」
「じゃ、パパッとやっちゃいましょうか」
「あぁ、義母さんは会議で疲れたでしょう？休んでていいよ。私がやるから」
「そう？悪いわね、フェイト」
「ん、まかせて。遊んでばかりじゃ悪いし」
「…家庭円満やね。クロノ君が居れば完璧なんやけどな」
クロノ君も忙しい身だから。
…そういえば、演習は順調なのかな？

「なのは。今向こうの仕事のこと考えたでしょ」
うっ、そういうところは鋭いなぁ、アリサちゃん。
「気になるのは仕方ないにしても、今回ばかりは私達を気にして欲しいな」
は～い、ごめんねすずかちゃん。
「恭也さん達も夕食食べて行きますよね」
「エイミィに招待されたので…」
「そのつもりです」
「それじゃ、夕食後のお話にも付き合ってね。色々補足事項もあるでしょうし」
「元からそのつもりです」
数分後、リビングにあるコタツののテーブルに所狭しと料理が並べられた。そして、中央にはガスコンロに載った鍋が二つ鎮座していた。
「やっぱ、冬は鍋やなぁ～」
「人数多いときに便利だよね」
「あったまるよね」
「それでは、頂きましょうか」
リンディさんの音頭で、夕食が始まった。

「おこたにミカンは最強やね～」
デザート？のミカンを剥きながらはやてちゃんが呟く。
「日本の風物詩だよね～」
「私もそう思えるようになってきたよ。海鳴に移ってからは」
だいぶ海鳴に染まってきましたね、エイミィさん。
「あぁ、お茶ありがとうね、エイミィ」
そう言ってリンディさんがお茶の入った湯飲みをエイミィさんから受け取って…角砂糖とミルクを投入する。
「え…」

「お茶に…お砂糖ですか！？」
あ、二人は見るの初めてだよねぇ。私も、最初驚いたんだよ～。
「私らでいうコーヒーの感覚なのかな」
「紅茶にお砂糖入れる人もいるし、あながち間違いではない…のかなぁ」
どうなんだろうねぇ…。
「ヴィヴィオ達、寝かせてきたよ～」
フェイトちゃんが戻ってきた。
「お疲れ様～、ありがとうね」
「アルフが手伝ってくれたから…」
「子供の面倒は任せて！」
「大助かりです、アルフ様」
冗談めかしてエイミィさんがアルフさんに頭を下げる。
「うむ、苦しゅうない」
みんなで爆笑する。
「しぃ～～～～っ！子供が起きてまうよ」
…貴方が一番笑ってた気がしますよ？部隊長。
「…では、本題に入りましょうか」
リンディさんのその一言で、皆真剣モードに入る。
「本日、恭也さんのサポートもあって、イブに行われるクリステラソングスクールコンサートの警備会議に出席させてもらいました。私達は警備会社『アースラ警備』として広域探索を主に担当します」
昨日の話がそのまま通った感じかな。
「恭也さん達は、我が会社と契約したボディガードとして、フィアッセさんを護衛します」
「そういう設定にしないと、リンディさん達が怪しまれるからな」
「私達からお願いした優秀な警備会社…という設定なの」
お兄ちゃん達からの補足説明。
「まず、関係者全員にセンサー付きの腕章を配布し装着してもらいます。この人達は、モニタリングしたときに青く表示されます」

「全員って、かなりの量ですよ？今から用意して間に合いますか？」
はやてちゃんが質問をぶつける。
「もう既に人数＋αの量をミッドに発注してあるわ。明日の臨時便でこちらに届くはず」
もう手が打ってあるんですねぇ。
「そして入場者…お客様には、お楽しみカードと称したカードをお渡しする予定になっています。そのカードに、センサーを組み込んでありますの。この人達は緑色でモニタリング出来ます」
「お楽しみカード…とは？」
「コンサート終了後に、プレミアムな賞品が当たる抽選会を行う…という計画があるそうなので、その抽選会に参加出来るカードをこちらで用意させてもらった…ということです」
「でも…観覧する人数多すぎですよね。チェックしきれるんですか？」
「異常行動をしている…と思わしきときに反応するよう設定してあります」
「抽選会はいいや…って、カードを捨てる人もいますよね？」
「半券とカードを持ってないとホール内に入れない仕組みにしてあるので、持ってない人には声をかけて再度持たせるように、警備員達を通じて指示します」
「なるほど。結構厳重にしてますね」
ようやく納得した感じですね、アリサちゃん。
「あと、なのはちゃん達はリンカーコアでモニタリングするから。美由希ちゃん達民間協力者の皆さんには、独自のセンサーを身につけてもらいます」
「そうなんだ…」
「そのセンサーで守ってもらえるんですよね？」
「えぇ、何かあったときには通信機にもなるから、遠慮なく使ってね」
大丈夫よ、すずかちゃん。私達も傍にいるから。

「頼りにしてるわよ、なのは」
ど～んと任せちゃって、アリサちゃん
「私らもいるんやけどなぁ…」
「アリサはなのは一筋だから」
「ふ、フェイト！いいいいい加減なこと言わないで！」
「もうバレバレだよ？アリサちゃん」
「すずか～～～～っ！」
私に一筋って…どういう事なのかな？
「以上、私達は会場及び周辺を監視して、異常を発見したら現場に知らせる…という部分までを基本業務とし、場合によってはなのはさん達を現場に向かわせる…というのが基本線です」
「恭也君と美由希ちゃんは、フィアッセさんはじめ出演者の警護ね。楽屋周辺に居ることが多くなるかな？」
「そんな感じだね」
「実際の現場警備は、地元警察・警備会社が行います。そして、応援部隊としてＩＲＴＳが加わることになりました」
「ＩＲＴＳ？どこの組織ですか」
その手の話は気になるのか、お兄ちゃんがリンディさんに質問していた。
「国際救助隊特殊分室《Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ　Ｒｅｓｃｕｅ　Ｔｅａｍ　Ｓｐｅｃｉａｌ　ｂｒａｎｃｈ　ｏｆｆｉｃｅ》と言うのらしいけど、そこにいる隊員の一人が、ＳＥＥＮＡさんと繋がりがあるらしくて応援させてほしい、と要請があったらしいの」
何か凄い繋がりですねぇ。
「もしかして…」
「エヴァン・ノアさんのチームか」
「誰ですか？それ」
すずかちゃんが質問してきた。
「なのはは、アイリーンさんを知ってるよね？」
あぁ、フィアッセさんとよく家に来てたアメリカの人だよね。

「そう。そのお祖母さんがエヴァンさんだ」
へぇ～。
「その人が、フィアッセの母親であるティオレさんの恩人なんだ」
そんな繋がりがあったんだね～。
「でも、代表者はチカ・ニムラ…となってるわ」
「日本人なの？」
「会ってみないことにはわからないわ。取りあえず、今回の役割は以上です。昨日も言ったけど、なのはさん達は指示があるまでコンサートを楽しんでね」
「了解です」
「でも、情報はある程度流してくださいね」
「まかせて！」
「あとは…広域探索の人員の到着を待つばかりね。そこでもう一度監視側でミーティングね」
「荷物と一緒に渡航してくるとの連絡が、さっきありましたよ」
「う～ん、さすがはレティね。仕事が早い」
というわけで、警備に関するお話はこれで終わり。
何事も起こらなければいいんだけど…。
「じゃ、堅いお話は終わり。では、みんなでお風呂行こう！」
「この人数でお風呂…ということは、銭湯ですか？」
「銭湯といえば…あそこよね♪」
「あそこ…ですよね♪」
な、なにやらお姉様二人が悪巧みをしてるように見えるんですが！？

会議の報告（後書き）

１５話目、うｐしました～
そんなに書いてたんだ…＜何

なのは側に移ってきまして、ハラオウン家での夜です
何か、説明的な台詞ばっかになってしまったｏｒｚ
さて、イブの夜はどうなる事やらｗ

名前だけですが、とらハキャラが出てきました
チカ・ニムラ…仁村知佳です　とらハ２最強妹キャラｗ
このあと、どう絡めようかなぁ～（ぇ

なのは＆とらハ融合のお話ですが、基本的に
とらハＳＳＸ関連はノータッチです　ＣＤ持ってないので（お
これ以上広げると、作者が混乱します＜マテ

なお、銭湯へ行くシーンで終わってますが
銭湯体制ほかのシーンはありませんのであしからず（ぇ～

月刊ペースになってますが、お付き合いくださいｍ（＿＿）ｍ

寝間着宴会

「ここの部屋で…いいかな？」
「うん。いいんじゃないかな？」
「なかなか良い部屋じゃない？フェイト」
「うんうん」
夜もそこそこな時間、なのは達はフェイト家のある一室に集まっていた。
少し前に、お風呂の話で銭湯へ行こうという話が持ち上がったが、子供を置いて行くのはどうかという懸念材料が浮上してきたので、お流れとなってしまった。
家風呂でさっぱりとした五人は、自然とどこかに集まろうという話になり、フェイトがとある一室を用意した、という次第だ。
「今夜は寝かさへんで～」
「どこの修学旅行よっ！」
はやてのボケにアリサのツッコミ…この形も定番になりつつある。
「まぁ、昨夜はあんまりお話も出来なかったし、今夜くらいは…ねぇ？」
昨夜の集まりを中断させた本人であるすずかが、申し訳なさそうに進言する。
「明日以降は何かそんな雰囲気にならないかもだしね」
イブのコンサートが気になるのか、フェイトの表情が曇る。
「でも、いざ話すとなると…話したいことといっぱいあったはずなのに」
「世間話でそんな構えんでもええやん」
「はやてちゃんの言うとおりだよ。私達、親友でしょ？」
親友…その単語に、みんなが頷いた。
それがきっかけになり、久しぶりの再会に話の花が咲いた。

「ところで…いまいちよくわかってないんだけど、あんた達の仕事って一体何をやってるの？」
そんな質問が、唐突にアリサからぶつけられた。
「一言では説明が難しいね…」
フェイトが苦悩の表情を浮かべる。地球上には存在しない仕事をやっているのは確かである。
「何て言えばいいのかなぁ…」
なのはも同じように考え込んでしまった。
「言うなれば、警察と消防と自衛隊が一つになったところで働いてる、ってな感じやね」
「…うん、イメージはそんな感じかな？」
はやての的を射た？回答にフェイトが頷いた。
「やっぱり、命の現場ってな感じなの？」
すずかが心配そうな表情で聞いてくる。
「最前線はそんな感じかな？でも、いつもって訳じゃないしね」
「最近は前線に出ることも少なくなったしな」
「前線に行くのはフェイトちゃんが一番多いかな？」
「そうだね。捜査関係で色んな所に行くし」
「私の役割は、自衛隊の指揮官クラスかもな。で、なのはちゃんが先生やね」
「実際教える立場だしね」
「教えるって…何を？」
「魔法の正しい使い方とか、戦術とか…かな？」
「な～んか想像出来ないわねぇ」
「それで、春に会った子達が生徒って言うわけなのね」
すずかは、ようやく納得がいったようだ。
「後は…たまに、災害救助の応援を頼まれることもあるよ」
一般人の想像を絶する三人の話に、親友二人は唖然としていた。
「…聞いてはいたけど、かなりハードな仕事よね」
「本当に。辛くない？」

「まぁ、十年もやってれば慣れちゃったよね？」
「せやなぁ。小四の頃からずっとやもんな」
「うん」
二人の心配をよそに、あっけらかんと答える三人。
「でも、今いる場所が私達の夢の場所なわけだし」
「…私は罪滅ぼしで働いてるんやけどね」
「それは言わない約束だよ、はやて」
「あ、つい…堪忍なぁ」
はやての発言を諌めるフェイト。やはり、十年前の事件を心のどこかでまだ引きずっているのかもしれない。
「まぁ、あんた達が納得して働いてるんなら、何も言わないけど」
「普段会えないから、心配はするよ」
「その辺は、お父さん達からも言われました…」
思い当たる節があったのか、軽く落ち込むなのは。
「実際、忙しくて帰省どころやなかったもんなぁ」
「ごめんね、アリサ、すずか」
「そこは謝るところじゃないでしょ！そういう仕事をしてるんだから、仕方がない部分があるのはわかってるわよ」
「今回こうやって会えたんだから、いいんじゃない？」
親友二人の優しさに、三人は密かに感動する。
「そういうアリサちゃん達は最近どうなの？」
「確か…大学生やったよね」
「私は、パパの会社を継ぐ為に色んな事を勉強中」
「わたしは、機械工学と電子工学を勉強してるの」
「大変なんだ」
素で感心するフェイト。
「遊んでる暇はないわよ。合間に社交界にも顔を出さないとだし」
「本当は、今頃ニューヨークに行ってないといけなかったんだよね、アリサちゃん」
「え、そうやったん。そんなこと言うてたな、前に」

「向こうのパパの会社から、すずかと二人でパーティーに招待されてたんだけどね」
「あの時のやり取りがね…くすっ」
状況を思い出したのか、すずかが一人思い出し笑いを始めた。
「何があったの？」
「なのはちゃん達が来ることが決まって、わたしの家に来てたアリサちゃんに教えたのね。そしたら、すぐに招待元に断りの電話をいれたの。先方は快くＯＫしてくれたんだけど、その後すぐにおじさんから電話が来て大喧嘩に…」
「うわぁ～」
状況が想像出来たのか、何とも言えない表情になるなのは。
「私も間に入って、何とか収まったんだけど。最後の方は、おじさんがいじけちゃってね」
「パパもひどいのよ。何で相談しなかったんだ、自分の顔をつぶす気か、って。あたしは、招待されてる本人が断って何が悪いのよ！って怒ったのよ。もう大学生なのよ？自分のことは自分で決めるわよ！よっぽど先方のほうが話がわかるわ。本当に大事な友人ならば、そちらを優先してかまわないって言ってくれたしね」
ここぞとばかりに、いきさつを激白するアリサ。
「アリサの気持ちもわかるけど…」
「経営者であるおじさんが、全く噛んでないとは思えへんし、筋を通せってことやないかな？」
「理不尽かもしれないけど、組織ってそういう側面もあるからね。あと、親の立場としても相談して欲しかったんじゃないかな」
「私達の部署はわりと寛容だけど、うるさい部署もあるからね」
「会社ってめんどくさいのね…」
一足先に社会に出ている三人の意見に、アリサはあきれ顔で悪態をつく。
「ま、おいおい分かってくるよ、色々と社会の波に揉まれるとな」
「何か大人だぁ、三人とも」

「色々ありましたからねぇ…」
「特に、ここ最近は大変やったからなぁ」
「向こうの世界の危機だったからね」
ちょっと前まで関わっていた事件を思い出し、溜息をつく三人。
「い、一体何があったの？」
聞く体制満々のアリサに苦笑しながら、ＪＳ事件のあらましをはやてが語っていった。

「……」
「お～い、聞いてるかい？お二人さん」
心配になったはやてが、二人の顔を覗き込む。あまりの内容に声を失ってしまったようだ。
「内容がハードすぎたかな？」
「こっちじゃ映画の世界のような話だからね」
「映像なんか見せたら、卒倒しちゃうかもね」
そんなシーンを想像していたのか、なのはが苦笑していた。
「あんた達…そんな淡々と話せるような内容なのっ！？」
「本当に絵空事じゃないんだよね？」
「残念ながら、事実です」
「…あ、あんまり心配かけさせないでよね、特になのは」
「肝に銘じておきます…」
「そうだよなのは。私も心配なんだから」
「それは、フェイトちゃんにも言えるで」
「あぅ…」
「くすっ」

その後も色んな話が飛び交い、はやてがちらっと時計を見たときは、もうすぐ日付が変わろうとしていた。
「うわ、もうこないな時間なん？」
「結構話し込んだね」

「まだ話し足りないんだけどぉ？」
直接の会話自体が久しぶりなせいか、不機嫌モードになったアリサをすずかが窘める。
「無茶言わないの、アリサちゃん。明日私の家でまた話せばいいじゃない」
「え…明日はあたしん家じゃないの？」
「アリサは勘違いしてるよ。明日はすずかの家の番」
「そうそう。忍さんが首を長くして待ってるみたいだからね」
「そ、そうだったかしら…。どこで勘違いしたんだろう」
珍しい自分の勘違いに、首をかしげるアリサ。
「でも、料理大会やるんは変わらんのやろ？」
「それは当然でしょ？やると決めたらやるんだから」
「アリサが息巻いてる…」
「やる気満々だね」
「材料とかはどうする？一応ノエルに一通りは揃えてもらってあるんだけど…」
すずかの手回しの良さにみんなが感心する。
「せやなぁ、一度月村邸へお邪魔して、用意してある材料見てから考えよか」
「場合によっては、材料が足りないかもだしね」
「作る物にもよるわね」
「その辺は臨機応変で」
「うん」
「さて、そろそろ寝ましょうかね。明日のこともあるし」
最初は駄々をこねたアリサだったが、気持ちを切り替えてみんなをまとめる辺りはさすがである。
「そうだね」
「今日はこの部屋でみんなで寝るの？」
ふと思ったのか、すずかがフェイトに聞いていた。
「一応充分な広さがある部屋を用意したつもりだけど」

「うん、大丈夫だね」
「それじゃ、寝ましょ…」
「あいや待たれよ、お嬢様方」
アリサの寝ましょう宣言を、突如はやてが遮った。
「はやてちゃん、どうしたの？」
「最初に言うたはずやで、今夜は寝かさへんと」
「はぁ！？」
「冗談じゃなかったの？」
「冗談？何言うてるん。夜はこれからやで」
「あんた自分で『こんな時間だ』って言ってたじゃない！」
「言うたよ。予想以上に時間が過ぎてたなぁ、という意味でな。今から第二部の始まりやねん」
「…第二部？」
はやて以外の全員が、目がテン状態に陥る。
「そ。今からの時間、みんなに芸を披露してもらうんや」
「何でそんなことしなければいけないのよ！」
「宴会に芸はつきものやん。宴会芸がなければ、私は納得せぇへんで～」
「は、はやてが…」
「おかしくなっちゃった！？」
「失礼な！私はどこもおかしくなんかあらへん」
「その発想自体がダメだって言ってるのよっ！！」
スパーーーーーーン！
ハラオウン家に、ハリセンの音が響き渡った夜であった。

寝間着宴会（後書き）

タイトルにツッコミは不許可で（おいわゆるパジャマパーティーですw

大変お待たせいたしましたm（__）m
年度末で忙しかったせいもあって、なかなか書く時間が…
ところが、先般の地震のおかげで最近になって時間が出来て
勢いで書き上げてることもあって、変な感じになってるかも^^；

ハラオウン家での夜ということですが、ネタ出しに苦労しました><
パジャマパーティーにしようと思いついたのが、４日前のこと（ぇ
それまでちまちま書いていたのを全て消して書き直し><
内容については……パーティーっぽくねぇな、全然；；
最後のはやてに関しては、とある同人誌の影響ですw

次回は、すずかの家で料理大会〜^^
何気にノエルが初参戦です　ファリンも出る予定？
ちなみにノエルはとらハ３のイメージで行く予定です
仕事次第ですが、なるべく早く書けるよう努力いたします
次回もネタ出しに苦労しそう…ｏｒｚ

月村邸にて

「おじゃまし ま〜す！」
ハラオウン家での朝食後、少し早めに月村邸へ移動。訪れたみんなでご挨拶。
「ようこそいらっしゃいました。この館でメイドを務めるノエル・K・エーアリヒカイトと…」
「ファリン・K・エーアリヒカイトです！」
「名前が長いので、ノエルとファリンって呼んであげて」
総勢三名様でお出迎えを受けました。
「お姉ちゃん、ただいま」
「おかえり、すずか。楽しくやってる？」
「うん」
「忍さん家に来るのも久しぶりですね〜」
「なのはちゃんと知り合った頃は、恭也と一緒によく来てたもんね〜。ゲーム対戦は熱く盛り上がったし」
そうでしたね〜。二人して理数系は得意でしたから。
「そういえば、お兄ちゃん来てます？」
「ううん。今朝早くから、例のコンサートの警備に行ってるよ」
「確か、最終リハーサルが今日って言うてたな」
「テロは、いつ何時に狙われるか分からないからね」
その辺りは、レリック事件で痛いほど教わりましたとも。
「おはようございます。きょうはおせわになります」
あ、ヴィヴィオが率先してご挨拶してる。昨日、こうやるんだよって教えた甲斐があった。
「お、ヴィヴィオ偉いね〜。さすが、なのはちゃんの子供だね」
「えへへ…」
忍さんに頭を撫でてもらってご満悦のようですね。
「ところで…料理大会やるんだっけ？」

「はい。あたしの思いつきなんですけどね」
アリサちゃんが、事の経緯を忍さんに話す。
「そっかぁ。それで、昨日のノエル達の買い物の量が半端じゃなかったわけだ」
「すずかお嬢様からお話を伺っておりましたので」
「一応、それなりの量を取り揃えてありますよ～」
ファリンさんが胸を張って答える。どれだけの量を買ったのだろう…。
「じゃノエル、キッチンへ案内してあげて。あ、すずか。ちょっと私の部屋まで来てくれる？」
「あ、うん。じゃ、後はお願いね」
「かしこまりました。ではこちらへ」
「皆様をご案内しま～す」
すずかちゃんが別行動で離れ、メイドさん達に先導されてキッチンへと移動した。
「こちらが我が家のキッチンです」
そう言われて案内されたキッチンだけど…。
「広～いっ！」
「どこかのホテルの厨房みたい…」
執務官と二人で驚きの声を上げてしまった。
「あれ、なのはってすずかん家のキッチンって入った事なかった？」
「うん。遊びには来てたけど、入った事はなかったよ」
「私も」
「そっかぁ。あたしは何度かお邪魔させてもらってるけど…何度みても無駄に広いわよね～」
へぇ～っ、アリサちゃんってすずかちゃん家は何度も来てるみたいだしね。
「昔はそれなりの人数が生活していたと、忍お嬢様から伝え聞いております」
「それに合わせて、使用人もそれなりにいたらしいですよ？」

その名残らしいけど…。月村家もそれなりの良家だもんねぇ。
「うはぁ～っ、ごっついキッチンやな～。これは、料理魂を揺さぶられるわ」
「おっきいですぅ…」
部隊長と娘も、感嘆の声を上げていた。
「ちなみに、材料はこちらへ保管してあります」
そう言って、ノエルさんは材料が入っている冷蔵庫を開けてくれた。
「冷凍が必要な物は、こちらのストッカーに入ってますよ～」
「あと、乾物その他はこちらの棚に」
「調味料関係はこちらに揃えてあります～」
ノエルさんとファリンさんが、キッチンの一通りを案内してくれた。予想以上に材料が揃ってるね。
「あ、色々説明してくれたんだね。ありがとう、ノエル、ファリン」
その頃には、すずかちゃんも合流。
「材料とかはどう？足りない物はあるかな」
「取りあえずは大丈夫かな。どう？フェイトちゃん」
「…うん。大丈夫かな」
「う～ん、七面鳥がないなぁ…。北京ダックも」
…何を作る気ですか、はやてちゃんは。
「何って…満漢全席？」
どこの宮廷ですかっ！？
「まぁ、それは冗談として…。これだけ食材があれば、何でも作れるなぁ」
「ホント。何を作ろうかなぁ…」
これだけあると、逆に悩むわねぇ。
「どうしようかなぁ～。フェイトちゃん、何かアイデアある？」
「うん、サラダと洋食系で考えてる。その方が、ヴィヴィオも手伝いし易そうだし」
そんなところまで考えてるんだ。

「それなら、私達は和食系で作ってみようか、アリサちゃん」
「オ～ケ～。何でもござれ！」
気合い入りまくりだねぇ、アリサちゃん。
「ほんなら、わたしは残った中華系やな。八神家特製の味というものをお披露目したる～」
こちらも、気合い入ってますね～。でも、はやてちゃんだけ一人になってしまうよね。
「ノエル、ファリン。はやてちゃんのお手伝いをしてあげて」
「かしこまりました」
「全力でサポートします～」
「はは…まぁ、お手柔らかにな」
では、準備は整ったようね。
「調理開始や！」
「あ～っ、あたしが言おうとしたのにぃ～っ！」

さてと、まずはサラダ作りかな？
「さて、ヴィヴィオさん」
「はいっ」
「まずは、この野菜達をお水で軽く洗います」
コクッ。
「私が手本を見せるから、同じようにやってね？」
「うん」
トマトやキュウリ等を、軽く水洗い。手本を見せてヴィヴィオにやらせてみる。
「んしょ、んしょ」
「うんうん、その調子」
「えへへ」
おぼつかない手つきながらも、一生懸命に野菜を洗っている。
「それじゃ、私はハンバーグの下ごしらえかな」

そう言って、フェイトちゃんがタマネギを手に取り、下ごしらえを始めた。
「はんばーぐつくるですか？」
「洋食の定番だからね。ヴィヴィオも好きでしょ？」
「大好きです」
何だかんだ言っても、やっぱり子供だね。
トントントン…。
タマネギをみじん切りにする包丁の音が、心地よく耳に響く。
「…あれ？フェイトママ、泣いてるの？」
よく見ると、フェイトちゃんの目にうっすら涙が…。よく見てるね、ヴィヴィオ。
「泣いてる訳じゃないんだけどね。タマネギを切ると、どうしてもこうなっちゃうんだ」
「ふ～ん…」
「ちょっと顔を近づけてみて？」
言われるまま、刻んでるときに顔を近づけると…、
「！」
娘が涙目になって帰ってきた。
「ママ～」
「あ～、よしよし」
「…ちょっと刺激が強すぎたかな」
ヴィヴィオ位じゃ、まだきついかもね。
「確か、刺激成分が鼻に入ると涙が出るから、鼻をつまむと大丈夫らしいよ」
「えっ、そうなの？」
うん、何かそんな実験をＴＶでみた記憶があるよ。
「ふ～ん、試してみよう」
そう言ったフェイトちゃんは、クリップを取り出し（どこにあったの？）鼻につけてタマネギを刻み始めた。
「…本当だ。さっきより辛くない」

執務官が効果を体感しています。でも、何かお間抜けなシチュエーションだね。
「フェイトママ…おかしい♪」
「だよね～」
娘と二人で笑いをこらえるのに必死だよ。
「もう、なのはもヴィヴィオも…わかってて笑ってるでしょう」
「だぁって～」
「かっこいいフェイトママが…ぷぷ」
「もう～～」
「何々どうしたの…って、ぶふ、フェイト何やってるの」
「フェイトちゃん、どうしちゃったの～」
「お、何や執務官殿も芸人魂に火がついたんか？」
騒ぎを聞きつけて、他のメンバーも集まって来ちゃった。
「もう～、みんな笑わないで～っ！」

では、ヴィヴィオのチャレンジタイム開始。
「ヴィヴィオ～、ポテトサラダ作るから皮むきに挑戦してみようか」
「皮むき…ですか？」
「なのはっ、ヴィヴィオには包丁はまだ早いよ？」
確かにそうなんだけどね。
「世の中には便利アイテムというものがあってですね」
私はそう言うと、そばにあった物を手にして見せた。
「…ピーラー？」
「そ。本当は包丁で基本を覚えるのが良いけど、手が小さいし危ないからこっちでやってもらおうかと」
まずは、料理は楽しいってことを覚えてもらいたいしね。怪我をしてトラウマになったら、それこそ大変だし。
「ママ。何ですか？それ」
「ん？これはピーラーと言って、簡単かつ安全に皮がむける道具な

んだよ」
「へ〜」
「ちょっと実演してみるね」
そう言って、私は手頃なジャガイモを手に取り、ピーラーをあてがってすぅ〜っと引いてみる。引いた分だけ皮がピラッと剥けた。
「おぉ〜っ！」
感嘆の声を上げる我が娘。
「やってみる？」
「うんっ！」
元気の良い返事とは裏腹に、恐る恐るジャガイモにピーラーを当てるヴィヴィオ。その娘の手に、上から私が手を添えて下に軽く引く。徐々に皮がめくれていく。
「ぅわぁ〜」
「ね、簡単でしょ？」
「ホントだぁ〜」
「これをヴィヴィオさんにやってもらいます。ゆっくりで良いから気をつけて剥いてね。あんまり力が入ると厚く剥けちゃうから注意してね」
「わかりました」
そう言うと、続きを剥き始めた。一人で全部は無理なので、私も包丁で手伝う。
「うわ〜、ママは包丁ですか…」
「私は慣れてるしね。ヴィヴィオも、もうちょっと大きくなったら挑戦しようか」
「は〜い」
「フェイトちゃん、そっちはどう？」
向こうの進行状況が気になって、私は聞いてみた。
「んしょっと。タネは出来たよ」
先ほどフライパンを使ってタマネギを炒めてたかと思ったら、もう既にそこまで進んでいたのね。

「ちょっと冷蔵庫で寝かせて…その間に付け合わせを用意するね」
「もう一品何か用意する？」
何かが足りない…そんな気がするのは気のせいなのかな？
「パスタ系で何か作ろうか？あと、ガーリックトーストを用意するつもりだったけど」
「そうね…カルボナーラでも作る？」
「ペペロンチーノも捨てがたいけど…」
う～ん、悩みどころねぇ…あ、そうだ！
「いっそのこと二つ作る？」
「ん、いいかも。それで行こう」
「ママ～、むき終わったよ」
うんうん、上出来です。
「そしたら茹でるから、その間に人参も皮むきしてくれるかな？」
「わかりました！」
そう言って、ヴィヴィオは人参を手に取り、皮むき再開。要領はわかってきたみたいね。
「フェイトちゃん、卵ちょうだい」
「取りあえずパックごと渡すから、余ったら返して」
「了解～」
時間短縮の為、ホイルに包んでジャガイモと一緒に茹でちゃおう。その間に、ハムやキュウリを切って…。
「人参出来ました」
「それじゃ貸して」
ヴィヴィオから受け取った人参を半月切りにして、茹で鍋に一緒に入れる。茹で上がったらジャガイモを残して取り出し、残したジャガイモの水分を飛ばして取り出す。
「さて、ちょっと力仕事ですよ、ヴィヴィオさん」
「ん？」
「茹で上がったジャガイモをマッシャーで潰してもらいます。こういう風にね」

実演付きで次のお手伝いを娘に指示する。
「壊すのは得意です！」
「壊すんじゃなくて、潰すんだけどなぁ…」
娘の変な表現に苦笑する。その横で、私は卵の殻剥きをして次の準備。
「ここから一気に行くよ～」
潰してるジャガイモのボウルに、卵を混ぜてさらに潰し、わけてもらってあったタマネギの残りをみじん切りにして混ぜ合わせる。下味をつけながら人参とキュウリも追加して、味を調えながらさらに混ぜ込む。そしてお皿に盛りつけ、付け合わせのレタスやハムなどを飾り付けて…完成！
「出来たよ～」
「わぁ～っ、出来た出来た～」
「こっちも…もうすぐ出来るよ～」
フェイトちゃんの方を見ると…え、フライパンが二つ？
「カルボとペペロンが同時進行！？」
「パスタ茹でるときに下準備しておけばどうって事ないよ」
「て、テクニシャンですね…」
「フェイトママ、すごーいっ！」
私もそこまでは出来ないよ。
「よし、出来た」
そう言って皿に盛る執務官。手際が良い。
「後は…こっちのハンバーグをっと」
え、ハンバーグもいつの間にか焼いてたの？
「ここのキッチンだから出来たんだ。普段は無理」
さて、こちらは完成しました。
他の方はどうだろう？
「出来たよ～」
「完成や」
出来たようだね。

では、お披露目といきましょうか。

「あたし達はこれよ！」
すずかちゃんとアリサちゃんが作った和風料理。
ほうれん草のおひたし、肉じゃが、カレイの煮付け、お味噌汁、茶碗蒸し…などなど。
「結構作ったのね」
「二人だから何でも出来たよ～」
「すずかがあれもこれもって言うから、つい…」
それは良いとして…問題はこっちか。
「はやてちゃん。それって…」
「ん？中華プチフルコースや」
青椒牛肉絲、麻婆豆腐、水餃子、小籠包、酢豚…一品一品は小さいけど、数が尋常じゃない。
「気ぃついたらこんなんなってたわ」
「一体何品あるのよ…」
アリサちゃんが呆れてる。
「手伝いがおったからな。それに、材料余らせるんももったいないやん」
「でも、作りすぎだと思うよ、はやて」
「そうかぁ？大丈夫やと思うけど」
「六人では食べきれないよ？おそらく」
すずかちゃんがもっともな意見を言う。私とフェイトちゃんがそれなりに食べられるとしても、この量は…。
「大丈夫。そろそろやな…」
「？」
はやてちゃんの発言に疑問を抱いたとき、月村家の呼び鈴が不意に鳴った。
「お客様のようです。見て参ります」

ノエルさんが即座に反応して玄関に向かった。
「はて？こんな時間に来客予定ありましたっけ…」
ファリンさんが首をかしげる。程なくして、その疑問が解ける事になる。
「みんな～頑張ってる？」
「こんにちわ～、料理大会だって？」
現れたのは、エイミィさんと…お母さんっ！？
「おろ？呼んだんはエイミィさんだけな筈やけど」
「うん。ここへ来る前に手土産を…って事で翠屋さんに寄ったら、桃子さんがお昼休憩に入るところだったので私が誘いました」
「話を聞いたら、料理大会なんて面白そうな事をやってるって言うから、松ちゃんにお昼任せて来ちゃいました」
「義姉さん、来るなんて一言も…」
「はやてちゃんに内緒で、って言われてたしね。ごめんね」
そう言うエイミィさんの足元には、二人の子供の姿もあった。
「こんにちわ～」
「カレルとリエラも来たんだ…あれ、アルフは？」
「アルフは警備（むこう）の応援に行ったよ」
「母さんもうお腹ぺこぺこ～。なのはの手料理が早く食べたい～」
駄々っ子なお母さんを見るのも久しぶりだな～。
「それでは皆さん、こちらへ」
「リビングにご案内しま～す」
ノエルさんがお母さん達を先導する。それに続いて、私達も料理を持ってキッチンとリビングを行ったり来たり。数が多いので大変だ～。

「それでは皆さん…」
『いただきま～すっ！』
すずかちゃんが音頭を取って、ランチの開始です。

「しっかし、凄い量だね～」
エイミィさんが、テーブルを見渡して改めて驚いていた。
「主にはやての策略だよね」
「人聞きの悪い事言わんといて。完璧に計算し尽くされた量や」
「あたし達以外が来るなんて知らなかったし」
「それはまぁ、イベントにはサプライズは必要やしな」
こんなところで、はやてちゃんの悪巧みが炸裂するとは夢にも思わなかったよ。
「豪勢なお昼になりましたね～、店長」
「私はなのはの手料理が食べられたら、それで満足なんだけどな」
忍さんとお母さんが話をしている。こんな事なら、もう一品独自に作っておくんだった。ヴィヴィオと一緒に料理してたから、サラダ以外作ってないよ～。
「ほら、あ～ん」
「あ～ん…」
エイミィさんは、子供達に色んな料理を食べさせている。気にいってくれると嬉しいな。
「ところで、なのはは何を作ったの？」
「ええっと、ヴィヴィオとサラダを…」
そう言って、私の目の前にあったポテトサラダと野菜の盛り合わせを指さした。フェイトちゃんからパスタをわけてもらって、サラスパも取り急ぎ追加してある。
「親子の合作なのね。どれどれ…」
早速、お母さんが手を出して食する。
「……。うん、おいしく出来てるじゃない」
ほっ、よかった～。
「中学上がるくらいからよく手伝ってくれてたけど、その頃よりもだいぶ腕を上げたわね。お母さん嬉しいわ～」
ここまで褒められると、こそばゆいね。
「和洋中取り揃えてますから、いっぱい食べていってくださいね」

すずかちゃんの発言で、ようやく私達も箸を手に取り食事開始です。
「なのはママ。ヴィヴィオ、ちゃんと出来ました？」
不安げな表情で聞いてくる、我が娘。
「大丈夫だよ。お母さんがおいしいって言ってくれたから」
「なのはママはおいしいですか？」
あぁ、私がちゃんと言わないと安心できないんだ。
「うん、おいしいよ。良くできました」
「…うん」
やっと安堵の表情を浮かべた。本人なりに、色々考えるところがあったんだね。
「ヴィヴィオ。フェイトママの方も食べてくれると嬉しいな」
そう言って、フェイトちゃんは取り皿に自分が作った物を乗せて、ヴィヴィオに差し出した。
「はいっ、いただきます」
それを見ていたアリサちゃんが、同じように取り皿に料理を載せて差し出した。
「あたし達のも食べて欲しいな。せっかく色々作ったんだし」
「そうね。ヴィヴィオちゃんの感想が聞きたいな」
「そんなら、わたしも自慢の一品を持ってこんと」
「そ、そんなに食べられないです～」
色んな料理が目の前に置かれ、助けを求める娘。
「取りあえず、一口ずつ食べてもらえればいいわよ。あとは、ママ達に食べてもらうから」
えっ？
「あ、アリサ？」
「娘の尻ぬぐいは、親がするのは当然よね～」
アリサちゃんが黒いよ～。
「なんや面白い展開やな」
「アリサちゃんらしいというか…」

これは、新しいイジメですかっ！？

『ごちそうさまでした！』

無事、ランチ終了。

食べきれるか不安な量があった料理は、綺麗さっぱり無くなっていた。

今は、エイミィさんが持ってきてくれた翠屋のケーキでデザートタイム。約一名は、お店からの緊急呼び出しで慌てて月村邸を後にしていた。

食事のお礼にという事で、忍さん達はメイドさんを巻き込んで後片付けを始めたので、私達五人はすずかちゃんのお部屋に移動。

子供達は、隣の部屋で三人仲良くお昼寝タイム。

「無事に終わったね～」

「一時はどうなるかと思ったけど…」

「だから、計算通りやって言うてるやん」

「はやてのそれは怪しいわね」

「くすくす」

「アリサちゃん…ありがとう」

私は、親友にお礼を言う。

「な、何よ急に改まっちゃって…」

「娘と何かをするって機会を作ってくれた事に、感謝してるんだ」

「そうだね。私達は忙しさにかまけて、ヴィヴィオと一緒に居られる時間が少なかったから…」

「帰省を機会に、ヴィヴィオともっと仲良くなりたくて海鳴に連れてきて…買い物したり、料理をしたり…」

「こんな時間を一緒に過ごせる機会を作ってくれた親友に、心よりの感謝を…」

と、フェイトちゃんが言ったところですずかちゃんに発言を遮られた。

「そんな、改まってお礼される事はしてないよ？」
「そうよ。帰省してきたなのは達と一緒に遊ぶ。ただそれだけしかしてないわよ。お礼なんて筋違いだわ」
そ、そうなのかな？
フェイトちゃんと顔を見合わせる。
「ま、本人達がそう言うてるんやし、ええんとちゃうか？」
はやてちゃん…。
「そんなん気に病んでたら、リフレッシュ出来んよ。感謝の気持ちは大事やけどな、そこまで仰々しいことやないって言うてくれてるんよ」
「それが親友ってもんでしょうが」
「変に余所余所しいのはなしだよ？」
アリサちゃん、すずかちゃん…。
「でも、お礼だけは言わせて」
「二人とも、ありがとう」
「ま、まぁ、それくらいは…」
「アリサちゃん、照れてる～」
「すずか～っ！」
「しぃ～っ！子供達起きてまうよ」
みんなで静かに苦笑する。
「それで、この後はどうするの？」
フェイトちゃんが、この後の予定を聞いてきた。
「何かお姉ちゃんがね、後でみんなを部屋に連れてきてだって。ゲーム大会を考えてるみたいだよ？」
「さっきお姉さんに呼ばれたのって…」
「その準備を手伝わされたの」
「子供達も一緒でいいのかな？」
「うん。みんなで盛り上がろうって」
それじゃ、ヴィヴィオ達が起きたら移動開始だね。
何年ぶりだろう、こっちで…というよりゲーム自体するのは。折

角だから、思いっきり楽しませてもらおうっと。

月村邸にて（後書き）

大変長らくお待たせいたしましたm（__）m
やっと続きが書けました
変に仕事が忙しくてなかなか…いや、言い訳はいかんですね
お待ちしていた方、ごめんなさい

料理のシーンは、色んなレシピのサイトを参考にして
何とか形が出来ました　ハンバーグ一つをとっても
色んな作り方があるんですね～　作ってみたくなったw

次回は、ほぼ同じ時間軸でコンサート側を書く予定です
プロットの段階で、とらハキャラが複数登場予定^^
また時間かかるかも知れませんが、長い目で見守ってくださると
幸いです

再会と理由

「では、二時間後に最終の通しリハを行います。それまで休憩です」
舞台ディレクターの声で、ステージ近辺にいたスタッフや出演者達が一斉に動き出した。
「フィアッセ、お疲れさん」
傍で見守っていた恭也が、缶コーヒーを差し出して校長を労う。
「恭也、ありがとう」
受け取って飲み出すが、一口で返却された。仕方がないので、残りを飲み干す。
「さて、ちょっと遅くなったけどお昼にしましょう」
「どこで食事を取るんだ？」
「スタッフ専用のカフェでいいでしょう。そうそう外には出られないわけだし」
「出たら混乱が起こるな」
簡単に想像出来たのか、恭也は苦笑する。
「お、いたいた。フィアッセ～、お昼食べへん？」
そこへ、ＳＥＥＮＡこと椎名ゆうひが合流してきた。
「うん、いいよ。あぁ、アイリーンも一緒なのね」
「…っていうか、ゆうひに拉致られてきた」
「ちゃんと誘ったやん」
「返事聞く前に強引に連れ出しておいて、それを言うか」
どことなくボーイッシュなアイリーンだが、ゆうひの強引さには叶わないようだ。
「…で、おまけでお前もいるわけだ」
恭也は、もう一人いた人物に視線を向けた。
「おまけは酷いよ、恭ちゃん」
「そうやで、恭也くん。折角ボディガードしてくれてるのに…可哀想な美由希ちゃん。よよよ」

「何でそこでゆうひが泣くのかわかんね～」
「お兄ちゃんに傷つけられた妹の心を代弁してるんよ」
「まぁたゆうひがボケ始めたよ～」
「ウチはボケとらへん！」
「そのボケじゃなーいっ！」
ビシッ！
「うん！ナイスツッコミ」
「あなた達、漫才コンビで再デビューしてみる？」
ゆうひとアイリーンのやり取りに、軽く目眩を覚えたフィアッセであった。
「相変わらずというか」
「みんな面白いよね」
ボディガード二人の微妙な感想。本番前日なのに、緊張感が全く見られない。
「あぁ見えても緊張してるのよ、二人とも」
「そうなのか？」
「ゆうひもアイリーンも、普段よりテンションが高いもの。本番は明日。緊張しないはずがないわ」
「そんなものなんだ」
そう美由希が呟いたとき、前方から警察系の制服を着た少し背の低い女性がやってきた。敬礼をしてきたので、こちらも敬礼で返す…が、ゆうひの目の前で彼女は足を止めた。
「久しぶり、ゆうひちゃん。一昨年のＮＹコンサート以来かな？直接会うのは」
「…もしかして、知佳ちゃん？」
「うん！いつもＴＶで見てるよ」
「うわ～、めっちゃ久しぶりや～。元気してたか？」
唐突に盛り上がる二人。
「どちら様です？ゆうひさん」
美由希がたまらず質問した。

「あぁ、ごめんな。こちらは…」
「あ、いいよ。自分で言うから。私、国際救助隊特殊分室々長、仁村知佳といいます」
「あぁ、あなたがそうでしたか…」
自己紹介されて、恭也は納得したようだ。
「小さくてビックリしました？」
恭也が二の句を告げる前に先回りして彼女は言い放った。想像とかけ離れていたのを見透かされたようだった。
「いえ…はい」
「よく言われるんですよ～。聖祥女子時代から全く伸びてないですからね」
「あ、じゃあなのはの先輩になるんだ」
「え？」
「うちの妹も中学まで聖祥でしたから」
「そうなんですか」
「そんな室長さんが、何でゆうひと知り合いなの？」
当然出るであろう疑問が、アイリーンから出た。
「ウチと知佳ちゃんは、『さざなみ寮』で一緒やったんよ」
「あの高台にあるさざなみ寮ですよね？」
さざなみ寮。
海鳴の高台にある一風変わった寮。住人は女性しかおらず、そこから近辺の学校に通ってるのでイメージは下宿屋に近い。恭也も風芽丘在学時に後輩が住んでいたので、何度か訪れた事がある。
「そんな繋がりがあったんだ…」
「そして、寮のご飯がめっちゃおいしいんやぁ～」
そこまで言って、何故かゆうひの表情がふにゃふにゃになる。
「そうだね～。お兄ちゃんのご飯はサイコーだよね～。私も久しく食べてないなぁ」
「そ、そんなに美味しいんだ…」
アイリーンの喉が自然と鳴った。

「あの味を覚えたら、他のご飯なんて食べれへん。だから、今でも海鳴来たら必ず寮へ帰るんや」
「それで、夜になると必ずいなくなるわけだ」
今までの疑問が解けたのか、アイリーンはスッキリした顔になっていた。
「今回、こちらの我が儘で警備に参加させて貰い、感謝しております」
「いえこちらこそ、強力な援軍に来てもらって助かってますわ」
「でも、なぜNYからわざわざ？」
恭也の最大の疑問はそこだった。
会議の後でリンディから話を聞いたときから、ずっと疑問に思っていた事。何故国を超えてまで応援に来たのか。人間関係は今のやり取りで納得したが、それだけではない何かがあるのではないか？と、恭也はずっと考えていたのだ。
「理由はあるのですが…」
何か人には言えない理由でもあるのだろうか？
「美由希。みんなを連れて先に行っててくれ。俺はこの人ともう少し話してみる」
「…わかった。じゃ、カフェで待ってるよ」
「知佳ちゃん、時間あるか？お昼一緒に食べよか」
「うん、一緒に食べよう。先に行ってて」
「あい～。アイリーン、行くよ～」
「わかったから、手を引っ張らないでよ～」
「じゃ、恭也。私も先に行ってるわね」
「すまないな、フィアッセ」
「あ、フィアッセさんは残って下さい。あなたにも関係ある話ですから」
「え？」
いきなりの話に、驚くフィアッセ。
「そう…美由希。後お願いね」

「わかった。では行きましょうか」
美由希が先導して残りの二人を連れて行った。
「お手数かけてすいません」
「いえ…で、何か理由があるのですか？」
話の先を促す恭也。
「はい。同じ人種として、フィアッセさんを守らなければいけないんです、私は」
「同じ…人種？」
疑問に思うフィアッセ。
それもそのはず。フィアッセはイギリス人。知佳はどう見ても恭也と同じ日本人。人種が同じとは思えないのが、普通の反応だ。
「フィアッセさん…『ＨＧＳ』という言葉は知ってますよね」
その単語が知佳の口から飛び出した瞬間、フィアッセの体がビクッと震えた。と同時に、恭也も驚いていた。
「何故それを…」
恭也は、そう聞き返すのが精一杯だった。
「ＨＧＳ…高機能性遺伝子障害者。元々は変異性遺伝子障害病ですが、まれに超能力に目覚める患者をそう呼んでいます。フィアッセさんはＡＳ－３０と言うコードで呼ばれていたはず」
段々と、フィアッセの顔色が青ざめていく。思い出したくない過去が蘇っているのだろう。能力に関するものは、良くないものばかりだ。十年前を除いて…。
「どこまで知っているんですか…」
恭也は警戒を強めた。もしかしたら、この人も『敵』なのではないのか？
「仕事柄、その手の情報は集まってくるんですよ、必然的に。それで、今回のテロ情報も偶然私のところに入ってきまして、急遽応援を打診したんですよ」
恭也の警戒に対して、何故かあっけらかんとした態度をとり続ける知佳。警戒はしているが、敵意というものが全く感じられない。

どういうつもりなんだ？と、疑心暗鬼になる恭也。
「そんなに敵意を向けないでください。言ったでしょ？同じ人種…って。私もＨＧＳ患者なんですよ」
「…え？」
顔を見合わせる恭也とフィアッセ。
「フィアッセさんが狙われる理由も、その辺りが原因なのでしょう。私の分室は、その辺りの事件を主に扱ってますから、こうやって応援に来られたんだと思います」
「そうだったんですか」
敵ではない事がわかり、警戒を解く。だが、フィアッセの顔色がまだ戻らない。
「フィアッセ。この人は味方だ。安心するんだ」
「…そ、そうな…の？」
「はい。ＨＧＳ関連では特に力になれます」
「そうですか…」
ようやく安心したのか、顔色が戻ってきたようだ。
「ごめんなさいね。こんなに狼狽するとは予想してなかったので…」
本当に予想外だったようで、しきりに謝罪する知佳。
「でも、ＨＧＳ患者には見えませんね、正直な話」
「そうですよね。論より証拠、お見せしますか。すいません、この辺りの警報レヴェルを下げてもらえませんか？警報が鳴ってしまいそうなので」
「わかりました。…リンディさん、取れますか？」
言うやいなや、恭也は警備責任者に無線で連絡を取っていた。
『は～い、こちらアースラ警備リンディです。何か問題でも？』
「俺がいる辺りのブロックだけ、警報レヴェルを下げる事は出来ませんか？」
『う～ん、センサーのリンクの関係でそれは難しいわねぇ』
「そうですか…」
『要は、恭也さんがいる辺りだけでいいんですよね？』

「そうなりますね」
『なら、良い方法があります』
と言うやいなや、周囲五メートル位が不思議な空気に包まれた。
（これが、結界という魔法の一種か…）
これに包まれると、外との通信の類が一切出来なくなるが、周りからも知覚されないので秘密を守るには便利だな、となのは達に見せてもらった時に感じていた。
「恭也。これは…」
そうか、初めて見るんだったな、フィアッセは…と、恭也は失念していた。
「ちょっとした特殊空間を、知り合いに用意してもらったんだ。この中なら、秘密がばれる事はない」
我ながら苦しい言い訳だな、と苦笑する恭也。
「そうですか…では、失礼して」
順応性が高い人だな、と思ってた矢先、知佳の背中が光っていた。正確には、光の羽根が存在していた。
「あ、羽根…」
フィアッセは、目を見開いて状況を見つめていた。
「この羽根…リアーフィンが出るのがＨＧＳ患者の特徴なんです」
その羽根を見たとき、フィアッセの羽根を恭也は思い出していた。
「納得して頂けたでしょうか」
「フィアッセの羽根を知ってる俺としては、納得がいきました」
「それを聞いて安心しました。えいっ！」
知佳が気合いを入れると、結界がカシャーンという音と共に破壊された。
「そんな事も出来るんですか」
破壊されるとは思ってもいなかった恭也は驚いていた。
『恭也さん！？結界が破壊されたんですが、何かありましたか？』
即座にリンディから無線が入る。
「大丈夫です。何もありません」

『そうですか…。大事なお話は終わったんですか？』
「そういうことになります」
話の流れをリンディに見抜かれていたようだ。
『そちらの方とお話しできますか？』
「あぁ、はい。仁村さん、これを」
恭也は、無線機を知佳に渡す。
「あ～あ～、初めまして。国際救助隊特殊分室々長、仁村知佳と申します」
『こちらこそ初めまして。アースラ警備の責任者、リンディ・ハラオウンという者です。何やら特殊なスキルをお持ちのようですね』
「あらら、今のやり取りでバレちゃいましたか」
『その辺はともかく、特殊能力についてはこちらの許可がないと使用を認めないよう一任されてます。よろしいですか？』
「あぁ、大丈夫です。その辺のお話はリスティ・槇原を通して聞いてますので」
『そうですか。では、警備の方をよろしくお願い致しますね』
どうやら無線交信が終わったようだ。
「リスティさんともお知り合いですか？」
リスティ・槇原。
恭也が警察関係でよくお世話になる人だ。十年前のコンサートの時も警備主任をやっていたらしく、今回警察関係の総指揮を担当している。
「彼女もさざなみ寮の元住人ですよ。私の方が二つ年上かな」
そういえば寮で見かけた事があったな、と今頃になって思い出していた。
「有事には全力をもってあたらせてもらいますので、安心して下さい。ＨＧＳ関連のバックアップも万全ですので」
「よろしくお願い致しますね」
そんなやり取りをしていたら、恭也の携帯が振動を始めた。
「はい、高町です」

『恭ちゃん、お話まだ終わらないの？ゆうひさん達待ちくたびれてるよ？』
「わかった。すぐ向かうと伝えてくれ」
『わかったけど、きょ…』
通話終了。美由希が何か言いたそうだったが、長くなりそうだったので、強引に切った。
「そろそろ移動しましょうか。催促の電話が来ましたので」
「いまの…美由希？」
「あぁ」
「怒ってたんじゃない？」
「わからん。すぐに切ったから」
「恭也も相変わらずね」
恭也のぶっきらぼうぶりに、苦笑するフィアッセ。
「では、知佳さんも行きましょうか、カフェに」
「ですね。ゆうひちゃんに誘われましたし」
かくして、恭也達は残りのメンバーがいるカフェへと向かったのだった。

再会と理由（後書き）

はいっ、コンサート側です
こちらはとらハ色が強くなってますね
しかも、色んなルートの設定がごちゃ混ぜ（お
その辺はつっこまない方向で…

とらハを知らない人のための説明が多くなっていますね
本当は、この後一悶着が起こる予定なのですが
ＨＧＳ関連で長くなってしまったので一旦切りました
その辺は次回のお楽しみ♪

もう一つのお話のコミケ準備で忙しいです
今月中にもう一本書けるといいなぁ…

走る戦慄

「さっきのには驚かされたけど、取りあえずは順調ね」
「魔法とは違ったけど、ああいう人もこっちの世界にはいるんだね～」
先ほどのやり取りを思い返すリンディとアルフ。
海鳴ドームに隣接する高層商業ビル。
そのビルの中で、ドームを見下ろせる高層階の一角に『アースラ警備』の常駐ルームはあった。玄関&応接ルームは普通のオフィスと変わらないが、一歩奥に進むと現代科学では説明できない空間が広がっていた。
「ステージエリア、異常なし」
「楽屋エリア、異常ありません」
「スタッフフロア、異常なし」
「出入口も全て異常ありません」
中では、ミッドから派遣されてきた時空管理局員が約五名ほど仕事をしていた。基本的には五名を一グループとして三交替で警備にあたっているようだ。
「でも、レティもよくこんな人数を用意できたわねぇ」
「提督の話だと、人がたまたま余っていたんだってさ」
「たまたま…ねぇ」
レティの人材管理能力も侮れたものではないらしい。急な依頼をしても要望通りの人材が必ず用意される。
「機材もなかなかな物を用意してくれたわね…ポチッと」
目の前のスクリーンパネルのボタンを押すと、先ほどのみんなの会話に出ていたカフェが映し出された。
「おぉ、皆集まったようだね」
「こうしてみると、高町家も人脈が半端ないわね」
面子だけみても世界的歌手に音楽学校の校長、国際的な救助隊の

室長…肩書きが一般人のレヴェルを超えてる。
「その中心がなのは、なのかな」
「まぁ、否定できないわね」
十年前に出会った一人の少女。
あの出会いが、今現在こうなるとは誰が予想できただろうか。今思えば、あの出会いは必然だったのかも知れない。アルフにしてみれば、出会ったときは敵同士だったのに、今は同じ職場仲間。これを運命と言わずして何と言おう。
「さて恭也さん、うまく渡してくれるかしら」
「ん、何を？」
「管理局からのプレゼント…お守りみたいなものかな？」
「何か企んでる？お母さん」
「出来るだけの策は講じておきたいから」
「？」
リンディの意図が読めず、アルフは首を傾げるしかなかった。

「遅くなってすまない」
「話が長くなっちゃって…ごめんね～」
開口一番、謝罪する恭也とフィアッセ。
「ホントだよ～」
「お腹すきすぎて倒れてまう～」
「直球ですね…」
ストレートに文句を言うシンガーに苦笑する美由希。
「ごめんね～ゆうひちゃん。大事な話だったから…」
「ま、ここは知佳ちゃんの可愛さに免じて許すとしよか」
「さて、おっひる～。ということで、何か私らに特別にお弁当が用意されてるんだって」
待ってる間に説明を受けていたのか、アイリーンがそんな事を言ってきた。

「お弁当？」
「うん。何かね、イリアが外で私らにって渡されたんだってさ」
「あぁ、イリア帰ってきてるのね。後で別件の打ち合わせしないと」
イリア・ライソン。
クリステラソングスクールのマネジメントを一手に引き受けてる人物。フィアッセの恩師でもある。彼女がいないとスクールが成り立たない、とまで言われる。
「しかし…何でウチらにだけ？」
「さぁ～ね～。そこまでは聞かされてないし」
「取りあえず、いただきましょうか」
美由希がそう言って、包みをテーブルに載せ紐解くと五重の重箱が姿を現した。
「ほぅ、重箱ですか」
「お手製のお弁当のようね」
素直に感心する恭也とフィアッセに対し、
「こ、これって…」
「ま、まさか…」
驚きの表情を隠せないゆうひと知佳。
「ん、どうしたの？ゆうひ」
アイリーンが疑問に思ったのか、ゆうひに聞いていた。
「どう思う？知佳ちゃん」
「ゆうひちゃんも同じ可能性を考えてる？」
「そのようやね」
残りの四人はただその様子を見つめるしかなかった。
「ま、食べてみればはっきりするやろうし」
「そうだね～」
「では、いただきましょう」
フィアッセの音頭で、各々が料理を小皿に取り食事開始となった。
「！」
一口食べた瞬間、ゆうひと知佳の疑念が確信に変わった、という

表情をしていた。
「耕介くんのご飯や～」
「お兄ちゃんのご飯だ～」
二人同時に同じ趣旨の台詞を発し、破顔していた。
「まさか、こんなところで食べられるなんて…」
「ん～、めっちゃ幸せや～」
「そんなに美味しいの？」
たまらず、アイリーンは聞いてきた。
「そんなん愚問や。食べてみぃ」
そんなゆうひの言葉で、残り全員が重箱に箸をつけた。
「確かに…うまい」
「ホントだ～」
「めちゃくちゃ美味しいじゃん。これがゆうひを寮に帰らせる理由なんだね」
「お店に出せるレヴェルですね」
それぞれ感想を言い合う。その間も、箸が止まる事はなかった。
「ところで…耕介って誰？」
「あぁ、さざなみ寮の管理人兼料理人、槇原耕介くんのことや」
「え…女子寮なのに管理人は男性なんですか？」
至極当然な疑問が美由希から飛び出した。
「特に決まりはないので…最初の管理人も男性でしたから」
「耕介くんは三代目なんよ」
「ほほ～」
「槇原ってどこかで聞いた事があるな」
「…あ、恭ちゃん。フェレットでお世話になった動物病院が確か」
おぉ、そう言えば、と恭也も思い出したようだ。
「愛さんを知ってるんですか？院長の」
「昔お世話になった事があってね」
「愛さんと耕介君はいとこ同士やったな、確か」
「世の中って意外と狭いですね」

フィアッセの一言に皆が頷いた。

「さて、忘れないうちに渡しておかないと」
食事が一段落した頃を見計らって、恭也はおもむろに呟いた。
「何を渡すの？恭也」
「ウチの警備責任者からの頼まれものさ」
気になるフィアッセに答えながら、恭也は懐から小箱を取り出す。
「お守り代わりに好きなのをご自由にお使い下さい、との事です」
箱の中には、ピアスからネックレスからアクセサリーが所狭しと入っていた。
「これ…ホンマに貰てええの？」
「えぇ、ステージに立つ出演者限定ですが」
「あ、そういうことなのね」
「どういう事です？」
「これで出演者を守る事が出来るんですよ」
「ステージに腕章はおかしいしね」
「…あ、腕章の替わりなのね」
「特殊な電波が常に出ていて、ゲートをスルーパス出来ます、という事でした」
「そういうのは、ウチらには有り難いやね」
「ゆうひさんから残りの方に配布して下さい」
「ん。任されたよ～」
「ゆうひだけじゃ心配だから、私も手伝うよ」
「何やアイリーン、ウチを信用してへんな？」
「たまにポカやらかすからなぁ、ゆうひは」
「確かにそうね。アイリーン、頼むわね」
「フィアッセまでそう言うんか～？」
笑いの輪に包まれたカフェの一角。周りに一瞬注目されたが、すぐに普段の喧噪に戻っていった。

さらに時間が過ぎて、ステージでは最終リハーサルが始まっていた。
演出や立ち位置、ライティング、舞台装置…等の最終確認が通しで行われている。時折、確認の為に演奏が止まったりもするが、概ね順調に進んでいる。
「今見ておかないと、明日見てる余裕なんてないもんね」
「そうだな。基本的に監視はリンディさんがやってくれるし、人員も配置してある。俺たちは、ここを重点的に守ればいい」
「ボディガードの特権だね」
「そう思う事にしよう」
何気ない兄妹の会話。でも、肉眼での監視は怠っていない。目線の先には、音楽学校の校長が客席の中央から演出や演奏に関する指示を飛ばしている。
「ホント、フィアッセもタフだね～」
「まぁ、声の病気だったからな、昔は」
それがＨＧＳ関連だったとは昔には知るよしもなかった恭也だったわけで。
“同じ人種として守らなければいけないんです”
先ほどの知佳の言葉がリフレインする。
なら俺は同じ“人間”として守らないとな、と心に誓う恭也であった。

「リハーサル、順調に進んでいます」
「周辺も異常はありません」
監視員の報告が次々に上がってくる。
「順調だね、お母さん」
「このまま何も無ければいいんだけどねぇ」
アースラ警備内モニタリングルーム。

リハーサルの様子を、モニターから見守るアースラチーム。
「心配性だなぁ、お母さんは」
「自分でもそう思うけど…こういう時って、嫌な予感がよく当たるのよねぇ」
そんな事を話してる刹那だった。
「…あっ！楽屋フロアの入口で警備員同士が揉めてます！」
「何ですって！？」
一気に緊張が走るアースラスタッフ。
「状況はっ！？」
「いきなり警備員同士が揉み合いになって…あっ、一人が強行突破！」
「どうやら無人の楽屋に向かってるようです」
「人員の配置は？」
「奥に一名だけ配置されているだけです！」
「応援必要でしょうか？」
「問い合わせてみましょう。…もしもし、恭也さん。聞こえてますか？」
『はい。クリアに聞こえます』
「今、楽屋フロアに侵入者が入り込んだ模様です。目的は不明。目標は無人の楽屋と推測。そちらには一名だけ人員が配置されてますが、応援を要請しますか？」
現状を出来るだけ詳しく説明するリンディ。
『なるほど。変装して潜り込んでたわけですか。まぁ、想定内です』
「前日だからって、警戒レヴェルを下げてた隙を狙われましたかしら？」
『まぁ、誘い込む狙いもありましたから、問題ないです』
少し焦り気味のリンディに対し、余裕を見せる恭也。
「応援要請は必要ないですか？」
『大丈夫、応援は必要ない』
恭也とは違う声が返ってきた。該当部署の警備担当者のようだ。

『聞いていましたか。お願いできますか？』
『…了解した…』
声の主に対して依頼をする恭也。
「大丈夫でしょうか…」
『あの人に任せておけば大丈夫です』
「わかりました。状況を見守ります」

楽屋フロア。
今はリハーサルで皆が出払ってるので、人気がない。
そこに、警備員が現れた。…が、警備というより何かを物色してる様子がうかがえる。
「へっ、割と簡単に突破できたな。もっと厳しいって聞いてたのに拍子抜けだな」
男はそう言いながら、目的の場所を探し続けた。
やがて、一つの部屋のドアを見る。
『クリステラソングスクール様　控室』
「ここかぁ。…よし」
ドアノブに手を伸ばしたその瞬間、とある方向から声が聞こえてきた。
「警備員がここで何をしている」
誰もいないと思っていた警備員は、驚きながら声のする方向に顔を向けた。
「…もう一度問う。此処で何をしている」
「が、楽屋の警備の応援を頼まれまして…」
咄嗟に喋る警備員。
「応援は頼んでない。此処は私一人で任されてるエリアだ。…貴様、何者だ」
落ち着いた声ながら、警備員を威圧している。
「いやぁ～ただの警備員ですよ？」

と言いながら背中に手を回し、暗器を手にして襲いかかってきた。
しかし、軽々と避ける担当者。
「その武器の捌き…『龍』の生き残りだな？」
「…こんな早くにバレるとはな。お前こそ何者だ」
「龍の残党ながら、私を知らないとはな。お前に名乗る名はない」
そう言って、二刀を構える。
ジリジリ間合いが詰まる。
「せやっ！」
男が先に動いた。一気に間合いを詰める。半分になったとき、もう一方が男の視界から消えた。
『御神流奥義・裏　其ノ三　射抜』
そんな声を男は聞いた気がした。
「ま、まさか、おまえ…は……」
言い終えることなく、男は床に倒れた。
その直後、一人の女性が走り寄ってきた。
「無事ですか？美沙斗（みさと）」
「あぁ、問題ないよ、弓華（ユンファ）」
「まぁ、大丈夫だとは思ってましたが…」
「心配かけてすまないね、先輩」
『終わりましたか？美沙斗さん』
頃合いを見計らってたのか、恭也が無線で話してきた。
「あぁ、終わったよ。やはり龍の残党のようだ」
『今警察を向かわせてますので、自害しないよう拘束しておいて下さい』
「わかった。その辺は彼女に任せよう」
そうして容疑者を拘束しているところへ　、警察組織が駆けつけてきた。
「制圧ご苦労。警視庁特捜課第六班警備主任、リスティ槇原だ」
「ご苦労様。香港警防隊所属、御神美沙斗と…」
「同じく、菟弓華（ト・ユンファ）です」

「正式に警備依頼しているとはいえ、何故香港の警察が日本に来ているんだ？」
「十年前の借りを返しに来ているだけです」
「私はその付き合いで」
「ふむ、まぁ深くは追求しないでおこう。容疑者の拘束に感謝する」
そう言い残して、部下共々容疑者を連れ去っていった。

「へぇ～、母さんも来てたんだ」
『ま、まぁ…そういう事だ』
「助かりました、美沙斗さん」
『さっきも言ったが、十年前の借りを返しに来ただけだ』
『でも、娘と仕事したいとも言ってたよね』
『弓華、そこは言わなくてもいい』
「ありがとう、母さん」
『礼は全部終わってからだ』
『そうですわね。美沙斗さんに…弓華さんでしたわね。アースラ警備の責任者、リンディ・ハラオウンと申します』
『あ、ご丁寧にどうも』
『現場の状況は逐一こちらでも調べてますので、何かありましたらまたよろしくお願いします』
『こちらこそ。龍が絡んでいるとなると、こちらとしても見過ごせませんからね』
『では、引き続き警備をお願いします』
『了解した』
事後になってしまったが、互いに挨拶を済ませて無線は切れた。
『恭也さん、これも隠し球の一つですね？』
「そう言う事になりますね」
『誘い込むという作戦、最初聞いたときはビックリしましたわ』
「事前に公開しておけば、必ず来ると踏んでましたから。本格的な

警備はこれからです」
　これでテロリストがどう出るか…一種の賭けのようなものである。
これで警戒レヴェルは上がるのでそうそう正面からは来ないはずだ。
「ここからが正念場です」
『ですわね。こちらは、他に侵入者がいないかスタッフリストをフルチェックしてみます』
「お願いします」
　一部のテロリストのあぶり出しには成功した。
　だが、今回はバックの規模が読めていない為、どう転ぶかは明日次第。再度気を引き締めなければ、とリハーサルを見ながら思う恭也であった。

走る戦慄（後書き）

月が変わる前に更新する予定が…ｏｒｚ

とりあえず、小さな事件が起きてます
この辺の展開は初期のプロットから
決まってました
結構とらハ色が強くなってるような
なってないような…＾＾；
ようは、美沙斗を出したかっただけ＜マテ
美沙斗＆弓華はセットでこれからも登場予定？

次回は…いよいよコンサート当日かな？
色々考えてますが…どうしようかな

遅筆ですが、頑張ります

運命の当日～Side　N～

月村家朝六時頃。
リビングでバッタリと、月村姉妹が顔を合わす。
「おはよう、すずか」
「おはよう、お姉ちゃん。…もしかしてまた徹夜？」
「あ、バレた？急ぎの依頼が急に入ってきて、さっき終わったところ」
忍は、大学時代に理系の才能を評価され、ロボット開発チームがある企業に就職。直接ではないけど開発に携わっていて、たまに手伝っているらしい。大学生のすずかも理系に進学しているので、たまに手伝わされる事もあるらしい。
「言ってくれれば手伝ったのに…」
「すずかは、今はなのはちゃん達の相手をする事が重要でしょう。こっちは気にしないでしっかり遊んできなさい。親友でしょ？」
「いいの？」
「本当に手が足りなければ、こっちから呼ぶから。ほら、みんなを起こしてあげな」
「お姉ちゃんは？」
「今から一眠り。コンサート行くときに起こして」
「うん。ノエルに頼んでおくよ」
そう言い残して、すずかは途中から加わったファリンと連れだって客室へ向かっていった。
「さぁ～てと、ねこ二号とおねむになるかな～」
そう呟いた忍は、飼い猫がいるであろう自分の寝室に向かうのだった。

「みんなおはよう～」
「皆さんおはようございます。朝ですよ～」

声をかけながら客室に入った二人。
「おはよう、すずか」
「すずかちゃん、おはよ～」
「なのはちゃんとフェイトちゃんはもう起きてたの？」
「仕事柄、早起きには慣れてるので…」
早起きの二人に驚くすずかに対し、苦笑する教導官。
「ＺＺＺ…」
「ヴィヴィオちゃんはさすがに起きてないか」
「昨夜はしゃぎすぎたから、今日はお寝坊さんかな？」
そう言うフェイトの発言に苦笑するすずか。
「そして…起きてない人がもう一人…」
なのはが、隣に横たわっている親友に目線を落とす。
「アリサちゃんも負けず嫌いだから…」
「そういうところは変わらないね」
昨日の昼食イベントの後に行われたゲーム大会。忍が色んな種類のゲームを引っ張り出してきて、大盛り上がりだった。昔一緒に遊んだモノから最新鋭のモノまで選り取り見取り。初めて見るヴィヴィオも興奮して、みんなで教えてあげながら一緒に遊び倒した。所用で残念そうな顔をしながら席を外した忍と、眠気が限界に来ていたヴィヴィオを寝かせた後は、罰ゲームをかけてさらに盛り上がったのだった。
「ところではやてちゃんは？」
「はやてなら…」
フェイトが言いかけたところで、客室のドアが再度開いた。
「おぉ、みんな起きてたんや。おはよう」
「どこに行ってたの？」
「ちょう洗面台を拝借してきたんや。顔をスッキリさせる為にな」
「あら、綺麗に落書きが消えてるね」
「さすがにあのままでは…ちゅうか、みんな寄ってたかったわたしに集中砲火浴びせてからにぃ～っ」

はやてのゲーム不得意が発覚するやいなや、負けたら顔に落書きするというトンデモ罰ゲームが提案され、結果はやての圧倒的敗北が決定し落書きされまくるという始末となり、さらにそのまま就寝というオチまでついたらしい。
「油性でやってたら、洒落にならなかったよねぇ」
「別に油性でもかまへんかったよ？」
「なんですか、その芸人魂は…」
「そんなのずぇ～～ったいに認めな～～～いっ！」
「うわっ！」
いきなり絶叫を発した親友がむっくりと起き上がった。
「……あれ？」
「おはよう、アリサ」
「アリサちゃんおはよ～」
まだ半分寝ぼけてる様子だったアリサだが、周りの反応を見てようやく睡眠から覚醒したようだ。
「おはよう…。何か、もの凄い理不尽な夢を見た…」
「どんな夢？」
「あたしがはやてにゲームでボロ負けする夢だった」
「それ、理不尽なん？」
夢の中のお相手だったらしいはやては、堪らず苦笑していた。
「…う～、取りあえずシャワー浴びたい」
「ファリン、案内してあげて」
「わかりました。アリサさん、こちらですよ～」
「ん…」
まだ足取りがおぼつかないアリサだったが、ファリンと共にシャワールームへ向かっていった。

「さて、今日はどうしよっかねぇ～」
朝食後の席で、唐突のアリサによる発言だった。
「今日は例のコンサート見に行く予定でしょ？」

すずかは当然の予定である事項を口にした。
「いや、コンサートは夜やからねぇ」
「そう。それまでどうしようか？っていう話なのよ」
「え、もしかしてノープラン？」
フェイトが驚いて聞いてきた。
「思ったよりも時間が空いたからね」
取りあえずどうしようかといろいろ思案している様子のアリサ。
だが、妙案が浮かばないらしく、苦悩の表情が見て取れる。
「あ、それなら…」
おずおずと、なのはが手を挙げた。
「はい、高町さん。発言を許可します」
「どんなキャラなの、それ…」
フェイトが軽く呆れていた。
「みんなで聖祥に行かない？」
「聖祥…に？」
みんなで目を丸くする。
聖祥…なのは達の母校。なのは達三人は中学まで、アリサとすずかは高校まで通った学校である。本来は、幼稚園～大学までエスカレータ式の割とお嬢様色が強い有名な私立学校である。
「来年、ヴィヴィオも学校に通わせようかっていう話があって、ミッドと地球じゃ違うかも知れないけど学校がどんなところか、雰囲気だけでも体験させたいなぁと思ってね」
「へぇ～、そんな話があったんだ」
「うん。騎士カリムから先週打診があったの。もし良かったら、こちらで手配しますが？ってね」
「カリムの手配なら安心や。Ｓｔ（サンクト）．ヒルデ辺りでも通わせるんかな」
「Ｓｔ．ヒルデ？」
「うん、カリムの出身校なんやて。Ｓｔ．ヒルデ魔法学院。ベルカに限らず魔法を勉強するには最適らしいんよ」
「後は本人次第なんだけど…」

「やっぱり子供は学校に通うべきだと思うの」
すずかが珍しく強く反応してきた。
「私達が教えるだけじゃ、限界があると思うの。ちゃんとした専門機関に通って教養を身につけないと、人は成長しないから」
「それは確かに言えるわ。わたしも最初は事情で通えんかったんやけど、通い出してからは勉強が楽しかったんよ。なのはちゃん達にも出会えたしな」
「学校で友達作るのも大事だしね。そういえば、私も学校は海鳴に来てからだったね」
すずかの主張に、はやてとフェイトが呼応する。
「何だかんだで、あたしらの付き合いも十年だしね」
「私とアリサちゃんとすずかちゃんとは聖祥入ってからだから、もう少し長いんだよね」
「言うなれば腐れ縁？」
「腐れ縁言うな」
アリサの一言にみんなで爆笑。
「じゃ、行ってみる？聖祥に」
「賛成～」
「さて、そろそろヴィヴィオ起こさないと」
「そうだね。主役がいないと始まらないし」
そう言ってなのはが立ち上がり、愛娘が寝ている寝室へ向かった。
「じゃ、あたし達は出かける準備でもしよっか」
「了解や」
アリサの音頭で、支度の為にみんなが散開する。
「では、わたしはヴィヴィオさんの朝食でも準備しますか」
そう呟いて、ファリンはキッチンへ移動していった。

程なくして、ヴィヴィオがママの手により起床。朝食摂取後、学校へ出かけるという話を聞いて、目を輝かせていた。かなり興味を持ったようだ。

「がっこう、たのしみです」
そして、月村家玄関前にバニングス邸のリムジンが横付けにされた頃、皆が玄関ホールに集まった。
「みんな、準備は良い？」
「問題なし」
「じゃ、ノエル。後よろしくね」
「かしこまりました。忍お嬢様の件も了解です」
「みなさん、お気をつけて～」
二人のメイドに見送られ、リムジンは母校へ向けて発車した。
「鮫島、校門の少し手前で止めてね」
「かしこまりました。が、何故手前なのですか？」
「通学路の雰囲気を味わう為よ」
「仰せのままに…」
運転手兼執事の鮫島との打ち合わせも終わったようだ。
「という事にしたけど、いい？」
「そうだね。折角だから歩いてみたいね」
「え～、あるくんですかぁ？」
「ヴィヴィオさん？学校は、基本的には歩いて通うところですよ」
娘の不満を、母親が一蹴。
「何か…」
「耳が痛いわね」
なのはの一喝に、何故か反応するお嬢様二人。
「ま、まぁ何事にも例外はあるわけで…」
「わたしは最初車椅子やったしな」
「それはまた別問題かと…」
「でも、小学生の時はバスで通ってたよね？」
「あ…」
すずかの指摘に固まるヴィヴィオ母。
「なのはママ、うそはいけませんです」
「で、でも！中学は歩いたよね？」

「通学バスは初等部だけだから、必然的にそうなる…あ、着いたみたいね。ここから歩くわよ」
アリサがなのはに返答しているときに、リムジンが停車。所定の場所に到着したようだ。
「なんや、学校見えてるやん」
「ヴィヴィオ、そんなに遠くないよ」
はやてとフェイトが呟きながら、さりげなくヴィヴィオをフォローする。
「あれががっこうですか？」
「そうだよ～、私達の母校、聖祥大学付属小学校」
なのは達が出会った小学校時代の、色んな思い出が残っている母校。隣には中学校もある。
「七年ぶり？」
「中学行くときも此処通ってるから、四年ぶりかな？」
「ミッド行って以来見てないから、ほんま久しぶりやな～」
それぞれ、三人三様の感想。
「あ～そうか、なのは達はそうなるよねぇ」
「私達は、たまに遊びに行ってたから…」
「知ってる先生いるかな？」
「校長先生は変わってないみたいだよ」
「今冬休みだから、許可もらえば中入れるよね」
「一応ＯＧだから、大丈夫だと…」
歩きながら、話に花を咲かせる一行。程なくして校門に到着。守衛に話をして許可を取り付けてもらい、中へと入る。
「残念、知ってる先生いなかったわね」
「冬休みだから、全員出勤してるわけじゃないしね」
「しゃ～ないって。気を取り直して色々見てこか」
はやての発言でみんな頷き、学校見学ツアーが開始された。
「まずは、定番の普通教室よね～」
そう言って、アリサが皆を先導してとある教室へ辿り着く。

「ここは？」
「私達五人が一緒だった、四年生の時の教室よ」
「アリサよく覚えてるね」
フェイトにそう言われたアリサは、鼻高々だった。
「つくえがいっぱいある…」
ヴィヴィオの教室に対する最初の印象だった。
「だいたい四十人くらいで一クラスよね」
「地域で違いはあるけど、その位かな」
「へぇ～」
すずかとアリサの説明を聞きながら食い入るように教室を眺めるヴィヴィオだった。
「さて、普通教室ばっか見ても仕方ないから、特別教室へ移動しよう」
「とくべつきょうしつ？」
「うん。勉強内容によって専用の教室を使うときがあるの。音楽を習う音楽室。お料理を習う家庭科室。化学実験などをする理科室。映像を見て勉強する視聴覚室…これくらいかな？」
「後は教室とは違うけど、本がいっぱいある図書室もあるね。無限書庫の小さいバージョンというところかしら」
「規模は全然違うけどな。でも、本好きのヴィヴィオなら気に入るんちゃうかな」
「そこ、いってみたいです！」
補足説明をしたなのはとはやての発言に食いついたヴィヴィオ。次の行き先が決まったようだ。図書室は私の分野とばかりに、今度はすずかが先導する形となった。
「うわ～、ほんがいっぱ～いっ！」
図書室に着いたヴィヴィオの第一声だった。
「大抵の学校にはあるわよね、図書室」
「本を読んだり、資料に事欠かないからテスト勉強なんかもするよね」

「転校したての頃はよく通ったなぁ…」
海鳴に来たばかりの頃をフェイトは思い出しているようだ。
「あの頃のフェイトちゃんは日本語、特に漢字を覚えようと必死だったよね～」
「そうやったん？」
唯一、小三の頃を知らないはやてはフェイトに聞き返していた。
「もう必死だったよ。会話は出来ても、言葉としてはミッド語しか知らなかったから…」
「あたしとすずかでスパルタ教育よ」
「そこまではしなかったと思うけど…フェイトちゃん、覚えるのは早かったからね」
「おかげさまで助かりました」
何故かここでみんなが苦笑する。
「さぁ、このまま他の教室を見て屋上まで行くよ！」
「は～い」

「うわ～、すごいです～」
色んなところを見て回って、屋上に到着。
「ここからの景色って、懐かしいね」
「三人の頃から、お昼をよく此処で食べたよね」
「わたしは途中からやったけど、ここからの景色は飽きへんなぁ」
ぐるりと見渡す一同。聖祥は少し高台にあるので、臨海地区方面の眺望に適している。
「ホント、聖祥（ここ）には思い出がいっぱいあるね」
「ウチら五人のな」
「どう？ヴィヴィオ。学校を見て回って」
「よくわかんない。ひともいないし」
冬休みだから仕方ないとはいえ、こうも素直な感想が出てくると苦笑せざるを得ない。
「じゃあさ、今度魔法学院を見学してみようね。普段の日に」

「うんっ！」
「大丈夫なの？なのは」
「その辺りは、これからご相談」
そう言ってパチンとウインクをするなのはであった。
「さて、お昼と行きたいところだけど」
「どうしようかしらねぇ」
アリサとすずかがお昼の算段を始めた刹那、なのはの携帯が着信を知らせてきた。
「あ、電話。誰だろう…」
マナーモードにしてあった携帯を確認する。
電話の相手は…兄だった。

運命の当日～Ｓｉｄｅ　Ｎ～（後書き）

毎度お待たせしています　ｏｒｚ
何とか完成にこぎ着けました

今回は、始動にかなり時間がかかりました
いよいよコンサート当日なのに
何故か母校見学…あれ？

サブタイトルにもあるとおり
今回と次回は、時間軸が同じなため
なのは側ととらハ側をわかりやすくするために
Ｓｉｄｅ～と追加してみました
次回はとらハ側を朝の時間から書く予定です

前にも書いたけど、そのとき以上に
今回は難産でした　待っていた方ごめんなさい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9036l/

休暇、帰省、さらに演習も！？

2011年10月1日00時36分発行